

京都府埋蔵文化財情報

第83号

荒坂横穴B・C支群の調査	岩松 保	-- 1
棕ノ木遺跡第5次の調査成果	河野 一隆	-- 11
亀岡盆地で認められた地震の痕跡	寒川 旭	-- 15
近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(3)	野島 永・高野 陽子	-- 25
共同研究 京都府内における奈良・平安期の集落構造について	柴 暁彦	-- 37
平成13年度発掘調査略報		45
11. 愛宕神社古墳		
12. 桑原口遺跡第6次		
13. 里遺跡第2次		
14. 里遺跡第3次		
15. 保津車塚古墳第2次		
16. 下植野南遺跡		
17. 木津川河床遺跡第14次		
18. 三山木遺跡第4次		
19. 古屋敷遺跡		
府内遺跡紹介 91. 竹野川河口域の遺跡群		63
長岡京跡調査だより・80		65
センターの動向		67
受贈図書一覧		69

2002年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

荒坂横穴B・C支群の調査

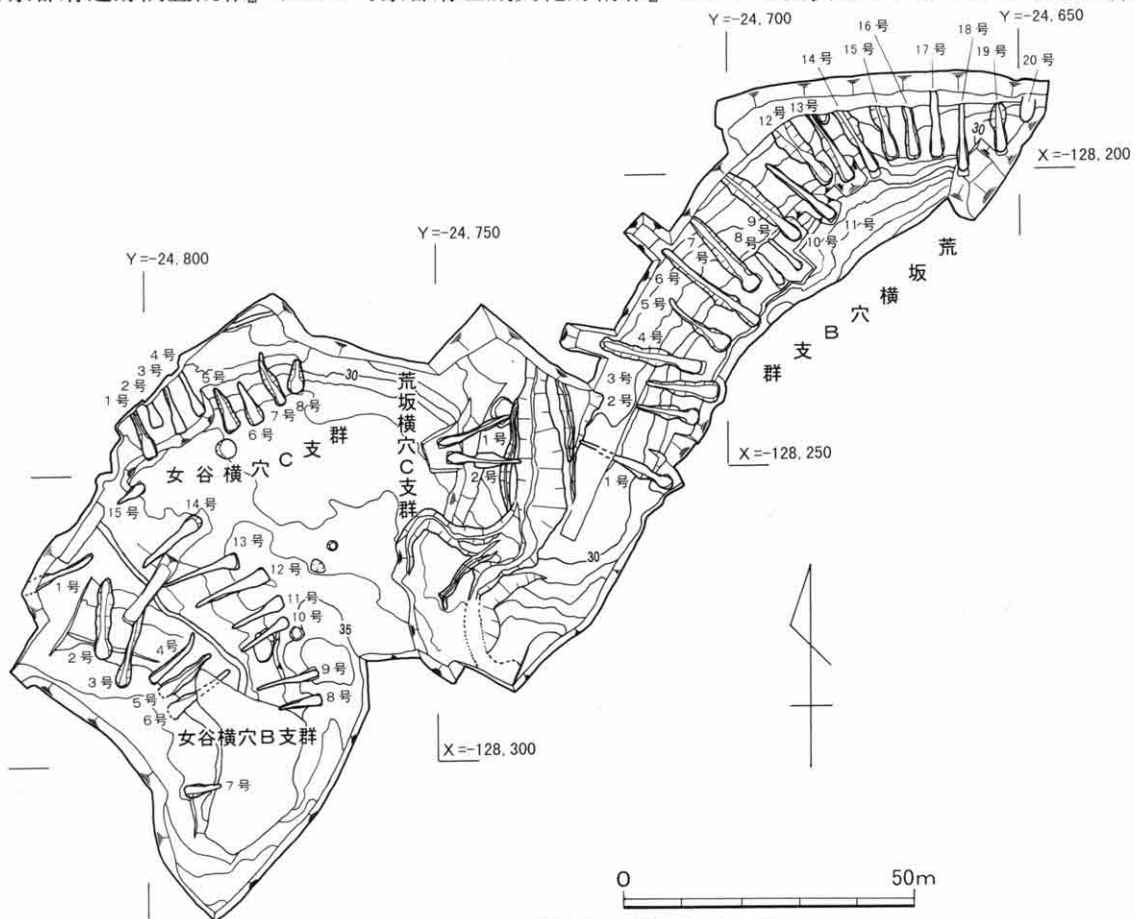
—横穴の構造・閉塞と葬送儀礼を中心にして—

岩松 保

1. はじめに

京都府南部の八幡市から京田辺市にかけての丘陵裾には、横穴が密に分布していることが知られている。この丘陵を縦断して、日本道路公団と国土交通省は、第二京阪道路および国道一号京都南道路の建設を計画したため、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターは、平成11年度に八幡市美濃山地域において建設予定地内の試掘調査を実施した。その結果、これまで横穴の分布が認められていなかった予定地内にも、横穴群が密に分布していることが判明した。

以上の経過を経て、平成12年度には女谷横穴B支群を、平成13年度には、女谷横穴C支群および荒坂横穴B・C支群の発掘調査を実施した。この2年度にわたる横穴の調査により、女谷・荒坂横穴群では、総計45基の横穴を調査した(第1図)。この一連の調査により、南山城地域の横穴に関して、数多くの知見を得ることとなり、女谷横穴B・C支群の調査成果については、すでに、『京都府遺跡調査概報』および『京都府埋蔵文化財情報』において公表しているところである(岩



第1図 女谷・荒坂横穴群横穴分布図

松2001、村田2001、岩松・柴2001)。ここで報告するのは、荒坂横穴B・C支群の調査を中心に、先の報文の成稿以後に得られた新たな知見である。

2. 荒坂横穴群の調査

①羨道の確認

横穴は通常、玄室・羨道・前庭部・墓道等から構成されている。遺骸を納めるための空間が玄室であり、羨道・墓道は玄室に至るための通路、前庭部は通路の前面に造られた空間と捉えることができる。墓道は丘陵斜面を切り通して造ったもので天井を有さないのに対して、羨道は天井が掘り残されてトンネル状を呈していると区別した場合、昨年度と今年度の女谷横穴B・C支群の横穴では、玄室と墓道からなっており、前庭部や羨道は認められなかった。今回、荒坂横穴B支群で調査を実施した結果、羨道を有する横穴を確認した。

荒坂横穴B支群15～17号横穴では、玄室の前面に土層を観察するための畦を設定したところ、その畦内に天井の一部が残存しており、明瞭な形で羨道の存在を認めるに至った(第2図)。これらの横穴で、横穴を作り出している壁面の掘削状況を観察すると、玄室空間を構成するためのやや内湾して立ち上がる壁面とは別に、羨道部にも内湾気味に立ち上がる壁面が認められた。そのため、玄室前面の壁面を子細に観察し、玄室とは別に天井を掘り残したと判断される内湾した壁面が認められるものには、羨道が付設されていたと推定できることが判明した。この点を基に観察を行った結果、荒坂横穴B支群の20基中、完掘したもの19基で、そのうち17基に羨道が付設されていたと判断され、ほとんどの横穴に羨道が付設されていたことが判明した。

また、調査着手前に、天井が残存している横穴の一部を観察しており、その時の知見を加味すると、縦断面で見た場合、玄室部分の天井はドーム形を呈しているのに対して、羨道部の天井は玄室よりもやや低く、平らかに掘削されている。

羨道については、女谷横穴B・C支群の調査では全く認められなかったものである。その要因の一つには、南山城地域の横穴は、砂礫層を中心とした大阪層群を掘り抜いているため、天井は



第2図 B支群15号横穴玄門・羨道部
(左下が玄室奥壁部：南東から)

言うに及ばず、壁面も長期間の間に崩落してしまい、そのわずかな湾曲をも消失してしまったことが考えられる。もう一つは、女谷横穴群は羨道を有さないタイプの横穴ばかりで構成されており、荒坂横穴B支群の横穴のみが羨道を有していて、この支群間における集団の差を示しているという考えである。この場合には、横穴の形を選択する主体は支群を構成していた集団である可能性が指摘

できよう。

前者の場合であれば、羨道が付設されていたことを認定するのは困難である。ところが、女谷横穴群の全ての横穴で、玄室部では内湾気味に立ち上がる壁面を認めていたので、羨道部の湾曲のみが全ての横穴で失われてしまったと考えるのは不自然である。そのため、現時点では後者の考えを採りつつも、断定することは避けておきたい。

②横穴の閉塞と追葬の方法

横穴は、玄室に遺体を安置する時以外は玄門部・羨門部で閉塞されていたと考えられる。北西約0.7kmにある狐谷横穴群の昭和56・57年度調査では、玄門部の床面に、主軸に直交する方向で、幅約40cmの溝が掘られているのが確認され、板戸をはめ込んで閉塞した痕跡と推定されている(久保田1983)。

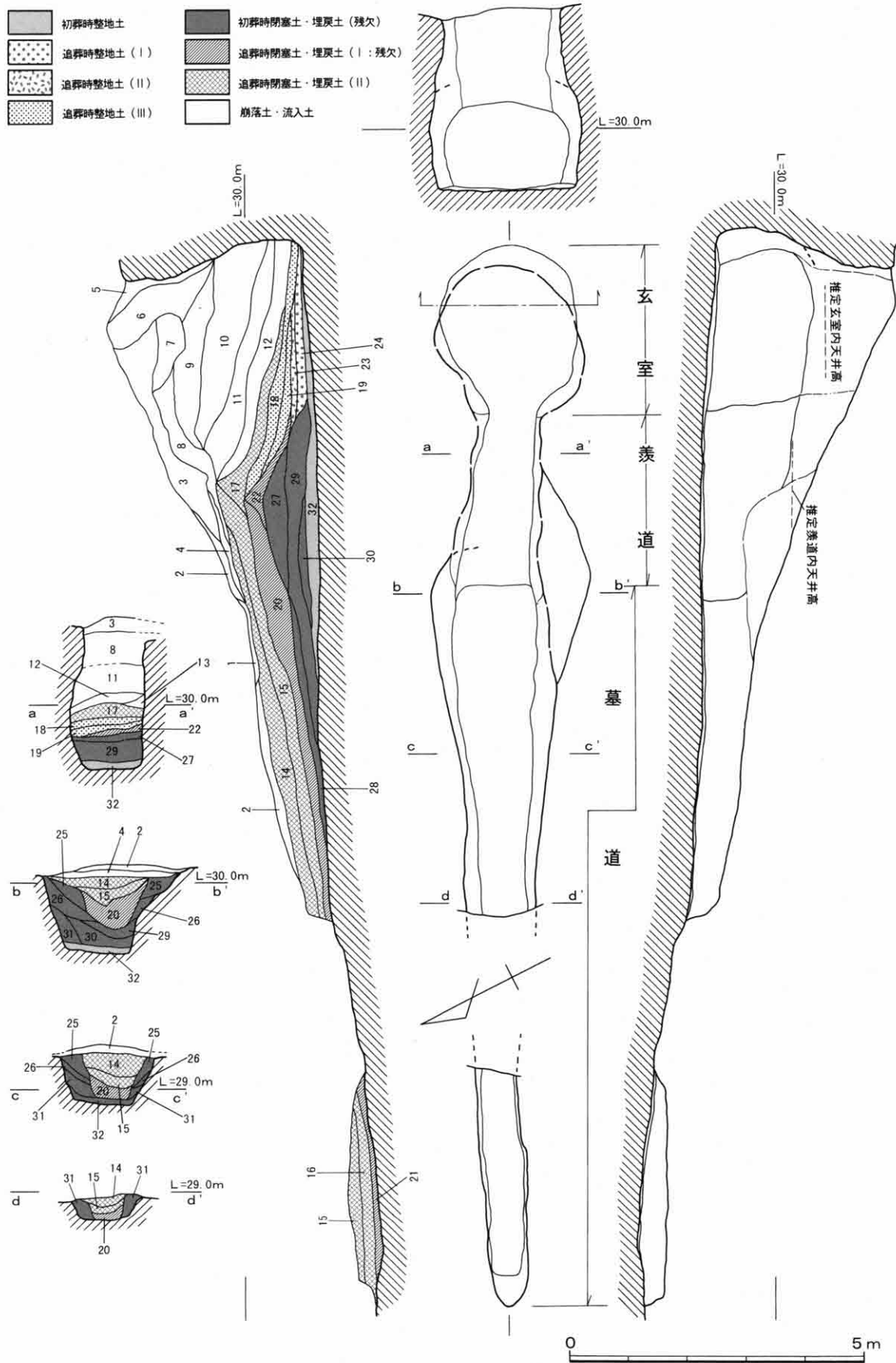
前年度に調査を実施した女谷横穴B支群では、玄門部で閉塞石や溝状の遺構を全く検出できなかった。その代わりに、玄門部から墓道の全面に数10cmの盛土・整地土を確認したので、これを最終埋葬の終了後に板戸を玄門部に固定するための押さえの土と、あわせて墓道全体にわたって数10cmの厚さで土を盛り上げた整地土と考えた。この整地土の直上には、閉塞部から墓道端に向けて、その中央に溝状の遺構も検出した。その内部には多数の石礫が埋まっていたので、この溝を暗渠排水溝と解釈し、墓道内の整地土とともに、横穴使用終了後に、玄室を保全するための施設と判断した。

荒坂横穴B支群では、大形の横穴が造られていることに加え、その残り具合が良好であったので、墓道の掘削高が2m程度残存しているものも含め、1.5m程度の残存高を有する横穴の土層を数多く観察することができた。このような墓道・玄門部分の高さが十分に残存している横穴において、閉塞部分から墓道にかけての土層を観察するに至って、昨年度に暗渠排水溝と判断した溝状遺構が、墓道内に複数回掘削されていることが認められ、最終段階のみならず、横穴を使用している際にも同様の造作を行っていることが判明した。また、その溝内は必ずしも石礫で埋められているものばかりではなく、暗渠排水溝と判断できないものもあった。さらに、墓道上の溝の切り合いに対応するかのよう、閉塞部に盛り上げられた土にも、何回かの盛り直しが認められた。

以上のことから、墓道の埋土上で認められた溝は、追葬などで玄室に入る際に、掘り返して簡易に作った通路と解釈し、玄門・羨門において観察された閉塞部に盛り上げられた土(以下、土による閉塞の意で閉塞土と表記)の盛り直しは、閉塞土を除去した後に再度、土を盛り上げる行為を何度か繰り返した結果と判断した。

横穴の閉塞方法について、荒坂横穴B支群1号横穴を例に見てみたい(第3図)。

まず、砂礫層からなる地山を掘り込んで玄室・羨道、および墓道を構築する。1号横穴の場合、長2.9m、幅2.35mの隅丸形状を呈した玄室に、2.9m程度の羨道が取り付く。12.2mにわたって墓道が構築され、全長18mを測る。壁面の湾曲具合から、玄室内、羨道部の天井までの高さは、掘形底面からそれぞれ1.8m、1.5m程度に復原できる。墓道底の幅は最大1.45mで、墓道端近く



第3図 荒坂横穴B支群1号横穴実測図

では0.6mと狭くなる。墓道の最深部は羨門部で、1.2m程度が現存している。墓道の掘削は、横断で見ると、上方がやや開く逆台形を呈している。この横穴は、その使用時の早い段階に羨道の天井が崩落したようで、奥壁に向かって左側には天井の一部が廂状に残っていたのに対して、右側には天井の崩落面が認められた。そのため、閉塞土が盛り上げてある位置も、羨門部ではなくて、玄門部に位置している。

横穴掘削後に、5～10cm程度の整地を羨道・玄室床面全体に行い、玄室内に遺体の安置と副葬品の配置を行う。その後、土を玄門部の天井近くまで盛り上げて、横穴の閉塞を行う。と同時に、通路である墓道部分も、ほぼ墓道全体が見えなくなるぐらいにまで埋め戻している。

追葬の段階には、墓道上に溝——横穴に至るための通路を掘り返し、閉塞部の盛土部分も身体が入る程度に土を除去する。横断面b-b'で見ると、通路は上幅約1m、下幅約0.5m、深さ0.8m程度の逆台形を呈している。閉塞部分が最も高い位置にあるので、玄室内には、玄門部から下方へ潜り込むように入っているようだ。横穴内への追葬行為等を終えた後に、再度、閉塞部に土を盛り直し、墓道上の通路を埋め戻している。この時、通路内に石礫が多く混じっている場合が多く認められるのに対して、閉塞土にはほとんど石が混じっていない場合が多いので、石礫を除去した土を閉塞土に用い、取り除いた石礫を通路の埋め土に用いているものと思われる。この後、横穴に入り込む際には、再び、墓道上に通路を掘削し、羨門・玄門部の閉塞土を除去し、作業の終了後、再々度、埋め戻すこととなる。この墓道上の通路内の埋め戻し土中に土器を埋納している例も散見されるが、閉塞土内には土器がほとんど混じらない。

第3図の土層図で、上述のプロセスを見てみると、32層の上面で副葬遺物を検出したので、初葬時の埋葬に伴う横穴掘削直後の整地土層と判断した。25～31層が初葬終了時の閉塞土および墓道の埋め戻し土であるが、追葬時に上位を掘り返しているので、正確を期して言うと、その残欠である。24層が追葬時に玄室内を整地した土と判断され、この上に副葬遺物が置かれていた。23層もその土質から整地土と判断されるが、24層と同時のものか、それに後出する別個の埋葬に伴う整地土であるのかは不明である。これらの追葬を行う際に墓道内を掘り返し、その後に埋め戻した土の残欠は20・22層で、墓道端の21層もその一部と判断する。22層は整地土23層の上位にあるが、閉塞土を盛る際に23層の上に流れ込んだと考えれば、23層に伴う閉塞土の一部とも言える。18・19層は玄室内の埋葬に伴う整地土であるのか、単なる崩落土であるのか、確言できないが、閉塞土・通路の埋め戻し土と判断される14・15層の下位にあるので、少なくとも、18層の上面では埋葬面を形成していたと思われる。18・19層では遺物の出土はな



第4図 B支群13号横穴完掘状況(北から)

かった。

基本的には、昨年度と今年度に調査を行った女谷横穴B・C支群および荒坂横穴B・C支群では、上述のように、羨門もしくは玄門部に土を盛り上げて横穴の閉塞を行っている判断されるが、この方法以外の閉塞方法も2例だけであるが確認できた。荒坂横穴B支群4号横穴においては羨門部の地山面で、主軸に直交する方向に穿たれた溝を検出したので、板戸がはめ込まれていたと判断される。また、同5号横穴では、人頭大の石を羨門部に積み上げて閉塞を行っていた。ところが、これらの施設の上には、上述のような、盛土による閉塞が認められたので、板や石で閉塞を行ったのは、それぞれの横穴での初葬時に近い段階と判断される。このように、女谷・荒坂横穴群の横穴においては、板戸閉塞や石による閉塞は全く行われなかったとは言えないが、その頻度はかなり低いものと言える。

③出土人骨と葬送儀礼

女谷横穴C支群5号横穴と荒坂横穴B支群18号横穴で、非常に残りの良い人骨が出土し、当時の葬送儀礼を考える上で重要な知見が得られた。

荒坂横穴B支群18号横穴を例に、その出土状況を概観しておきたい(第6図)。この人骨は最終埋葬面で検出し、玄室の入り口近くで、東側壁に近接して、玄室主軸にほぼ平行し、頭位を玄門



第5図 B支群5号横穴遺物出土状況(北北西から)



第6図 B支群18号横穴人骨検出状況
(左側が玄門方向：西から)

方向に向けて置かれていた。その人骨の特徴より、若年～壮年の女性で、身長150cm程度に復原できる。骨の配置に人間の手が加えられているのは一見して明らかであるが、興味深いのはその一部の骨に交連(關節が本来の関係を留めた位置にあること)したものがあり、その事情を複雑にしている点である。

玄門部側から見ていくと、まず、頭蓋骨と下顎が分離して位置する。これは頭部の骨化により自然に動いた状況ではなく、人為的に分離して配置したものである。この頭蓋骨を基準にすると、胸部付近に、上腕骨・尺骨・肋骨・胸骨・肩甲骨等が集積しているが、一つ一つの骨が遊離していて、すべて動かされた状況であった。この骨の集積の最上位には両脚が位置しており、足元から人

骨を見た場合、右側に左脚があり、左側に右脚がある。左脚については、大腿骨から甲の骨まで、伏臥の位置で交連していた。右脚は、大腿骨が仰臥の位置にあるのに対して、脛骨・距骨は交連しており、伏臥の位置にある。すなわち、右脚の大腿骨が元の位置にあるとして、これを基準に見ると、右脛骨以下は180度回転した裏表の状態にあり、左脚は全体に裏表の位置にある。骨盤は左右の寛骨と仙骨の三つに分かれて、右大腿骨の上に置かれている。左右の寛骨の位置は一方が天地逆になっていたのので、人為的に分割した後に置かれたことが窺われる。

こういった人骨の配置状況となった事情について、第一に考えられるのは、おそらく横穴は空間を保っていたであろうから、後世に、横穴被葬者とは全く関係のない人が横穴に進入し、骨を動かしたはしたが、持ち帰ることまではしなかったという考えである。ところがこの考えでは、右・左脚の骨が交連していることを説明できない。出土状況で見たように、大腿骨は最上位に載っているのので、これを動かさずに、下位の骨を動かすことは不可能である。また、脚を胸部の位置に置いている例が女谷横穴C支群5号横穴でも見つかっているのので、これら2例ともが偶発的要因によるものとも考えにくい。そのため、このような人骨の配置状況は、横穴への骨の安置状況を当時のままに伝えていると判断でき、そのような骨の移動は葬送に伴う儀礼の結果であると捉えることができる。荒坂横穴B支群18号横穴で見られた人骨の配置状況——特に右・左脚の骨が交連しているという事実を積極的に評価したい。

大多数の骨が動かされているという事実と右・左脚の骨が交連しているという事実とをいかに整合的に捉えれば良いであろうか。身体のうち、関節は靭帯や腱で繋がっているため、肉体が腐った後も繋がっている期間がある。そのため、腹部や胸部や四肢の肉は腐ってしまっていて骨化しているが、両脚の骨が腱や靭帯で関節している時機に、体部の骨が一つ一つの骨に分離した状況でまとめ置かれる。その上に交連した両脚を伏臥の状態、しかも左右の位置を入れ替えてていねいに置き、骨盤を3片に分けて大腿骨の上に置いたと考えられる。頭蓋骨は、下顎骨をはずして、別に置いている。腐敗が進み、靭帯が無くなった時点で、右脚の大腿骨



第7図 B支群18号横穴完掘状況(北から)



第8図 B支群2号横穴遺物出土状況(北北西から)

のみが自然に動いて裏表が入れ替わった、と考えることで説明できる。と言っても、骨盤と大腿骨は分離して置かれているが、この両者をつなぐ腱や靭帯は最も強いはずなので、ここについては人的に切断したのであろう。

横穴外で骨化した後に、横穴内に人骨を移動した場合、通常は、肋骨や椎骨といった小さな骨はそのまいうち捨てられて、頭蓋骨や骨盤・四肢骨といった、主だった骨だけを選択して、横穴内に移動するらしい(片山先生のご教示による)。18号横穴出土人骨の場合、肋骨・胸骨・椎骨などの細かな骨は分離して、ほぼ1か所に乱雑に集められていたことから、この位置で骨化させた後に、頭蓋骨や四肢骨のみを動かしたのではない。少なくとも他の場所において骨化させ、この位置に運ばれたものと考えられる。このように考えると、小さな骨まで移動していることから、①他の場所において板の上で死体を骨化させたものをそのまま移動して置いた、②他の場所において骨化させた骨を小さな骨までいねいに集めてこの位置にまで運んだ、という二様が想定される。両脚が交連していることを考えると、前者の蓋然性が高いものと推測される。骨化させたのは、横穴の内・外のいずれかであるかについては、判断できる材料がなく、不明である。

このように、横穴内で見つかる人骨は、必ずしも、横穴内で自然に骨化するにまかせたわけではなく、ある段階で骨を大幅に動かしていることが分かった。このように骨を動かすことは、さきに見たように、その死者に対する葬送儀礼の一環として行っているのは確実である。こういった骨の移動について、田中良之は、大分県上ノ原横穴群の例を引き、埋葬後数年を経た後、横穴を再開口して飲食物供献を行い、脚を二次的移動していると考え、死霊の再生阻止儀礼と捉えた(田中1995)。今回の事例では、“埋葬後数年を経た後”に、“飲食物供献を行った”かどうかについての決め手がないが、基本的に同じ観念に裏打ちされた儀礼と捉えることができよう。

また、いわゆる“後かたづけ”と判断される人骨の集積も、女谷横穴C支群5号横穴の奥壁付近で確認できた。ここでは、男性成人骨(青年)と5歳までの子供の骨が1か所に集められていた。骨化した段階に骨を動かすという行為を葬送儀礼の一環と捉えた場合、これは死後の(少なくとも骨化するまでの)かなりの時間を経過しても、その故人に対しての葬送儀礼が引き続いて行われていくということであるのだから、奥壁に骨を集めるという行為も葬送儀礼の一環として捉える視点が必要である。実際、荒坂横穴B支群5号横穴では、同一埋葬面で2～3体の人骨が(これらは残り具合が良くないが明らかに動かされた状態であった)、玄室床面に拡げられた状態で検出できた。この例から見ると、新たな遺体が安置されても、それ以前の人骨が必ず後かたづけされるわけではない。そのため、こういった後かたづけは、別の契機で執り行われたもの——葬送儀礼の一つと判断したい。

以上のように考えると、古墳時代後期における死後の葬送儀礼の流れは、

①死→②(殯屋または屋外または横穴内)白骨化→③(横穴内)骨の移動→④(奥壁)集積

というように復原できる。この流れに沿って、人間の社会的な死の深まりが増していくのである。

①は生物的な死であり、②は生き返りの希求、③は生き返りの否定、④は、想像をたくましくその意味を述べると、故人の個性の消滅=祖霊との同化と捉えられまいか。

付表 荒坂横穴一覧表

支群名	横穴番号	全長	玄室長	玄室幅		羨道長	埋葬面	礫床	羨道	砂土坑	主要出土遺物	備考
				奥壁	玄門							
B 支群	1号	18.0	2.9	2.0	0.9	2.9	3面	無	有	無	須恵器・土師器・刀子	
	2号	※ 10.6	2.1	2.3	1.0	2.0	1面	有	有	無	須恵器・土師器・馬具・鉄刀・鏝・鉄鏃・刀子	人骨1体。
	3号	※ 11.4	3.5	2.1	1.2	1.7	3面	有	有	無	須恵器・土師器・鉄鏃・刀子・鉄釘石突	
	4号	18.7	4.6	2.4	1.3	2.4	2面?	無	有	無	須恵器・土師器	遺物は初葬面のみの。
	5号	13.2	2.4	2.6	1.8	3.1	1面	有	有	無	須恵器・土師器・円筒埴輪・管玉・ガラス玉・鉄刀・鉄鏃	人骨2ないし3体。閉塞石。羨道にも礫を敷く。
	6号	21.3	3.1	1.6	1.3	2.3	3面	無	有	無	須恵器	遺物出土は初葬面のみの。
	7号	※ 16.7	2.4	3.4	1.4	1.4	1面	無	有	無	須恵器・土師器	
	8号	※ 7.8	4.0	2.1	0.8	—	1面	無	無	無	須恵器・刀子	
	9号	※ 7.4	3.4	1.5	0.6	—	2面	無	無	無	須恵器	
	10号	※ 17.1	4.0	1.9	1.3	1.1	2面	無	有	無	須恵器・土師器・耳環・鉄刀・鉄鏃・刀子	
	11号	14.9	3.6	1.8	1.2	2.1	1面	無	有	有	須恵器・土師器・鉄刀・鉄鏃・刀子	
	12号	※ 11.8	3.2	1.6	1.6	1.6	2面	無	有	無	須恵器・土師器・刀子	
	13号	※ 12.7	3.0	1.9	1.2	3.2?	2面	有	有?	無	須恵器・土師器・鉄鏃	遺物出土は初葬面のみの。
	14号	※ 13.2	3.5	1.8	1.4	2.6	2面	無	有	無	ガラス玉・ミニチュア土器・耳環・鉄刀・鏝・鉄鏃	墓道に多量の遺物。
	15号	※ 8.1	3.1	1.9	1.4	2.3	2面	無	有	無	須恵器・土師器	
	16号	※ 9.1	4.5	1.7	0.9	1.9	2面	無	有	無	須恵器・土師器	遺物出土は初葬面のみの。
	17号	※ 12.1	4.5	1.8	1.6	3.4	2面	無	有	無	須恵器・土師器・鏝・鉄鏃・刀子	
	18号	※ 12.8	3.5	1.8	1.2	2.8	3面?	無	有?	無	須恵器・土師器・刀子	人骨1体。
	19号	※ 9.5	3.4	1.9	1.3	2.5	2面?	無	有	無	須恵器・土師器	
	20号	※ —	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
C 支群	1号	13.1	3.1	2.1	1.2	—	1面	無	有?	有	須恵器・土師器	羨道部分重機による試掘のため不明。
	2号	13.3	3.7	1.8	0.9	—	1面	無	有?	有	須恵器・土師器	羨道部分重機による試掘のため不明。

・単位はすべてm ・※は、墓道端が検出できていないので、現存長を示した
 ・各横穴の項目の数値・事項については、現時点での理解であるので、整理の進展により変更する可能性があることを了承されたい

3. ま と め

女谷・荒坂横穴群の調査も3年目を迎え、さまざまな知見が得られた。今回の報告は、支群間に見られる横穴構造の違いと、閉塞と追葬の方法、人骨の出土状況とその葬送儀礼を中心に、その事実関係と現時点での理解、その考えの方向性を示した。

さきに報告したように、女谷横穴群と荒坂横穴群の調査は、南山城地域の横穴に関して従来保たれていたイメージを一変するものである。横穴が広範囲に分布する状況やそれが小群一支群という構造を有していること、それらを有機的に繋ぐように墓域内に造られた通路、広範囲に一斉に造成された墓域とそれを実現した地域社会など、それらを推定するための多くの知見が得られた。これら以外にも、支群間の関係、横穴と群集墳、および終末期古墳との関連など、検討を加えていくべき事柄は多い。それに加えて、今回報告のように、当時の葬送儀礼や追葬行為の方法を推定するための資料も得られた。この視点は、横穴式石室墳との関連で検討すべきものであり、その地域的なあり方と普遍的なあり方の異同を検討した上で、当時の葬送観念を明らかにしていくべきものとする。

(いわまつ・たもつ=当センター調査第2課調査第3係主任調査員)

付記 現地での出土人骨の観察および性別・死亡年齢の推定は、京都大学霊長類研究所片山一道教授にお願いした。

参考文献

岩松保「女谷横穴(B支群)第2次調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第80号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

岩松保・柴暁彦「第二京阪自動車道関係遺跡平成12年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第101冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

久保田健士「狐谷横穴群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第8冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

田中良之「古墳被葬者の親族関係」(『古墳時代親族構造の研究—人骨が語る古代社会』柏書房) 1995

村田和弘「平成13年度発掘調査略報 8.女谷横穴C支群」(『京都府埋蔵文化財情報』第82号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

むくのき 椋ノ木遺跡第5次の調査成果

河野 一隆

1. 調査の経緯と目的

椋ノ木遺跡は、京都府の南部、木津川左岸に位置する集落遺跡である(第1図)。椋ノ木遺跡は、近世絵図では狭長な微高地が畑として利用され、中世村落が埋没していることは全く知られていなかった。平成7年から、当調査研究センターが発掘調査を実施し、11世紀から15世紀にわたる府下有数の拠点集落の実態が確認された。また、平成12年度に実施した試掘確認調査では、中世遺構面に層位的に古墳時代と縄文時代の遺構面が重複したことも確認された。今年度の第5次調査は、これら先行調査を踏まえ、中世・古墳・縄文の3時代の遺構・遺物の確認はもちろん、木津川氾濫原に立地する遺跡の地勢の特徴も勘案し、自然科学的手法(花粉分析・珪藻分析・軟質X線分析・炭素14年代測定)による地形環境分析を実施して遺跡形成過程を明らかにすることにも努めた。なお、経費は全額、京都府土木建築部が負担し、京都府下水道公社・精華町教育委員会をはじめ、多くの機関から支援を賜った。

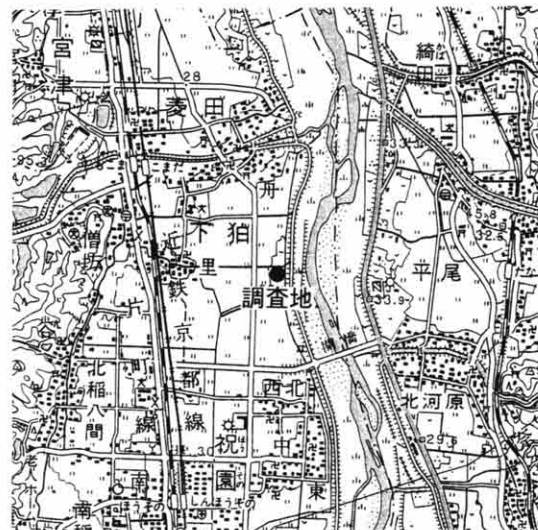
2. 調査概要

(1) 相楽郡条里の施行と復原

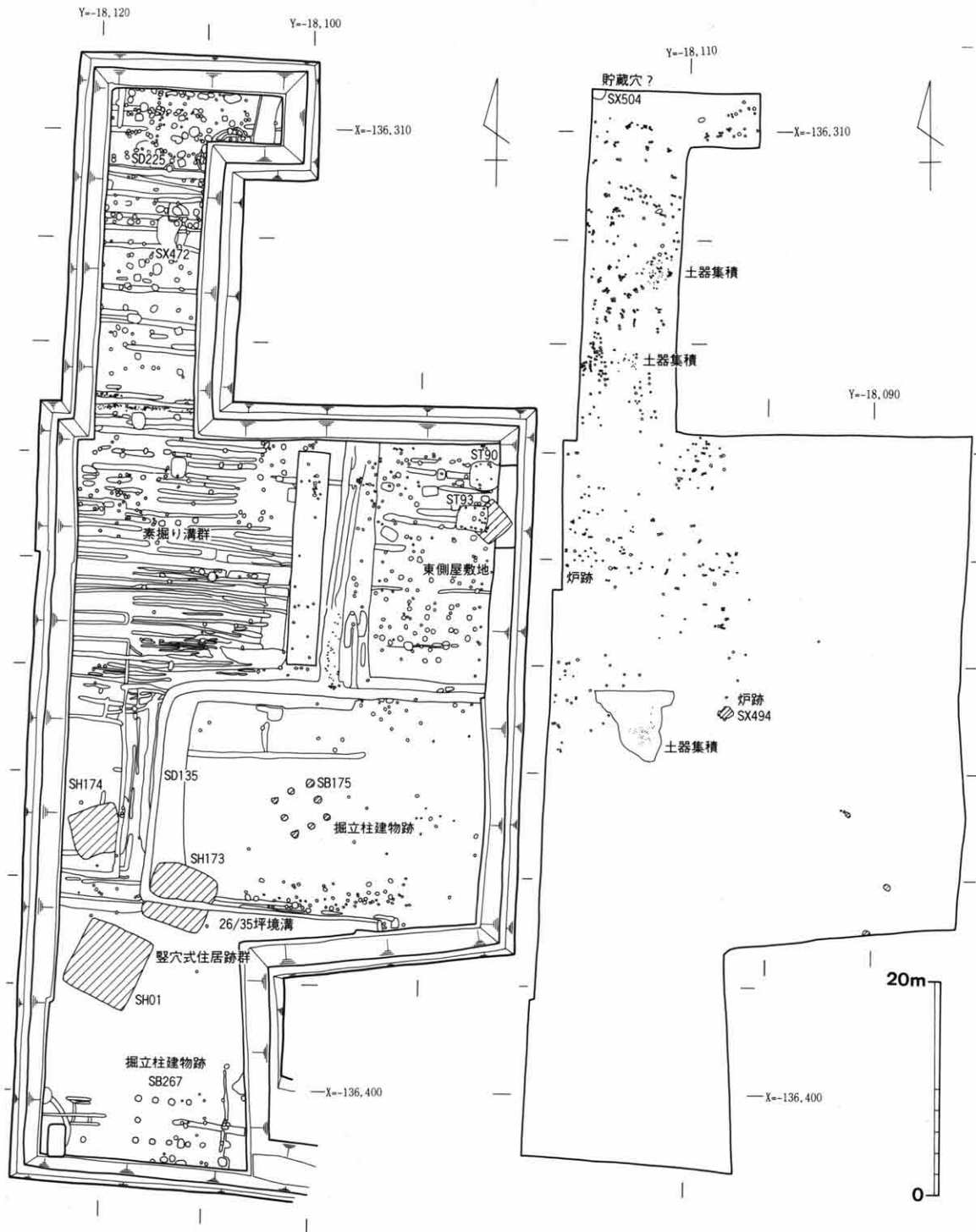
南山城に施行された条里復原については研究の蓄積がある。相楽郡条里は当遺跡の北を東流する煤谷川を北限として綴喜郡条里に接し、坪並は南西隅を1坪として千鳥式に進行し、北西隅が36坪で終わる。当調査区は相楽郡五条に該当し、里名は固有名詞が遺存していないが、調査区南部で検出した坪境溝の北側が35坪、南側が26坪に該当する。この坪境溝からは森島康雄による南山城中世土器編年(以下、南山城編年と略す。)3期、大和型瓦器椀Ⅲ a段階の瓦器が出土し、暦年代で12世紀中葉～後半には当地に条里制が施行されていたことが分かる。

(2) 椋ノ木中世集落の様相(第2図・左)

中世の椋ノ木遺跡は11世紀中葉に、古墳時代に降に離水した微高地に居住が開始される。この時期は井戸や小規模の建物が点在する散村的景観を呈していたが、12世紀中葉に施行された相楽郡条里を契機として、微高地北寄りに庇付建物やそれをめぐる「コ」字形溝が12世紀後半に営まれる。今

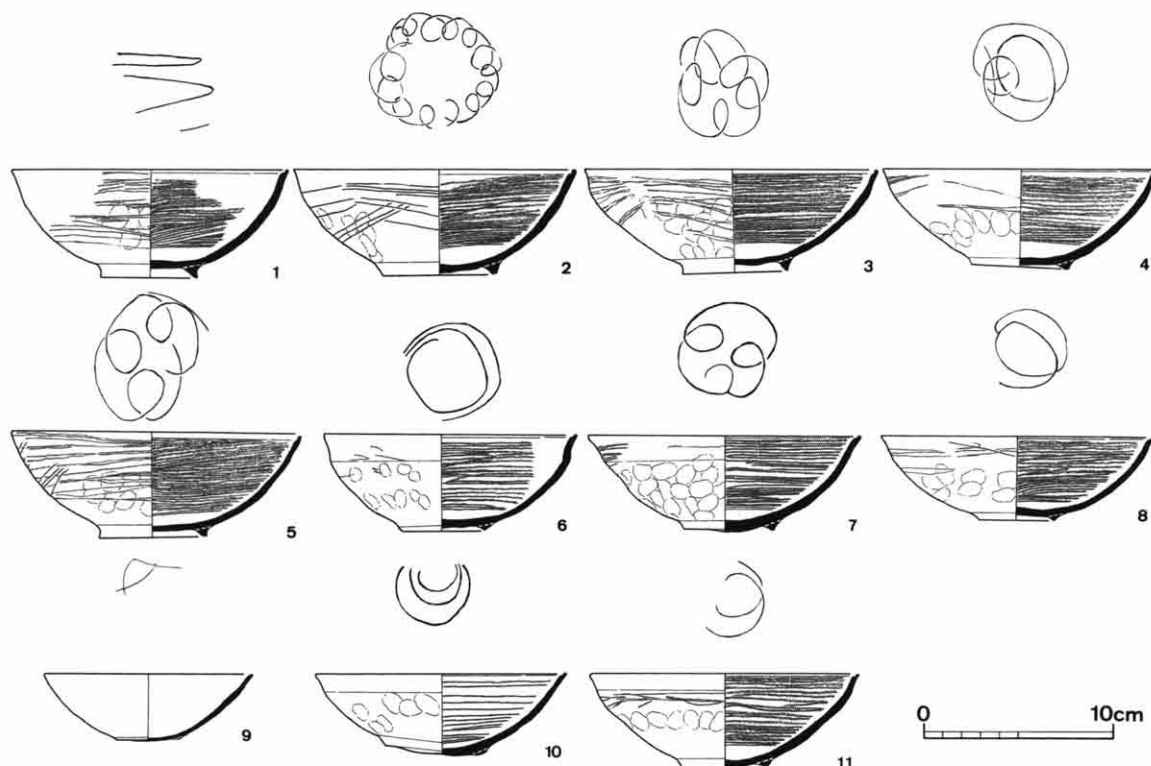


第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 調査区(第8トレンチ)平面図(左:上層、右:下層) (1/600)

年度調査区では、トレンチ北部で検出した隅丸方形土坑S X472や平成9年度調査区で検出したS D512の延長上にあたるS D225が、当該期の典型的な遺構である。なかでもS X472は、土坑底に土師皿・瓦器皿を正位に並置してその後火をかけており、その性格が注目される。当該期の出土遺物は南山城編年3・4期に該当し、中国陶磁では白磁椀Ⅳ類・褐釉四耳壺があり、土師器煮沸具では淀川水系のものが主体であるが、若干の大和系もある。今年度調査で遺構・遺物の出土が最も顕著な時期である。これらの遺構の南側には、12世紀から14世紀にかけて素掘り溝を



第3図 調査区出土の典型的な瓦器碗

密な間隔で営み、耕作地が広がっていた。13世紀中葉には、区画溝を挟んで木津川側にも屋敷地が展開する。詳細な建物配置は未確定だが、川原石を礎盤とした柱穴や方形土坑 S T 90・93を検出した。この方形土坑は並列して設置され、人頭大の川原石が乱雑に投棄されている。また、屋敷地と生産域とを分化するように調査区中央部を大きく画する浅い溝 S D 135が营造される。出土遺物は、南山城編年 5・6期の瓦器碗・瓦器皿、大和型羽釜や少量の青磁碗がみられる。なお、主な瓦器碗を第3図に示した。その後、14世紀には調査区南部に島島が形成され、耕地として利用される。

(3) 古墳時代の遺構・遺物(第2図・左)

古墳時代の遺構は、中世遺構面とほぼ同レベルから竪穴式住居跡 5基、掘立柱建物跡 1基を検出した。竪穴式住居跡は、いずれも方形で 4 主柱穴を持つ型式であり、壁溝と間仕切り溝、炉跡を検出した。また、主柱穴は柱穴の底部に白色粘土を敷いて、礎盤の機能を持たせたものが 3 基ある。掘立柱建物跡は 2 間×2 間の正方形プランで、その内の柱穴の 1 基からは、滑石製の白玉を検出した。出土遺物は、布留Ⅱ式に属する土師器壺・甕・高杯が主体で、須恵器は全くない。

(4) 縄文時代の遺構・遺物(第2図・右)

中世/古墳時代の遺構面から約 40cm 程度下位に、縄文時代の遺構面を確認した。トレンチ北半にピット群、ほぼ中央に炉跡などを検出するが、土器量は少ない。層位的には 2 面あって、トレンチ北側には湿地性堆積がある。炉跡は 60~80cm を測る円形で、同一地点に何度も重複し、周囲にはピットがないことから、屋外炉と判断される。底面には骨片や炭化材を留めるものもある。その他に、長辺 1.1m、短辺 0.9m、深さ約 1.2m を測る楕円形土坑 (S X 504) があり、貯蔵穴と見

なすことができる。出土遺物は、縄文土器のほか、石鏃・剝片がある。縄文土器は、北白川C式～中津式の深鉢が主体で、北白川上層式・滋賀里ⅢA式・突帯文土器もみられる。また、棕ノ木遺跡の縄文時代遺物で特筆されるものに、流紋岩製石庖丁や翡翠製大珠が、それぞれ、第4・3次調査区で出土している。

(5) 地形環境の変遷と棕ノ木遺跡(第4図)

棕ノ木遺跡は縄文中期末に湿地に近接した安定面をベースとして生活遺構が営まれるが、木津川とその支流に由来した微細な粘質土がほぼ弥生時代にわたって堆積し、集落が形成される古墳時代前期には完全に離水した。その後、12～14世紀にかけては屋敷地・耕地が形成され、生活域は管理されるようになった。近世には白色粗砂が中世面を不整合に覆う大規模洪水が複数回あって、土砂流出量が格段に増大したうえに、突発的な洪水が繰り返しおそったことが判明した。これらは、肉眼観察による分析であり、自然科学的手法によっても、現在検討中である。



第4図 遺跡周辺の条里とソイルマーク
1948年撮影(国土地理院)を一部改変

3. まとめ

棕ノ木遺跡は府下有数の中世前期の集落として著名であったが、今年度の調査ではそれを補足する成果のみならず、縄文・古墳時代の集落・生活遺構を確認した意義は大きい。くわえて、河川営力による地形環境の変遷と連動した遺跡形成過程を明らかにすることができた。

(かわの・かずたか=調査第2課調査第4係調査員)

注1 伊賀高弘・森島康雄「棕ノ木遺跡平成7・8年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第81冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

森島康雄「棕ノ木遺跡平成9年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第85冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

注2 藤井整「棕ノ木遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第101冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

注3 森島康雄「南山城の中世土器」(『京都府埋蔵文化財論集』第4集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

注4 森島康雄ほか「6. 瓦器椀」(中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社) 1995、pp328～329

亀岡盆地で認められた地震の痕跡

寒川 旭

1. はじめに

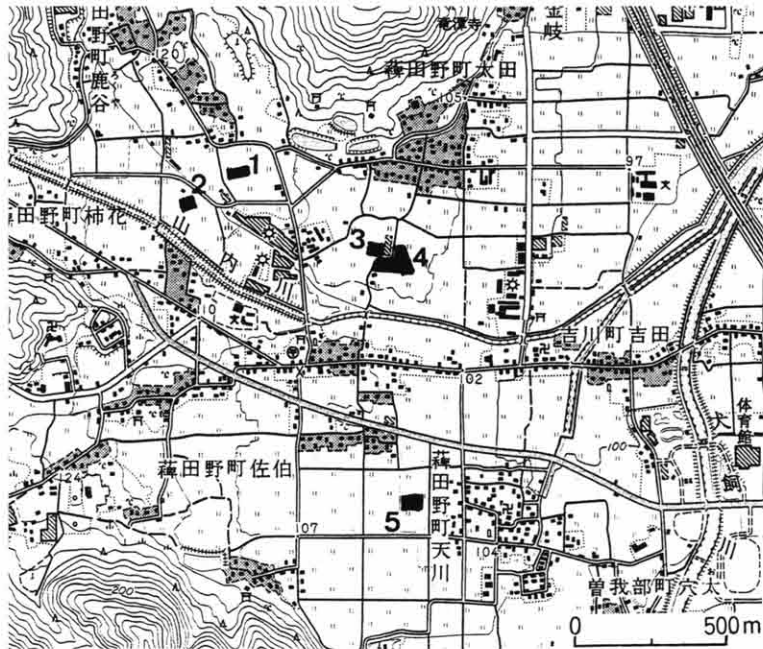
京都府の中部に位置する亀岡盆地においては、京都府埋蔵文化財調査研究センターによる鹿谷遺跡と太田遺跡、さらに、亀岡市教育委員会による鹿谷遺跡と天川遺跡の発掘調査で地震の痕跡が検出されたので概要を紹介する。

2. 亀岡市教育委員会による鹿谷遺跡・天川遺跡の調査

1992年度の鹿谷遺跡および天川遺跡の発掘調査(第1図)で、液状化現象にともなう砂脈が多く^(注1)検出された。

鹿谷遺跡(発掘区B)では、多くの砂脈がゆるやかな曲線を描きながらさまざまな方向に発達していた。その一つについて 断面図(第2図、写真1)を示し、地層をⅠ～Ⅳ層に区分したが、Ⅰ層は黒灰色シルト～粘土、Ⅱ層は灰白色細粒砂、Ⅲ層はうす褐色粗粒砂、Ⅳ層は灰褐色の粗粒砂～礫(Ⅳ'層として灰色粘土層を含む)となる。第2図では2本の砂脈が平行しており、右側の砂脈aはⅡ層から、左側の砂脈bはⅣ層から噴砂が供給されており、Ⅱ層とⅣ層で激しい地震動にともなう液状化現象が生じたことがわかる。

第3図は液状化現象が発生して噴砂を供給したⅡ・Ⅳ層に関する粒度分析の結果を示したものである。砂層の粒度組成について、液状化しやすさについて3段階に分類されているが、Ⅱ層中の試料①はAの“特に液状化の可能性あり”、Ⅳ層中の試



第1図 位置図

黒く示したのが、地震の痕跡を検出した遺跡で、基図には国土地理院が平成12年に発行した2.5万分の1地形図「亀岡」を用いた。

- 1 亀岡市教育委員会による鹿谷遺跡の発掘区B
- 2 京都府埋蔵文化財調査研究センターによる鹿谷遺跡の第9トレンチ
- 3 京都府埋蔵文化財調査研究センターによる太田遺跡の発掘区A
- 4 京都府埋蔵文化財調査研究センターによる太田遺跡の発掘区B(西部がB1, 中～東部がB2)
- 5 亀岡市教育委員会による天川遺跡

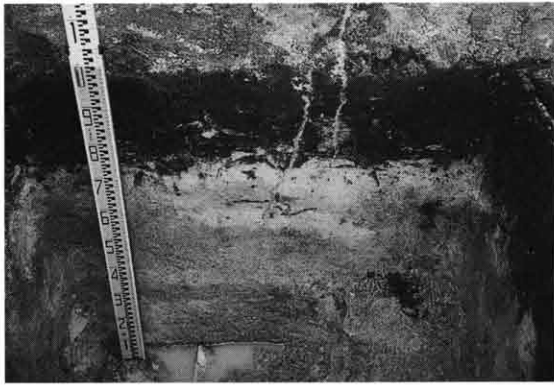
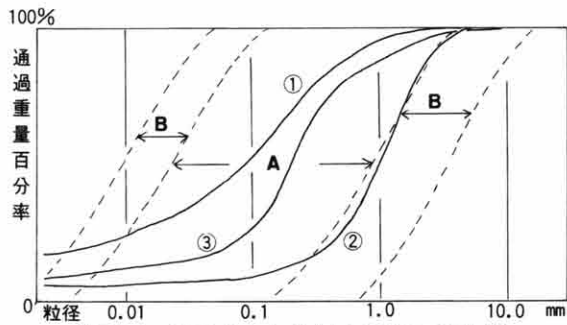
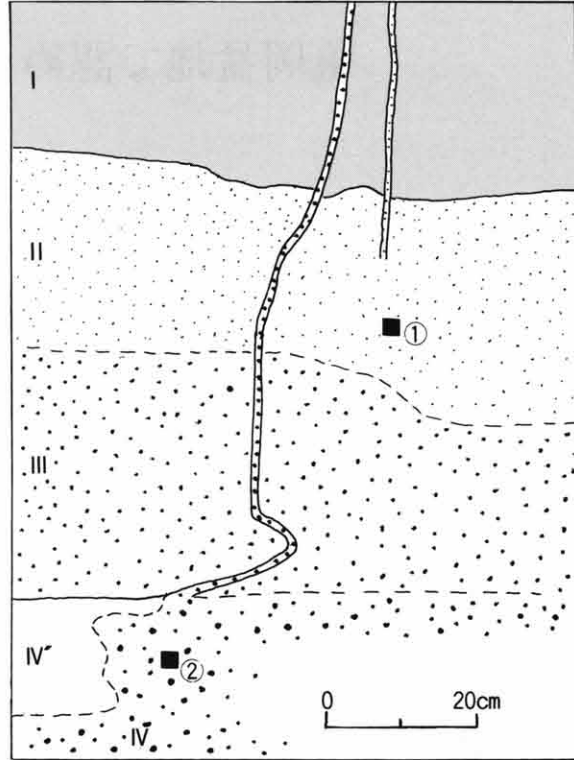


写真1 鹿谷遺跡における液状化跡の断面形



第3図 液状化した地層の粒径加積曲線
試料採取位置は図2・7に示した。
A・Bは液状化しやすさの区分。

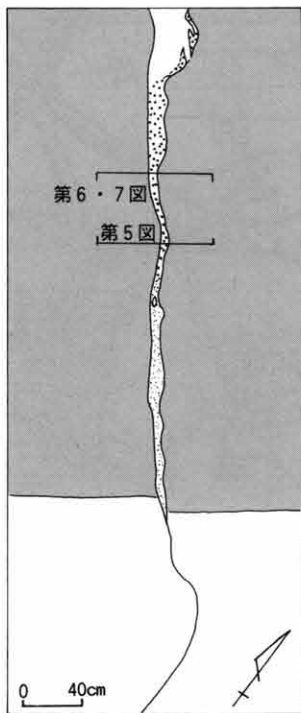


第2図 鹿谷遺跡における液状化跡の断面図
図中のドットの大きさは砂や礫の大きさに対応している。■印は粒度分析試料の採取位置

料②はBの“液状化の可能性あり”となり、II層の方がより液状化しやすい粒度組成であることがわかる。

鹿谷遺跡で検出された砂脈は、古墳時代から室町時代にかけての遺物を含む地層(室町時代の遺構も含む)を引き裂き、江戸時代初頭に開始された水田耕作土の床土部分に削られていた。また、一部では、地震当時の地表面に広がった噴砂が保存されており、江戸時代初頭に開始された水田耕作土に覆われていた。

天川遺跡でも北西-南東方向にのびる3本の砂脈が検出され、地表面から数10cm以深に分布する砂~砂礫層で液状化現象が発生したことがわかった。砂脈の一つは、室町時代の畝に伴う溝の埋土を引き裂き、江戸時代初頭の水田耕作土に覆われていた。

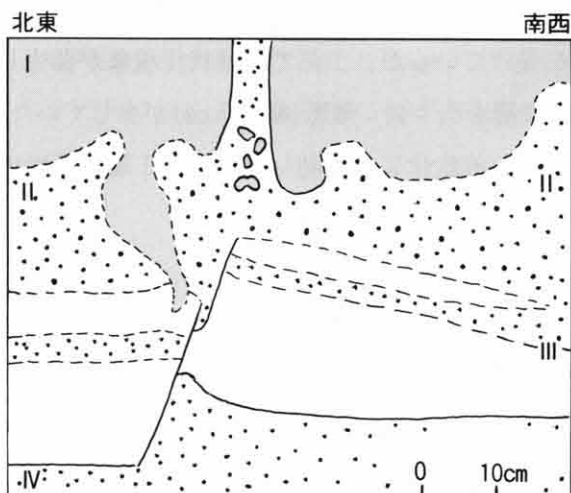


第4図 鹿谷遺跡における遺構の変形
古墳時代の住居跡の埋土を
アミで示した。

3. 京都府埋蔵文化財調査研究センターによる鹿谷遺跡の調査

鹿谷遺跡における1992年度の調査が行われた第9トレンチにおいて、古墳時代中期末から後期末にかけての時期(鹿谷I~IV期:5世紀末~7世紀前半)に造られた竪穴式住居跡が多数検出され、これらの遺構と埋土を切断する地震の痕跡も認められた。^(注3)

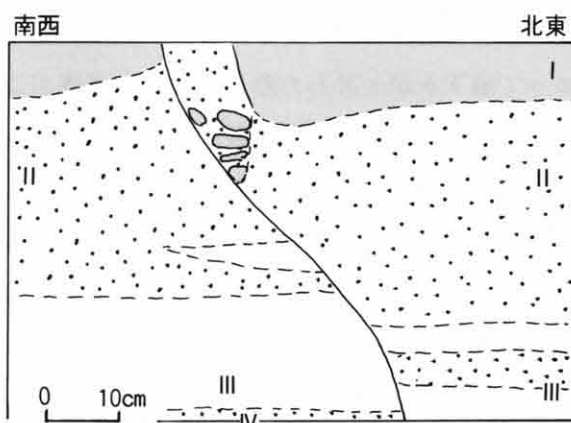
第4図は竪穴式住居跡(S H9240・S H9215ともに鹿谷IV b・c期)^(注3)



第5図 鹿谷遺跡における地震跡の断面図(その1)



写真2 鹿谷遺跡における地震跡の断面形(その1)



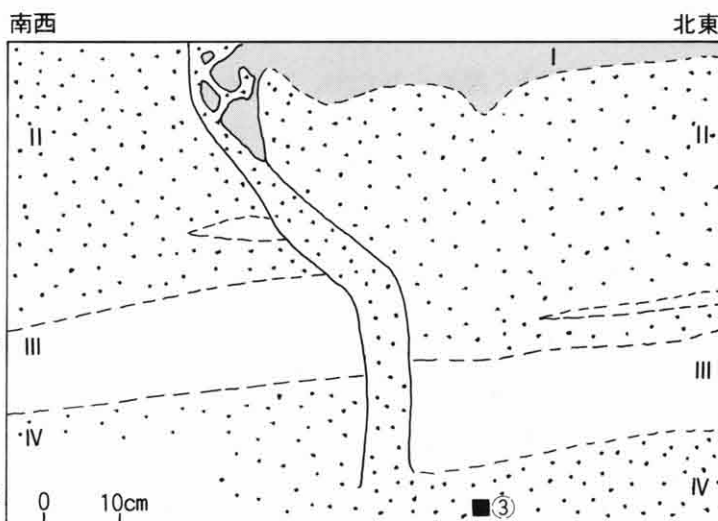
第6図 鹿谷遺跡における地震跡の断面図(その2)



写真3 鹿谷遺跡における地震跡の断面形(その2)

の西縁付近に沿ってのびる地震跡の平面図で、N40°W方向のゆるやかな曲線に沿って、北東側の地層が低下する鮮明な食い違いが認められた。図の上～中部では、地層の食い違いに沿って最大幅10cmの砂脈が帯状に分布し、砂脈の内部は、図の上部では粗粒砂、下部では細粒砂で構成されていた。また、竪穴式住居跡の北西縁が右横ずれ方向に約10cmの食い違いを示していた。

第5図(写真2)の断面図では、**南西**地層をI～IV層に区分した。^(注4)I層は粗粒砂を含む黒褐色のシルト、II層はうす褐色で礫を含む粗粒砂、III層は粗粒砂を含む白っぽい褐色の粘土で幅数cmの粗粒砂層をレンズ状に含んでいた。IV層はうす褐色の粗粒砂層である。ここでは、III層とIV層の最上部が正断層によって、図の左側(北東側)が約6cm低下するように変位して(食い違っ



第7図 鹿谷遺跡における地震跡の断面図(その3)



写真4 鹿谷遺跡における地震跡の断面形(その3)



写真5 鹿谷遺跡における地割れの痕跡
住居跡S H9222(手前)・S H9231(向こう側)を
引き裂いて北西-南東方向にのびている。

が、I～Ⅲ層までが、北東側が低下するように10～12cm食い違っていた。さらに、変位をもたらした亀裂に沿って、液状化したⅣ層から噴砂が上昇していた(写真4)。砂脈の最大幅は6cmで、最上部ではI層を構成する地層が小さなブロックとなって少し沈降していた。また、液状化したⅣ層の粒度組成を第3図に示したが、「液状化しやすさ」の基準でA(特に液状化の可能性あり)の中央に位置し、第2図のⅡ層と同様に、特に液状化しやすい粒度組成となる^(注2)。

この他、^(注3) 竪穴式住居跡S H9226(鹿谷Ⅱa期)、S H9222、S H9231などを引き裂く地割れや、砂脈の痕跡が数多く認められたが、ほとんどが北西-南東方向にのびており(写真5)、表層の地盤に北東-南西方向の引張力が生じる中で地変が進行したものと思える。また、地震の痕跡はいずれも江戸時代の耕作土には覆われており、古墳時代に作られた竪穴式住居跡が埋積されてから後で、江戸時代までの間に生じた地震の産物である。

4. 京都府埋蔵文化財調査研究センターによる太田遺跡の調査

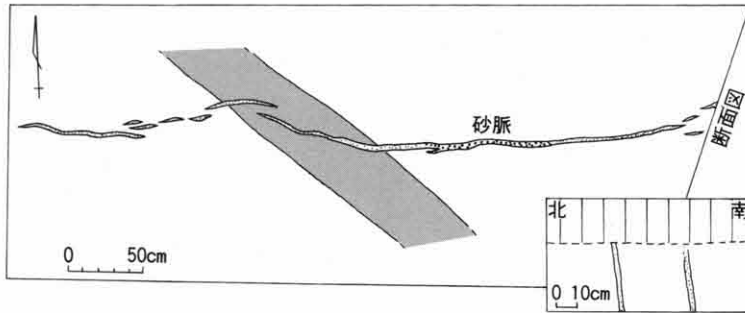
京都府埋蔵文化財調査研究センターによる太田遺跡の2000年度の発掘調査において、地割れや液状化現象にともなう砂脈が検出された^(注6)。

発掘区はA・B(西側がB1東側がB2と細分される)に分かれており、北西側の発掘区Aでは地割れ(北西-南東方向)と砂脈(方向不定)が認められた。

て)いた。一方、Ⅱ層については下部のみが変位を受けているが、上部では液状化現象が発生してI層を引き裂く砂脈(幅約5cm)が生じていた。Ⅱ層が液状化して流動したため、I層とⅡ層の境界は擾乱を受けていた。

第6図(写真3)は反対側(トレンチ幅は約43cm)のトレンチ壁面の状態を示したもので、Ⅱ層の最下部とⅢ層が、北東側が約12cm低下するように食い違っていた。また、Ⅱ層からはI層を引き裂く幅約10cmの砂脈が生じているが、I層を構成する地層の一部が小さなブロックになって砂脈の内部で少し沈降していた。液状化によって地下水が上昇した際に、地表まで運ぶことができず、液状化現象の最終段階で水圧が低下した際に砂脈内で少し沈降したものと思える^(注5)。

第7図は第5図をさらに後退させた壁面の状態で、I層は粗粒砂を含む黒灰色シルト、Ⅱ層はうす褐色の粗粒砂、Ⅲ層は白っぽい褐色のシルト～細粒砂、Ⅳ層はうす褐色の粗粒砂である



第8図 太田遺跡における砂脈の分布

図の右下に示したのは壁面での断面図で、縦線で表現したのは現在使われている耕作土である。また、鎌倉時代の溝跡に堆積した埋土をアミで示した。

第8図(写真6)に示したのは、発掘区Aで認められた長さ最大3 m、最大幅約3 cmの砂脈群で、砂脈の中心部では粗い粒子

(最大径3 mmの礫を含む粗粒砂)、末端では細かい粒子(細粒砂～極細粒砂)が卓越していた。これらの砂脈は中央で鎌倉時代の溝(S D48)とその埋土を引き裂いていた。さらに、砂脈の東端にあたる壁面において、砂脈の最上部における状態が観察できたが、断面図の左側(北側)の砂脈は、粗粒砂を含む黒灰色のシルトを引き裂き、現在の耕作土に先端を切断されていた。断面図の右側(南側)の砂脈は、平面図では認められなかったものであるが、現在の耕作土の少し下まで上昇した段階で、当時の地面まで到達できずに消滅していた。

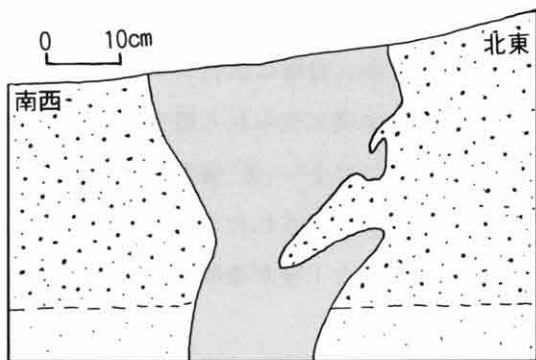
南側の発掘区B2では北西-南東方向および南北方向の地割れが多く発達していた。^(注7)

北西-南東方向の地割れに直交する方向の小トレンチを掘削して地層の変形を観察した(第9図)が、地割れは上位の褐色の粗～細粒砂層と下位の灰褐色細粒砂～シルトを最大幅30 cmで引き裂いており、内部には、さらに上部に堆積していた黒灰色の粘土が流入していた(写真7)。北西-南東方向の一連の地割れ群が杉型の雁行配列を示していることを考慮すると、地割れにやや斜行する東西方向の引張力が生じたものと思える。

次に、南北方向の地割れについて第10・11図に断面形を示した。第10図(写真8)では、地層を4区分し、I層は黒灰色シルト、II層はうす褐色細～粗粒砂(上部でシルトになる)、III層は灰色粘土～シルト、IV層は粗粒砂とした。^(注8)この図では、I～III層が、幅約25 cmの範囲で、両側に断層を伴いながら低下し、図の右に位置する断層aに沿っては、幅約8 cmで開口してI層が流れ込ん



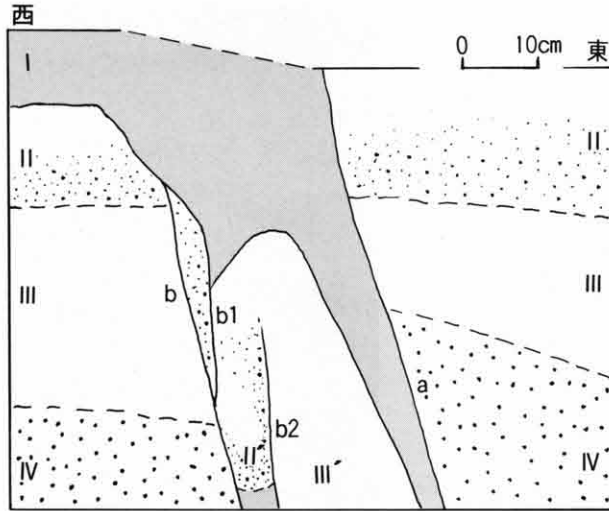
写真6 太田遺跡における砂脈



第9図 太田遺跡における地震跡の断面図(その1)



写真7 太田遺跡における地震跡の断面形(その1)



第10図 太田遺跡における地震跡の断面図(その2)

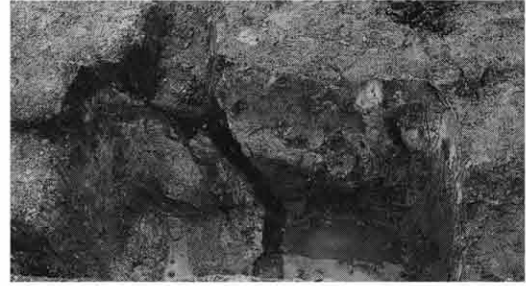
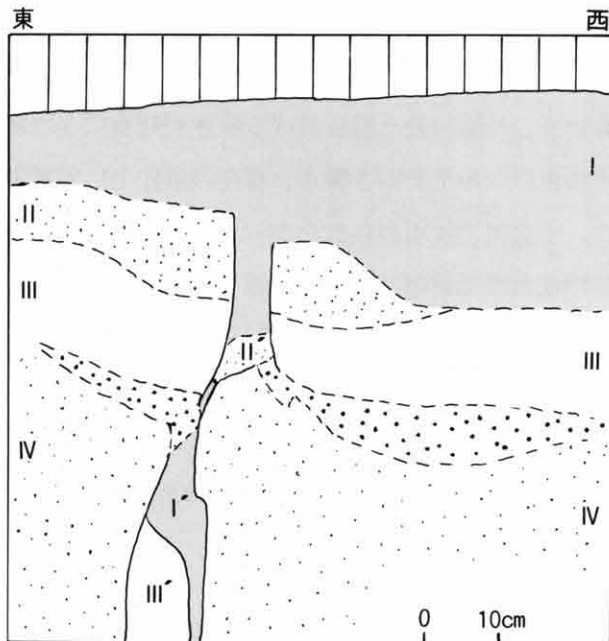


写真8 太田遺跡における地震跡の断面形(その2)



写真9 太田遺跡における地震跡の断面形(その3)



第11図 太田遺跡における地震跡の断面図(その3)

(注9) 断層 b は右側に小さな断層 (b1・b2) を伴いながら、二つの小さな割れ目を構成し、ここに II 層が落下していた。図では、II' 層の下に I 層から落下したと思える黒灰色のシルトがわずかに認められるが、地割れの形成直後に II 層に先駆けて I 層が落下して、見かけ上、地層が上下で逆転している可能性もある。一連の地割れは中世の遺構・遺物を含む I 層の堆積後に生じた

もので、当時の地表付近にあって軟弱で流動性に富んでいた I 層(中世の遺物を含む)が地割れ内に落下し、II 層も同時に落下したと考えられる。

第11図(写真9)は、第10図から約1m北に位置した反対向きの壁面であるが、第10図と層相がわずかに異なり、I層は黒灰色シルト、II層は灰褐色細～中粒砂、III層は灰色シルト、IV層は細～中粒砂で上部に厚さ最大9cmの粗粒砂が堆積していた。図の中央に見られる最大幅10cmの亀裂の内部にI～III層が落下し、亀裂の上部にはI'～II'層、下部にはI'～III'層が見られた。亀裂の開口が2段階で進行し、最初に下部が埋積され、ついで上部が埋積されたと思える。地割れはI層堆積後に生じており、第10図と同様に、地表付近を覆っていたI層が地割れに流れ込み、下位のII・III層も同時に落下したと考えられる。

一方、発掘区A・Bにおいて、それぞれ1基ずつの石組み井戸が変形した様子が観察された。

発掘区Aの石組み井戸(S E 65)は、掘形内から龍泉窯産の青磁碗や丹波産の瓦器碗などが検出され、中世に造られたものと考えられているが、西側の壁面が西南西方向から押される形で半月形に変形していた。発掘区B-2の石組み井戸(S E 92)も掘形内から瓦器碗などが出土し、中世に造られたことがわかるが、西から東に向かって壁面が押される形で半月状に変形していた(写真10)。



写真10 太田遺跡における石組み井戸(S E 92)の変形

5. 考察

第2・5・7図では、複数の地層で液状化現象が生じており、それぞれの地層から噴砂が上昇している。また、同一の亀裂に関する第5～7図でも地変の様子が場所によって異なり、第5・7図においては、異なる地層から噴砂が供給されている。このような事例についての検出例は少なく、液状化現象に伴う地変を考える上で役立つものである。

第8図では、砂脈の内部を構成する砂粒の粒度組成が、砂脈内の位置に応じて異なっている。このような違いは、噴砂の流出をもたらした地下水の流速の変化に対応しており、噴砂が勢よく流れ出した砂脈の中心部では粗い粒子が卓越し、流れがゆるやかな末端部で細かい粒子が卓越したと考えられる。

京都府埋蔵文化財調査研究センターが調査した鹿谷遺跡と太田遺跡では、液状化現象に伴って生じた砂脈や地割れが概ね同じ方向にのびていた。

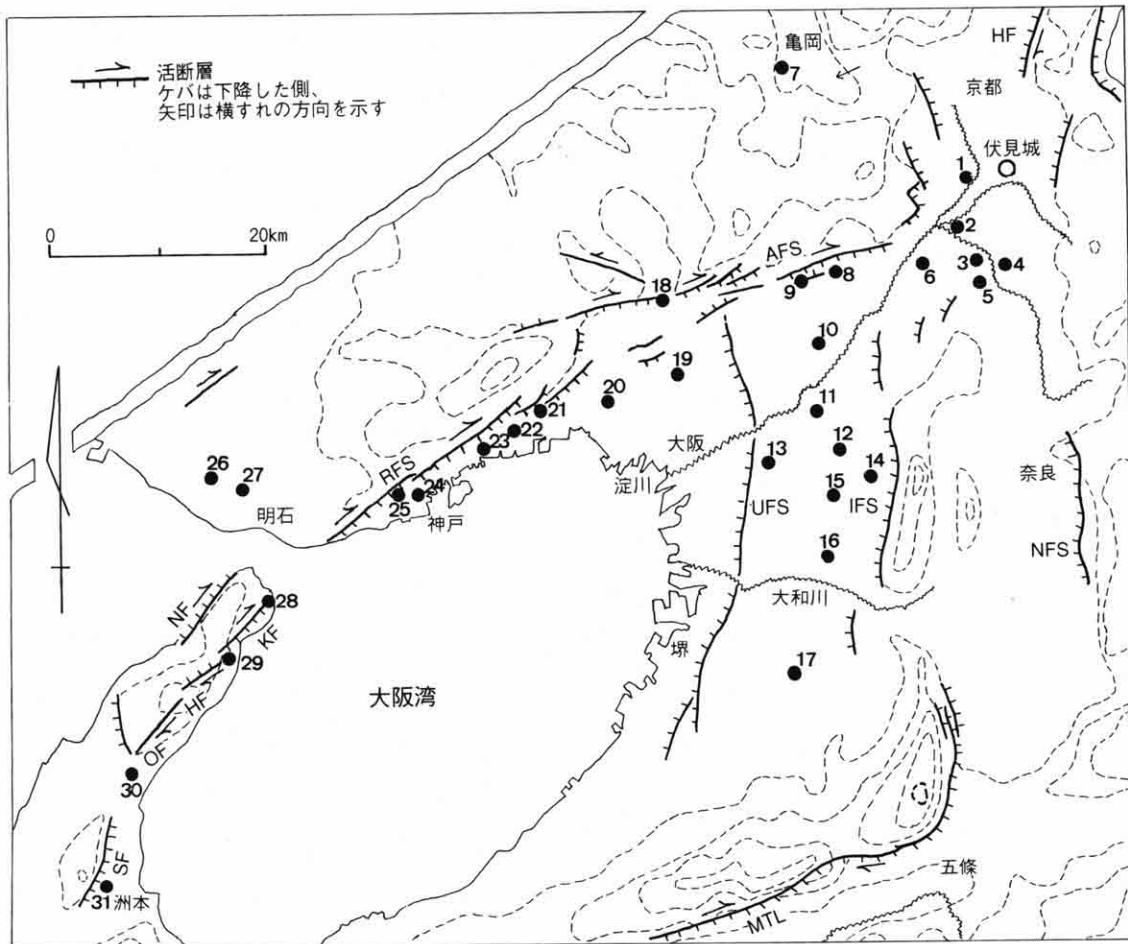
鹿谷遺跡において顕著な地割れが多く発達していた第9トレンチは、南東方向に向かう山内川と、その北東側に平行する支流によって境されて、北西-南東方向に細長くのびる微高地に位置している。そして、地割れの大半が北西-南東方向にのびていたことは、地震に伴う地変が地形に支配された形で生じたことを意味している。おそらく、表層の地盤が北東および南西側に向かって(川に向かって)わずかにせり出す形で、北東-南西方向の引張力を受けながら地変が進行したものである。

太田遺跡において、発掘区B 2の東側に沿って、北北西方向から南南東方向に向かって流れる旧河道が推定されている。発掘区A・Bにおいて、液状化に伴う砂脈は規模が小さく方向も定まっていない。その他に顕著な地割れが認められ方向に系統性が認められるが、地下の砂層が液状化して表層地盤が東西方向の引張力のもとで水平方向にわずかに移動したために生じたと推定される。このような場合、地形や地質がゆるやかに傾斜したり、近くに旧河道・溝などが存在する

場合、前者では傾斜方向に、後者では河道・溝に向かって表層地盤がせり出すことが多い。当遺跡の場合、東側に旧河道が隣接しており、これに向かって表層地盤がせり出す形で地変が進行したと考え、井戸跡の変形も含めて矛盾無く説明できる。このため、鹿谷遺跡の第9トレンチと同様に、地形に支配される形で地変が進行した可能性が高い。

亀岡市教育委員会による鹿谷遺跡・天川遺跡の調査では、液状化現象の発生した時期が室町時代の終わりから江戸時代の初頭に限定されている。太田遺跡の場合も中世以降に限定されている。

亀岡盆地において、中世以降に激しい地震動をもたらした大地震として、まず1596年9月5日



第12図 大阪平野の活断層と伏見地震の地震跡

●印は伏見地震によると思われる地震跡を検出した遺跡

AFS：有馬-高槻構造線活断層系 RFS：六甲断層系 UFS：上町断層系
 IFS：生駒断層系 NFS：奈良盆地東縁断層系 MTL：中央構造線活断層系
 NF：野島断層 KF：楠本断層 HF：東浦断層 OF：野田尾断層 SF：先山断層 HF：花折断層

- | | | | | | |
|------------|---------|---------|---------|------------|----------|
| 1：志水町 | 2：木津川河床 | 3：内里八丁 | 4：塚本東 | 5：魚田 | 6：楠葉野田 |
| 7：鹿谷・太田・天川 | 8：今城塚古墳 | 9：耳原 | 10：玉櫛 | 11：西三荘・東八雲 | |
| 12：西鴻池 | 13：大坂城 | 14：水走 | 15：西岩田 | 16：久宝寺 | 17：狭山池北堤 |
| 18：栄根 | 19：田能高田 | 20：高松町 | 21：芦屋廃寺 | 22：住吉宮町 | |
| 23：西求女塚古墳 | 24：兵庫津 | 25：長田神社 | 26：玉津田中 | 27：新方 | 28：塩壺 |
| 29：佃 | 30：志筑廃寺 | 31：下内膳 | | | |

午前零時(文禄五・慶長元年閏七月十三日子刻)に京阪神・淡路地域に著しい被害を与えた慶長伏見地震^(注12)があげられる。これは、京都から淡路島にかけてのびる有馬-高槻構造線活断層系などの活断層系が一斉に活動して生じたもの^(注13)で、M(マグニチュード)8に近い規模をもち、京都府八幡市の木津川河床遺跡や内里八丁遺跡をはじめ、多くの遺跡で顕著な地震の痕跡が検出されている^(注14)(第12図)。亀岡盆地でも慶長8年に再建された亀岡市曾我部町の輿能神社の棟札に「先建立者文応元庚申年十月十日仁建立也、慶長元丙申年後七月十三日(旧暦)仁地シン仁遊里くつれ候ヲ六ヶ村為氏子慶長八癸卯年八月二十四日御棟上仕建立候(後略)」という記載^(注15)があり、激しい揺れ(震度6程度)が生じたことがわかる。

この他、1662年6月16日に花折断層などが引き起こした琵琶湖西岸地震(M7.6程度)や、1830年8月19日の京都市北西部における中規模地震(M6.5程度)でもこの地域は強く揺れている。

6. まとめ

亀岡盆地における鹿谷・天川・太田の各遺跡において、激しい地震動に伴う液状化現象が発生し、噴砂や地割れなどが生じているが、一部の発掘区では、当時の地形を微妙に反映した形で地変が進行していることがわかる。地震跡が形成されたのは中世から近世に移行する時期なので、全部、または、多くが、この地域に特に激しい地震動を与えたことが推定される1596年の伏見地震の爪痕である可能性が高い。

(さんがわ・あきら=独立行政法人産業技術総合研究所主任研究員)

注1 寒川旭「亀岡市内の遺跡で検出された地震の痕跡」『鹿谷遺跡第2次発掘調査報告書』(『亀岡市文化財調査報告書』第28集 亀岡市教育委員会 1993) PP.38-47. に詳しく記載しており、以下の記述はこの文献に基づく。現地において、調査を担当された亀岡市教育委員会の樋口隆久氏にお世話頂いた。以下、地層の年代は各遺跡における発掘担当の方々にご教示頂いたものである。

注2 日本港湾協会『港湾の施設の技術上の基準・同解説』 1979による。

注3 野島永、河野一隆「鹿谷遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第52冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993 pp.27-66. に調査結果が報告されている。

現地において、調査を担当された京都府埋蔵文化財調査研究センターの野島永氏・河野一隆氏、および、向日市教育委員会の中塚良氏にお世話頂いた。

注4 第3図で示したI~IV層は第5・6図とも概ね共通であるが、2章における第2図のI~IV層とは異なる。

注5 特に、液状化による噴砂流出の最終段階に達すると、水圧が減少して粘土ブロックなどが沈降しやすくなる。

注6 戸原和人、増田孝彦、寒川旭「太田遺跡第13次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第99冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001 p.86

現地において、調査を担当された京都府埋蔵文化財調査研究センターの戸原和人氏・小池寛氏にお世話いただいた。

注7 地割れ群のうち、北西-南東方向にならぶ3本には“杉型”の雁行配列が認められた。これは杉の字の右半分のような配列で、雁行する地割れを境にして、左斜め上および右斜め下方向の引張力(この

発掘区では東西または東北東-西南西方向)が作用したことを示す。対照的に“ミ”型の場合には、地割れがカタカナのミの形に配列しており、雁行する地割れを境に右斜め上および左斜め下方向に引張力が作用したことを示す。

注8 第10図に示したⅠ～Ⅳ層の区分は2・3章におけるⅠ～Ⅳ層とは異なる。

注9 第10・11図では、地割れ内へ低下・流入した地層に'をつけて、元の地層と区別している。

注10 寒川旭「琵琶湖周辺の遺跡で検出された地震の痕跡」(『琵琶湖博物館開設準備室研究調査報告』2) 1994 pp.53-70. などに同様な事例が報告されている。

注11 寒川旭『地震考古学』(中央公論社)1992 p.251の木津川河床遺跡の事例をはじめ、多くの遺跡で同様な現象が見られている。

注12 宇佐美龍夫『新編日本被害地震総覧(増補改訂版416-1995)』(東京大学出版会) 1996 p.493にまとめられている。史料の多くは、文部省震災予防評議会編(1941)『増訂大日本地震史料』第1巻(鳴鳳社) 1941 p.945、東京大学地震研究所編『新収日本地震史料』第2巻 1982 p.575に収録されている。

注13 工業技術院地質調査所編『平成7年度活断層研究調査概要報告書』 1996 p.98など

注14 第12図は寒川旭『地震』(大巧社) 2001 p.173による。

注15 これは、京都府教育会南桑田郡部会・京都府北桑田郡・船井郡教育会編『南桑田郡誌・北桑田郡誌・船井郡誌』(名著出版) 1972によるもので、亀岡市教育委員会の樋口隆久氏からご教示頂いた。

近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(3)

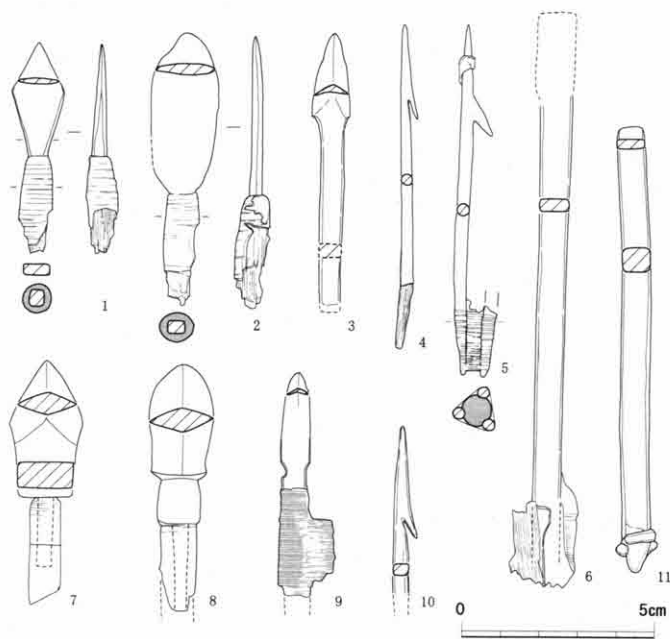
野島 永・高野 陽子

11. 大風呂南1号墓の副葬鉄器をめぐって

平成10年度に京都府与謝郡岩滝町字岩滝に所在する大風呂南墳墓群の発掘調査が行われ、墳頂部において周辺埋葬重複形2類の埋葬構造を形成した墓壙群が検出された。そのなかでもひとときわ大きな中心埋葬からは、弥生時代としては他に類例のない鉄剣の多量副葬がみられた。^(注58) 大風呂南1号墓の副葬鉄器には、近畿地方北部における弥生時代後期の副葬鉄器にはない特徴を持つものがある。鉄鍬(第1図1・2)は、鍬身中央の鍬や柳葉式にみられる独特な関の曲線的造形はないものの、定角式あるいは柳葉式と呼ばれる前期古墳副葬鉄鍬に類似する。同様の鉄鍬は弥生時代終末期前後にみられるものである。その多くは集落出土例として北部九州から西部瀬戸内地域、墳墓出土例として瀬戸内地域とその周辺に出土する場合が多い。^(注59) 後述するように、出土土器から弥生時代後期後葉でも比較的古い時期となる大風呂南墳墓群からの出土例は、そのような鉄鍬の最古段階のものといえることができる。

また、大風呂南1号墓の副葬品目も今までの弥生墳墓には例をみないものもある。工具の鉤や茎鏝(3・6)は言うまでもなく、漁撈具の小形の組合せ式ヤスは前期古墳、とくにその出現期から採用される副葬品目である。石川県国分尼塚古墳・京都府椿井大塚山古墳・兵庫県西求女古墳・岡山県浦間茶白山古墳・広島県弘

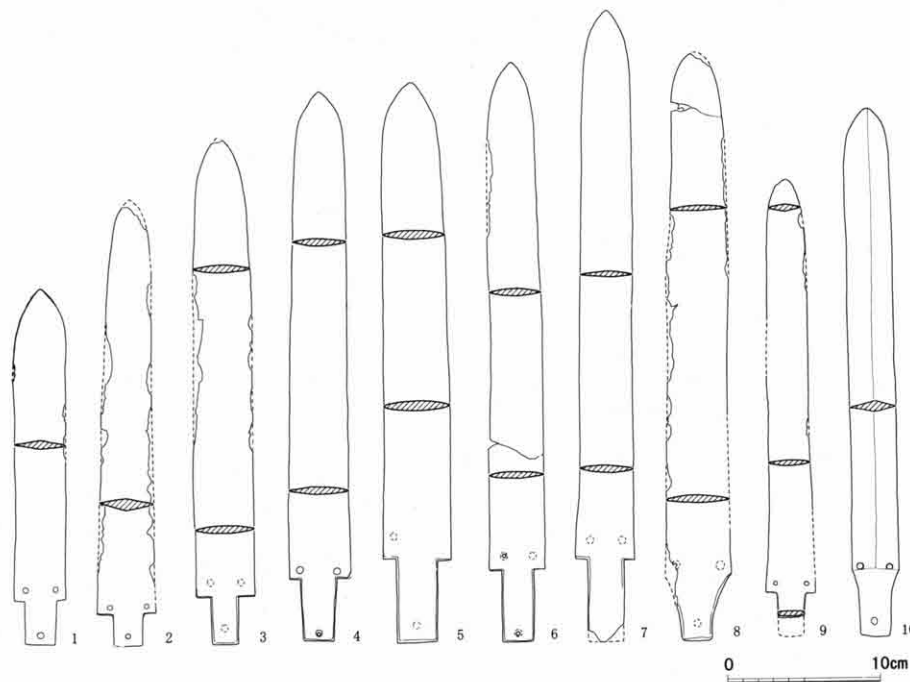
住3号墳・山口県国森古墳など、当該期の著名な大形前方後円(方)墳などから類品が出土している。^(注60) 小形組合せ式ヤスには、刺突先端部が針状に尖り逆刺をもつものと、刺突先端部が菱形の鍬状となり頸部に逆刺を持つものがある。本例(4・5)は前者に属し、椿井大塚山古墳(10)・浦間茶白山古墳出土例に類する。^(注61) 前期初頭、出現期古墳の副葬工具や漁撈具との形態的類似性からも、それら前期古墳副葬鉄器の製作に先立つ先駆的な鍛冶技術による鉄器であると想像することができる。



第1図 大風呂南1号墓出土副葬鉄器と前期古墳出土副葬鉄器

1～6. 京都府大風呂南1号墓 7～10. 京都府椿井大塚山古墳

大風呂南1号墓第1主体にみられた 11. 兵庫県権現山51号墳



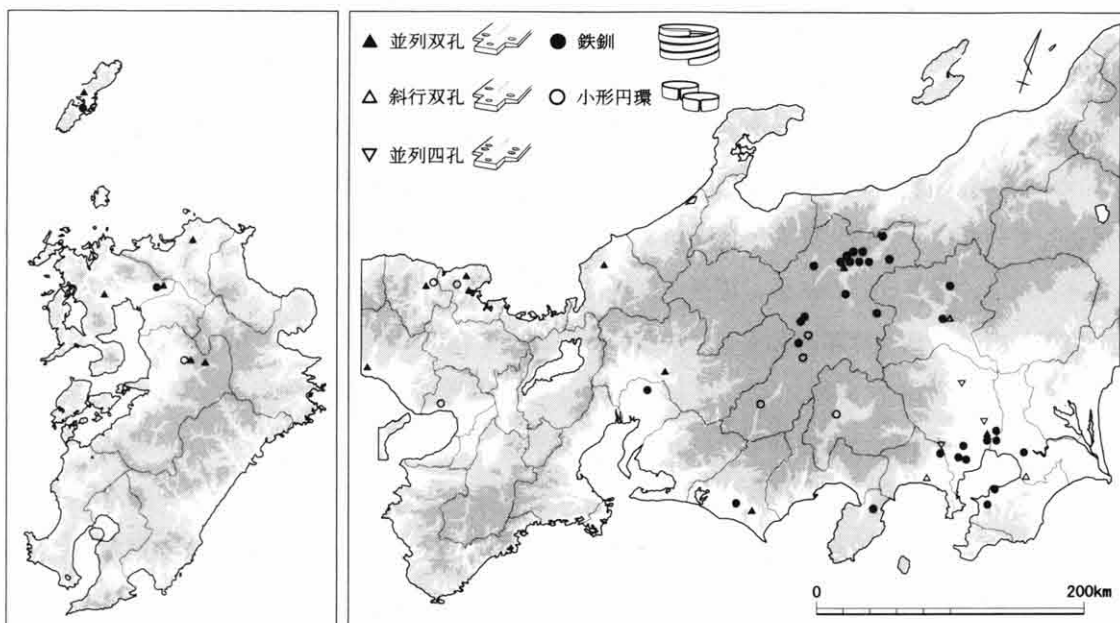
第2図 近畿地方の刃関双孔鉄剣

1. 京都府古天王5号墓第1主体 2. 京都府古天王5号墓第9主体
 3~8. 京都府大風呂南1号墓第1主体 9. 兵庫県半田山1号墓第1主体
 10. 福井県小羽山30号墓埋葬施設

11振りの鉄剣は、墓壙北西側(被葬者頭部側)に2組にまとまって出土した9振り(第2図3~8)と、墓壙南西側(被葬者右腰および足側)でそれぞれ単独で出土した2振りに分けることができる。2組に集積されて出土した一群には鞘木や把木の痕跡が認められず、布痕跡のみがみられたことから

ら、剣身を布巻きにしてまとめて副葬したものとみられるが、被葬者の右腰近くで単独で出土した1振りには、合せ口の鞘と把が伴い、佩用状態となっていたと想定される。布に包まれた複数の剣身と、外装の拵えをもつ佩用剣は、副葬の意味も異なっていたと考えられ、副葬者が異なっていたか、あるいは被葬者への副葬段階が異なると推測することができる。いずれにせよ、前期古墳における鉄器副葬同様、葬送の過程における副葬行為の重層化とでもいえる儀礼が萌芽しているものといえる。

鉄剣自体は、拵えをもつ佩用剣の方が全長50cmを超え、長大でかつ鎬が明瞭であるが、他の多くは、短い茎部に目釘孔1孔と角関をもち、刃関部分に双孔を穿つ点で共通している。この形制は弥生時代に盛行するもので、前期初頭の、多くの古墳副葬鉄剣との共通性や型式的系譜を窺うことはできない。京都府北部丹後地域の類例としては、竹野郡弥栄町古天王5号墓出土鉄剣(1・2)のみであり、鉄剣副葬がよくみられる丹後地域でも、いわば少数派である。周辺に目を転じれば、兵庫県豊岡市妙楽寺墳墓群第5地点A区第3主体や同県揖保郡揖保川町半田山1号墓第1主体出土例(9)がある。福井県丹生郡清水町小羽山30号墓埋葬施設出土例(10)も関部の詳細な形態が不明ではあるが、短茎刃関双孔の類と見て差し支えない。弥生時代後期後半期にはこのような短茎刃関双孔の鉄剣は、近畿地方あるいは瀬戸内地域を含む中国・四国地方よりも、むしろ中期以来存続する北部九州やその周辺、後期後葉以降出土例が増加する東海・関東地方にみられるものと言えらる(第3図)。

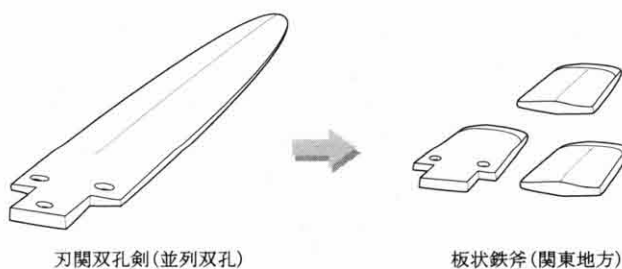


第3図 刃関双孔鉄劔と鉄劔・鉄製小形円環出土地(弥生時代後期後半～終末期)

12. 近畿地方北部の副葬鉄器と中部高地・東海地方との関係

先述したように、弥生時代後期後半から終末期の段階で、刃関双孔鉄劔の類が北部九州と中部高地・東海・関東地方に展開することが指摘できる。ただし、双孔を刃関にもつ劔にしても細部をみれば、その形態に若干の差異があることがわかる。すなわち刃関に双孔があるものの、双孔を通る直線が劔身に直交するもの、すなわち劔鋒を上置き双孔が水平に並列するもの(「並列双孔」と仮称)と、双孔が水平に並列せず、劔身に斜行して交わるもの(同「斜行双孔」)に分けることができる。また、刃関に目釘孔を穿つが、2孔ではなく並列2段に4孔穿つもの(同「並列四孔」)があり(第3図凡例参照)、それぞれに独自の拵えが備わっていたものとする。現状の出土例からは、並列双孔となるものは九州、近畿地方北部・中部高地・東海地方に分布し、関東地方にはむしろ斜行双孔あるいは並列四孔がみられる相違がある。弥生時代中期後半における並列双孔の関東地方への流入から考えれば、斜行双孔や並列四孔の類は、新しく装着する拵えのために作り出されたもので、後発的な形態といえるだろう。

神奈川県秦野市砂田台遺跡7号・146号竪穴式住居跡など中期後半に刃関並列双孔の鉄劔を分割して板状鉄斧に再加工した類例(第4図)から憶測すれば、中期後半の段階におそらく当時唯一の製作地であった北部九州との交易によって入手した北陸地方あるいは中部・東海地方のいずれかから、このような刃関並列双孔の鉄劔がもたらされたと想像できる。後期後半以降には、この近畿地方北部から東海地方にかけての地域圏でも並列双孔の鉄劔が生産され始めたと考えられる。後期後葉以降、関東地方でもそれに準じつつも、斜行双孔鉄劔に鹿角製のはばき鉏や把など、独自の拵えをもつ外装を創出することになった。

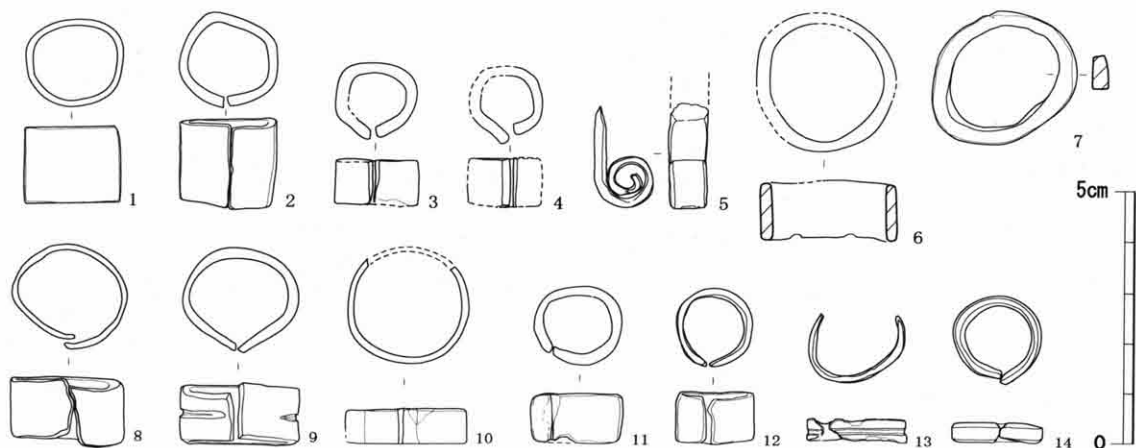


第4図 鉄劔の再加工(中期後半)

近畿地方北部の副葬鉄器の中で以東の諸地域との関連を示唆する副葬鉄器として注目すべきは、扁平な帯板や小さな棒鉄を曲げて環状に造り出した鉄製小形円環である。近畿地方北部では、兵庫県豊岡市若宮4号墓第4主体(第5図1・2)や京都府中郡峰山町金谷1号墓第3主体^(注66)(3・4)にみられる。いずれも扁平な帯板を曲げたもので、金谷1号墓出土例は、閉じ合わせの両端が接着していない。当初、鉄製小形円環と報告された京都府竹野郡網野町浅後谷南墳墓第1主体出土例^(注67)(5)は、銹落としの結果、細長い板状の鉄片を渦状に巻き込んだものであることが判明した。銹着していた鉈の身幅にあうことから、鉈の柄尻を丸めた部分と考えられる。よって、第5図5は鉄製小形円環から除外したい。このほか、熊本県菊池郡大津町西弥護免遺跡173号住居出土例^(注68)(6)や山梨県中巨摩郡檜形町六科丘遺跡15号住居出土例^(注69)(7)、直径6~7cmに復原できる長野県岡谷市後田原遺跡Y1号住居出土例^(注70)などがみられる。また、兵庫県芦屋市会下山遺跡Q祭祀址・長野県飯田市殿原遺跡37号住居・同県上伊那郡南箕輪村久保上ノ平遺跡各出土例など、鉄製円環でも、断面が隅丸方形あるいは円形に近いものもみられる。

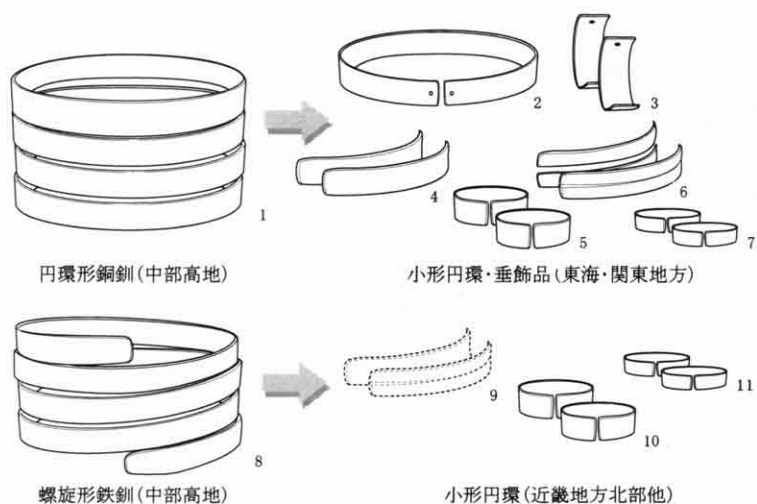
このような鉄製小形円環に類するものに銅製小形円環がある(8~14)。白居直之氏は、詳細な資料操作によってこのような銅製小形円環が带状円環形銅釧の分割・再加工の結果であることを証明した^(注71)。すなわち白居氏は、带状円環形銅釧(第6図1)の一箇所を切断し、穿孔して垂飾品(2・3)として使用されるもののほかに、円環を断ち切り、熨した^(注72)(4)後に裁断し、再び曲げ輪造りによって小形円環(5)に再生されるものや、さらに帯板状の銅片を条刻の後に縦方向に裁断(6)して、幅の減じた小形の円環(7)に作り出されるものがあることを例証しているのである。

以上の銅製小形円環の製作工程を敷衍してみれば、その断面が扁平あるいは蒲鋒形になる鉄製小形円環(10・11)についても带状螺旋形鉄釧(8)の切断、再加工によるものとする余地がみられるだろう。先の白居氏の高論では、带状円環形銅釧は中部高地に集中しているのに対して、銅製小形円環は東海東部地域に偏在することが指摘されている。带状螺旋形鉄釧もその製作中心地の



第5図 鉄製小形円環(1~4・6・7)と銅製小形円環(8~14)

- | | |
|-----------------------------|-----------------------|
| 1・2. 兵庫県若宮4号墓第4主体 | 3・4. 京都府金谷1号墓第3主体 |
| 5. 京都府町浅後谷南墳墓第1主体 | 6. 熊本県西弥護免遺跡173号住居 |
| 7. 山梨県六科丘遺跡15号住居 | 8・9・10. 静岡県雄鹿塚遺跡遺構検出面 |
| 11. 山梨県東山北遺跡2号方形周溝墓周溝 | 12. 神奈川県千代光海端遺跡1号住居 |
| 13. 長野県篠ノ井遺跡聖川堤防地点SDZ8周溝墓周溝 | 14. 静岡県川合遺跡水田検出面 |



第6図 銅釧および鉄釧の再加工
(白居直之氏文献注15第8図を参考にして作成)

ひとつとして中部高地が目されておられ、鉄製小形円環は、中部高地の南方域に分布していることから、中部高地において製作された鉄釧が何らかの要因で切断・再加工に供されていたものと想定される。さらには東海地方との交易によって近畿地方北部にもたらされたものと推測することも可能ではなかろうか。^(注72) このように今後、帯板による鉄釧についても他地域の鉄製小形

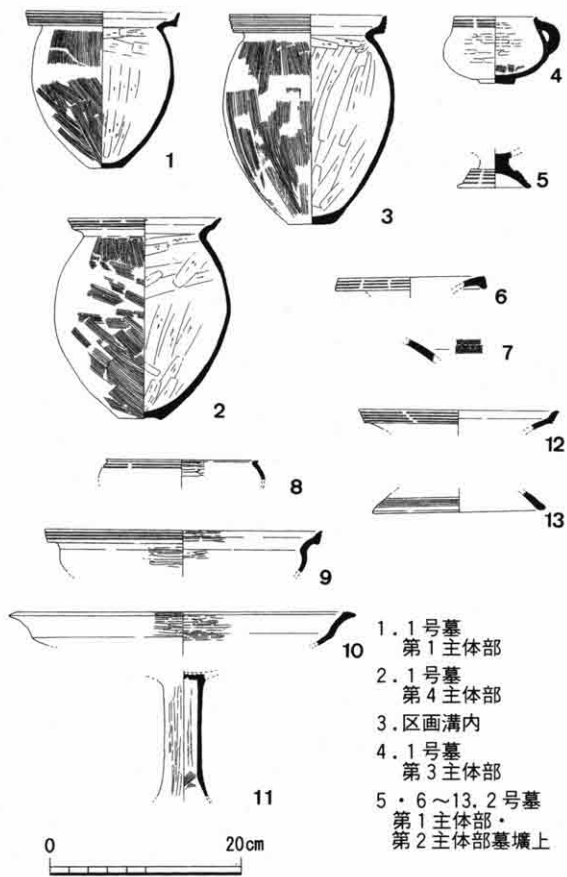
円環や、九州地方・朝鮮半島の出土例との関係をもあわせて検討せねばならない資料として注目されるだろう。^(注73)

13. 大風呂南1号墓出土の土器

大風呂南1号墓・2号墓では、墳丘・墓壙上・墓壙内の各所で土器が出土しているが、このうち編年上の指標となる土器は、2号墓第1主体部墓壙上から円礫とともに出土した口縁部に擬凹線文を施す有段口縁高杯(高杯C)があげられる。^(注74) この高杯Cは、中期後葉以来の中部瀬戸内地域の凹線文系台付鉢と親縁性の深い後期の有段口縁台付鉢(第8図)から発展した形式であり、後期Ⅲ期(後期後葉)の段階に、口径の大形化、脚部の長脚化が進み、高杯の新たな形式として登場するものである(C1)。高杯Cは、後期Ⅳ期(後期後葉～末)には、杯部が皿状を呈し、4～6条の擬凹線文が施された拡張した口縁部を特徴とする最も完成された形態をなす(C2)。さらに庄内式併行期には、小形化・短脚化傾向を強め、口縁部の擬凹線文が多条化(C3)、あるいは無文化し(C4)、布留系土器群の流入期を前にはほぼ終息する。後期Ⅳ期に盛行するC2は、擬凹線文系の壺・甕・台付鉢などとともに、丹後・但馬地域のみならず、若狭・北丹波・西丹波など周辺の広いエリアで受容される形式であり、土器様式の上からみると、この時期には丹後系土器様式圏というべき地域的なまとまりが形成される。

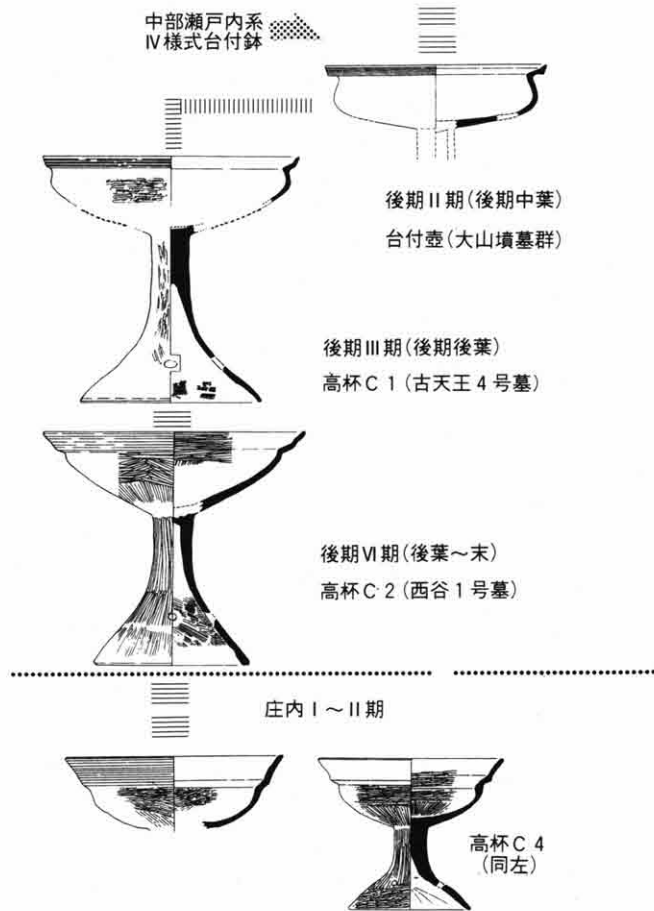
大風呂南2号墓から出土した高杯の形式は、杯部の破片ではあるものの、口縁部端部の上方への拡張は未発達であり、C1とみられることから、後期Ⅲ期(後期後葉)の所産と推定される。相伴資料に、杯部が皿状の形態をなし、Ⅱ期にピークをもつ高杯Bの口縁片(第7図)を認めることも、後期Ⅲ期に比定することに矛盾しない。

大風呂南墳墓群で特に注目される土器は、2号墓第1主体部出土の壺の破片(第7図6・7)とである。前者は、東海系のいわゆるパレス壺の破片とみられる資料であり、^(注76) 近畿地方北部での出土は、古墳時代初頭の兵庫県豊岡市鎌田・若宮墳墓群出土のパレス壺に次いで2例目である。^(注77) 弥



第7図 大風呂南墳墓群出土の土器

生時代後期に限れば、これまでのところ、近畿地方北部の東海系土器としては、初出のものである。丹後地域の後期後葉～末における集落のまとまった調査例が乏しく、実態が十分明らかにされていないなかで、少なくとも首長間レベルでは丹後地域と東海地方との交流があったことを示す数少ない資料である。

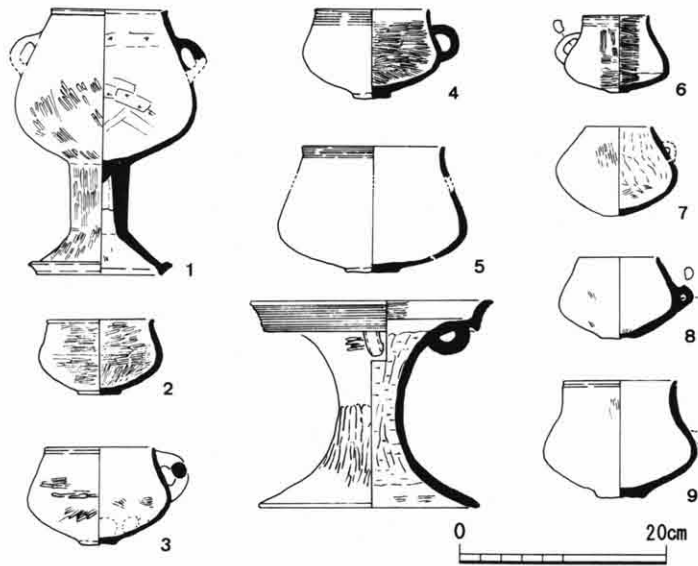


第8図 高杯Cの系列

14. 把手付小形壺Aの系譜と朝鮮半島南部地域との土器交流

大風呂南1号墓で出土したコーヒーカップ形の注78小形壺(把手の有無にかかわらず、以下、小形壺Aとする)は、下膨れの体部を特徴とする壺であり、これまで約60例が、主に近畿地方北部の各地で墳墓・集落を問わず出土している。この小形壺は内外面に施されたていねいなミガキ、精良な胎土、橙褐色系の色調を特徴とし、胎土に赤色斑粒を含むことを通例とする精製土器である。後期II期(後期中葉)古相の土器群のなかに現れ、後期III期(後期後葉)に大きく発展し、後期IV期(後期後葉～末)に衰退する。小形壺Aには、把手を付さないものもあり、これらを含めて分布を検討したものが第10図である。分布の中心は丹後地域にあり、その範囲は近畿地方北部から北陸地方にかけての各地に広がる。丹後地域では、口縁端部に1～3条の条線(沈線文あるいは擬凹線文)を施すものが主体的にみられ、一方、北陸地方では条線を施さない壺が主体となっており、地域色がみられる。

丹後地域の後期の土器組成は、中期後葉以来の中部瀬戸内系土器の組成を在地的に受容する過程で成立した形式群から構成されるが、ゆるやかな下膨れの体部をなすこの小形壺Aについては、中期後葉の土器組成のなかには祖形となる形式が見出せない。近畿地方北部において、小形壺Aの祖形となる形式は、大宮町今市墳墓群出土例にみる後期初頭の台付壺(第8図)をあげることができよう。この土器は、中期後葉から系譜的に続く高杯や台付壺に通有の脚部形態を呈しており、在地で製作されたと推定されるが、体部形態は

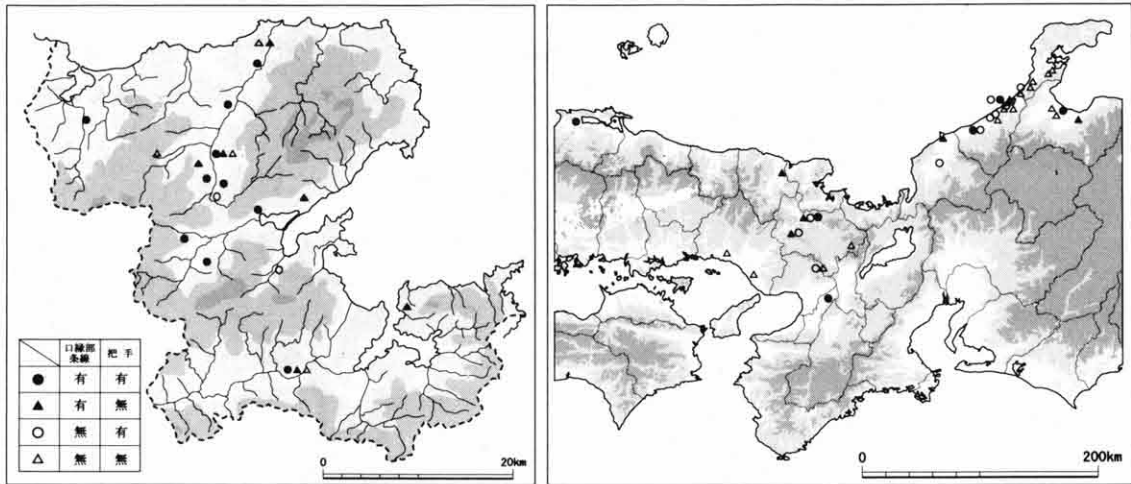


第9図 各地域の壺形土器

1. 大宮町今市2号墓
2. 大宮町アバタ遺跡
3. 弥栄町古天王5号墓
4. 舞鶴市志高遺跡
5. 丹後町大山周辺第13主体部(以上、京都府)
6. 島根県西谷3号墓
7. 石川県宿東山遺跡
- 8・9. 石川県吉竹遺跡

先行形式に類例を見出せるものではなく、この形式の成立にあたっては、異系統の土器形式の影響があったものとみられる。体部の特徴を詳細に検討すると、特に注目されるのは口縁端部の形態である。すなわち口縁端面を斜め上方に引き出し、断面を三角形に処理することを特徴とする点である。こうした口縁端部の特徴をもつ精製壺は、併行期の朝鮮半島南西部(嶺南地域)に分布するいわゆる巾着袋形壺(以下、巾着袋形壺とする)に見出すことができる。

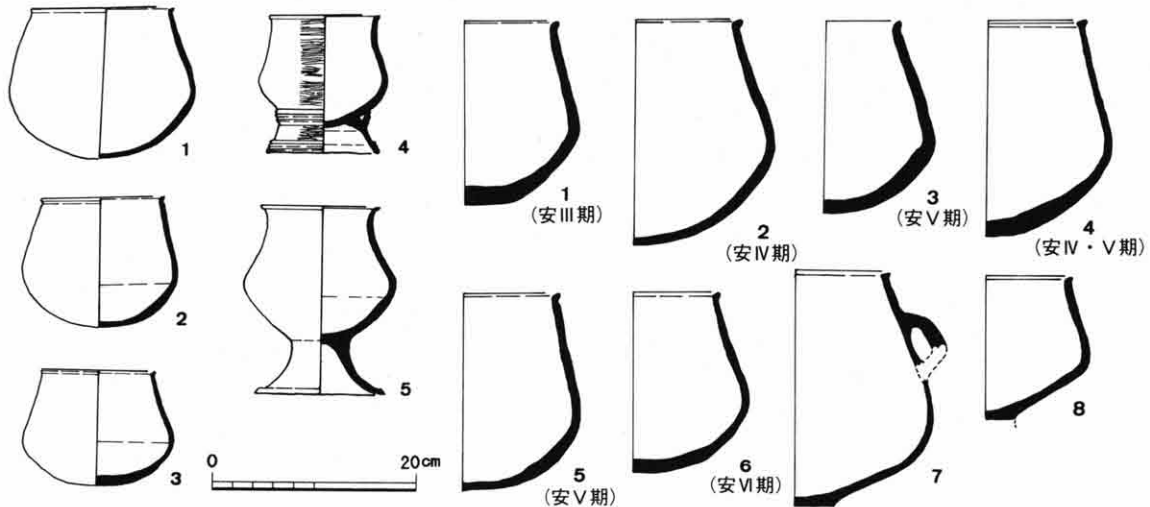
原三国時代の瓦質土器については、紀元前1世紀後半～紀元3世紀の中葉ごろまでを、5段階にわける韓炳三氏^(注80)や申敬澈氏^(注81)の編年的研究があるが、ここでは近年、昌原市茶戸里遺跡^(注82)の遺物群を9期に細分した安在皓氏^(注83)の編年案と、同様な資料を5期(10小期)に細分し、北部九州との併行関係を述べた高久健二氏^(注84)の編年案を参考にしたい。巾着袋形壺のうち、体部がゆるやかに屈曲し、頸部が直線的に立ちあがる、あるいは頸部がやや内湾する形式は、安編年では瓦質土器前半期のⅡ～Ⅴ期、高久編年ではⅡ～Ⅲ期の特徴である。この段階のものとして提示された巾着袋形壺には、前述した口縁端部を斜め上方に引き出し、断面を三角形状に処理するという特徴的な手法を認めることができる。高久氏は、Ⅱ期の年代観として、前漢鏡や中細形銅矛が出土することに加えて、漁陰洞および坪里洞出土の仿製鏡に、佐賀県二塚山46号甕棺墓出土仿製鏡の同型鏡が含まれることから、紀元前1世紀中葉～後半を中心とする時期とする。またⅢ期の年代観を、良洞里から方格規矩四神鏡と鉄剣・把頭飾・鉄矛などが一括して出土していることから、紀元後1世紀を中心とする時期と推定している。近年、近畿地方の後期初頭の年代観については、青銅器の副葬・廃棄時期の検討から、北部九州と大きく隔たらない時期に設定し、紀元後1世紀前半期に引き上げる説が受け入れられつつあり^(注85)、後期初頭とみられる先の今市墳墓群出土の台付壺の年代も、



第10図 丹後系小形壺Aの出土地(弥生時代後期)

朝鮮半島南部地域で古式の巾着袋形壺が盛行する時期とおおよそ併行関係にあるものとみてよいだろう。

紀元前1世紀後半以降、朝鮮半島南部地域では、楽浪郡との交渉を示す青銅製品などの漢式系遺物の副葬がはじまるとともに、鉄器の副葬が急増し、半島内での鉄器の製作・生産に急速な発展がみられ、周辺地域との交渉が活発になされたとされる。弥生時代後期初頭～前葉には、丹後地域でも、大宮町三坂神社3号墓第10主体部や、同左坂26号墓第2主体部から素環頭鉄刀が出土するなど、北部九州につぐ多量の鉄製品が流入している。この背景については、中期後葉以来、朝鮮半島・北部九州・日本海岸諸地域を三極とする水晶製玉類と鉄器を交換財とした互酬的な長距離交易の基盤が形成されたことによって、後期における鉄器の多量集積が可能となったとする見解が出されている^(注87)。また後期の墳墓にみる鉄製工具類の副葬形態の検討から、朝鮮半島南部地域とのあいだで人の移住・移動を伴う交流があったとする見解も出されており^(注89)、後期初頭前後の

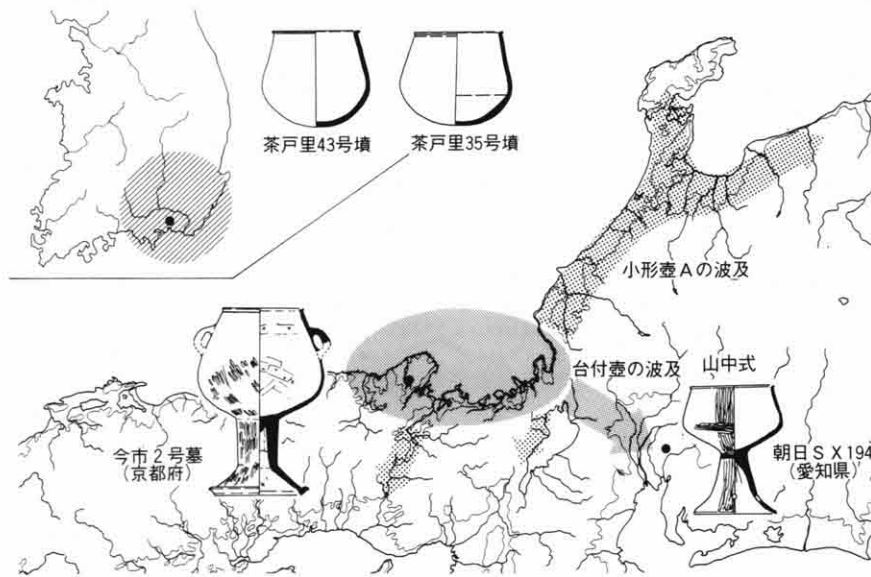


第11図 韓国昌原茶戸里遺跡の巾着袋形土器

- 1. 茶戸里48号墳 2. 茶戸里35号墳
- 3. 茶戸里37号墳 4. 茶戸里69号墳
- 5. 茶戸里49号墳

第12図 巾着袋形土器と台付壺の断面形態の比較

- 1. 茶戸里25号墳 2. 茶戸里48号墳 3. 茶戸里57号墳
- 4. 茶戸里20号墳 5. 茶戸里35号墳 6. 茶戸里37号墳
- 7. 京都府今市2号墓 8. 愛知県朝日遺跡S X 194



第13図 土器の交流

朝鮮半島南部地域と丹後地域の間には、鉄器や玉類を交換財とした威信財取引による直接的な交渉がなされたことが想定されている。こうした点を勘案すると、丹後地域から北陸地方にかけての日本海沿岸部に大きく展開した小形壺Aの祖形

となる後期初頭～前葉の台付壺は、先述した形態・手法的特徴およびその併行関係から、朝鮮半島南西部地域で盛行した巾着袋形壺に由来するとみることが可能であろう。

丹後地域を中心とした日本海沿岸部において、後期初頭～前葉に波及した朝鮮半島系土器の影響は、弥生中期における凹線文の東方への波及経路とされた^(注90)丹後・若狭地域から湖北地域を介して東海地方に至るルートを通じ、東海地方の山中式の成立にも影響を与えたとみられる。山中式の様式変遷を検討し、その細分案を示した赤塚次郎氏は、山中式前期は資料に乏しく、最も不安定な時期としながらも、0段階として朝日遺跡SX194A群の資料をあげる。この資料で提示された最古式の^(注93)ワイングラス形の台付壺は、緩やかな下膨れの体部とともに、朝鮮半島南西部地域にみられる巾着袋形壺や、丹後地域の後期前葉の台付鉢にみられた口縁端部の特徴をもち、端部をわずかに斜め上方に引き出す手法が認められる。この手法は山中式前期とされる資料に特徴的であり、生成期の台付壺の系譜的特徴を示すものであろう。山中式の主要形式となるワイングラス形の台付壺は、これまでその系譜は明らかにされていないが、^(注94)丹後地域では後期初頭～前葉に他地域に先んじて、この高台付壺と同様の緩やかな下膨れの体部をなす台付壺が展開しており、後期中葉には北陸にも影響を与えている。山中式への影響は、北陸よりも早く、後期前葉にかかるとみられるが、いずれにせよ、ワイングラス形の台付壺は、その手法的特徴などから、朝鮮半島南西部地域の土器形式と親縁性の深い丹後地域周辺の日本海沿岸部に分布する台付壺を祖形として生成したと考えられよう。以上のような海峡を越えた土器の交流は、後期前半期において、朝鮮半島南西部地域から丹後地域とその周辺の日本海沿岸部へ、さらには近江地域を介して東海地方をむすぶ物流の基幹路が形成されていたことを窺がわせるものである。山中式前期とされる岐阜県瑞龍寺山山頂遺跡出土の舶載内行花文鏡などの大陸系金属器も、こうした交流ルートのもとに^(注95)将来された可能性がある。

小稿は、前半の副葬鉄器については野島が、後半の土器の交流については高野がそれぞれが執筆した。

追記

高野は、2001年10月に開かれた「東アジアを考える大阪の会」の例会において、丹後地域の弥生墳墓に関する発表を行い、後期中葉に出現する丹後系の把手付小形壺A（いわゆるコーヒーカップ形土器）の祖形は朝鮮半島南部に分布する巾着袋形土器に求められるとする見解を述べた。小稿は、さらに把手付小形壺Aの祖形を台付壺に求め、こうした朝鮮半島南部地域との隔地間の土器交流が、鉄製素環刀などの大陸系鉄器が流入する後期初頭～前葉にまで遡ることを述べたものである。脱稿後、伽耶系土器と山陰系土器の親縁関係を考察した中村五郎氏が、伽耶系土器は出雲を経由して列島に広まったとし、そうした例の一つとして、出雲市西谷3号墓出土の把手付小形壺Aの祖形を巾着袋形土器とする見解を出されていることを知った（中村五郎「伽耶と北日本の間－土器編年からみた出雲の王墓の出現その他－」（『日本考古学』第11号 日本考古学協会）2001年5月）。西谷3号墓の築造時期は、弥生後期後葉～末で、その把手付小形壺Aは、近畿地方北部から北陸地方の土器の模倣であることから（渡辺貞幸「[出雲連合]の成立と再編」（『出雲世界と古代の山陰』）1995）、この土器によって出雲と伽耶の交流をのべることはできないが、把手付小形壺Aの系譜については、中村氏と同様の結論に至っている。

遺物実見、資料収集にあたっては、以下の方々にご高配を賜り、便宜を図っていただいた。芳名を記して感謝したい。

安在皓・青木一男・赤塚次郎・石黒立人・白居直之・白数真也・川崎保・久保山啓成・橋本勝行・長谷川達・原田幹・保阪太一・藤村俊・松井忠春

注58 白数真也・肥後弘幸他『大風呂南墳墓群』（岩滝町文化財調査報告書第15集 岩滝町教育委員会）2000

注59 集落出土類例として福岡県前原市三雲遺跡仲田地区I-16 1号住居、大分県大野郡犬飼町高松遺跡18・25号住居、広島市上深川遺跡4号住居、同市毘沙門台東遺跡B・C地点などにある。また、墳墓出土類例として広島県山県郡千代田町中出勝負峠8号墓、岡山県総社市宮山墳丘墓などにある。

注60 清野孝之「古墳副葬漁撈具の性格」（都出比呂志編『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』大阪大学考古学研究室・大阪大学考古学友の会）1999

注61 樋口隆康『昭和28年 椿井大塚山古墳発掘調査報告』（京都府山城町埋蔵文化財発掘調査報告書第20集 山城町教育委員会）1998、近藤義郎・新納泉編『浦間茶臼山古墳』（浦間茶臼山古墳発掘調査団）1991

注62 丸山次郎編「古天王墳墓・古墳群」（『弥栄町内遺跡発掘調査報告書』京都府弥栄町文化財調査報告書第19集 弥栄町教育委員会）2001

注63 櫃本誠一他編『但馬・妙楽寺遺跡群』（豊岡市郷土資料館調査報告書第5集 豊岡市教育委員会）1975、岡田章一・渡辺昇『半田山－山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告』IX（兵庫県文化財調査報告第65冊 兵庫県教育委員会）1989

注64 林大智・佐々木勝「北陸南西部地域における弥生時代の鉄製品」（伊藤雅文他編『石川県考古資料調査・集成事業報告書』補遺編 石川考古学研究会）2001

注65 宍戸信悟・上本進二編『砂田台遺跡』I（神奈川県立埋蔵文化財センター）1989、宍戸信悟・谷口肇編『砂田台遺跡』II（神奈川県立埋蔵文化財センター）1991

- 注66 瀬戸谷皓編「豊岡市鎌田・若宮古墳群」(『豊岡市文化財調査報告書集1989年度』豊岡市文化財調査報告書23～25 豊岡市教育委員会) 1990、石崎善久「金谷古墳群(1号墓)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第66冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注67 竹原一彦・河野一隆「浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓」(『京都府遺跡調査概報』第84冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 注68 黒田裕司「西弥護免遺跡出土の鉄器について」(埋蔵文化財研究会事務局編『埋蔵文化財研究会 第16回研究集会発表要旨関連資料集1・2(弥生時代から古墳時代初頭における鉄製品をめぐって)』埋蔵文化財研究会) 1984、清水博・白居直之・百瀬忠幸他『六科丘遺跡』(橿形町文化財調査報告No.3 橿形町教育委員会) 1985
- 注69 後田原遺跡出土例は、鉄釧の一部の可能性もあるかもしれない。類例の資料について、青木一男氏・川崎保氏からご教示いただいた。記して感謝したい。戸沢充則「後田原遺跡(川岸新倉夏明)」(『岡谷市史』上巻 岡谷市)、小沢由香利・横内やよい「岡谷市後田原遺跡出土の弥生土器」(『長野県考古学会誌』第37巻 長野県考古学会) 1980
- 注70 村川行弘・石野博信『会下山遺跡』(芦屋市文化財調査報告第3集 芦屋市教育委員会) 1964、山下誠一他編『殿原遺跡』(飯田市教育委員会) 1987、友松論『久保上ノ平遺跡』(南箕輪村教育委員会) 1997
- 注71 白居直之「再生される銅釧ー帯状円環型銅釧に関する一視点ー」(『長野県埋蔵文化財センター紀要』8 (財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター) 2000
- 注72 高野は、近畿地方北部の東海系土器を手がかりに、弥生時代後期の近畿地方北部と東海地方との交流について考察している(高野陽子「土器の交流ー近畿北部と東海ー」(『第9回 春日井シンポジウム2001年』春日井市教育委員会) 2001)。
- 注73 銅釧における半島と列島の比較研究は、小田富士雄「弥生時代円環型銅釧考」(『古文化談叢』第13集 九州古文化研究会 1984)に詳しい。帯板系鉄釧に類する環状鉄製品は、平安北道土城里・大邱直轄市坪里洞などにみられる(李南珪「韓国初期鉄器文化の形成と発展過程」(『東アジアの古代鉄器文化ーその起源と伝播ー』 1993年たたら研究会国際シンポジウム予稿集 たたら研究会) 1993)。
- 注74 前掲注58文献
- 注75 形式分類については、以下の文献において述べた。高野陽子「弥生後期前半期における高坏の時間列」(『京都府埋蔵文化財論集』第4集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001 また、分類の方法については、寺沢薫氏が奈良県六条山遺跡・矢部遺跡などで実践し、提唱した様式論に基づく分類を踏襲しており、本稿では1次の属性による分類に英大文字による表記を、また2次の属性による分類に算用数字による表記を用い、組み合わせて形式名としている(寺沢薫「様式と編年のありかた」(『弥生土器の様式と編年』近畿編I 木耳社)1989)。
- 注76 前掲注58文献においても、体部片(第13図)について、東海系の可能性があることが指摘されているが、赤塚次郎氏からも、口縁部(第7図)とセットとみると、東海系パレス壺となる可能性の高いことをご教示いただいた。
- 注77 前掲注66文献
- 注78 これまで把手付鉢という慣用されている形式名を用いてきたが、口径に比して器高が大きくなるものが通例であり、今後、壺として分類することにしたい。この形式については、肥後弘幸氏が朱壺の可能性のあることや、墓専用の土器でないことなどを指摘している(肥後弘幸「コーヒーカップ形土器雑考」(『京都府埋蔵文化財論集』第4集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001)。

- 注79 橋本勝行・中川和『今市古墳群・墳墓群・経塚発掘調査概報』（大宮町文化財調査報告第19集 大宮町教育委員会） 2001
- 注80 韓炳三「原三国時代－嶺南地方の遺跡を中心として－」（『韓国の考古学』 講談社） 1989
- 注81 申敬澈「韓国の瓦質土器」（『日韓交渉の考古学 弥生時代編』 六興出版） 1991
- 注82 李健茂ほか「昌原茶戸里遺跡発掘進展報告(Ⅱ)」（『考古学誌』第3集 韓国考古美術研究所） 1991、李健茂ほか「昌原茶戸里遺跡発掘進展報告(Ⅲ)」（『考古学誌』第5集 韓国考古美術研究所） 1993、李健茂ほか「昌原茶戸里遺跡発掘進展報告(Ⅳ)」（『考古学誌』第7集 韓国考古美術研究所） 1995。茶戸里遺跡出土の土器実測図面は、以上の文献から引用した。
- 注83 安在皓「昌原茶戸里遺跡の編年」（『韓国古代史と考古学』別冊） 2000 安在皓氏には、嶺南地域の巾着袋形土器の分布や、形態的特徴、および研究の現状についてのご教示をいただいた。記して感謝したい。
- 注84 高久健二「韓国南部地域における原三国時代の墳墓と集落」（『渡来人登場－弥生文化を開いた人々－』大阪府立弥生文化博物館） 1999
- 注85 韓炳三氏は、古式の巾着袋形壺の口縁部の特徴を、端部を折り、断面を三角形に処理することとする。前掲注80文献。
- 注86 小山田宏一「近畿地方暦年代の再整理」（『考古学と実年代』第40回埋蔵文化財研究集会） 1996
- 注87 前掲注3文献
- 注88 野島永・河野一隆「玉と鉄－弥生時代玉作り技術と交易－」（『古代文化』第53巻第4号 古代学協会） 2001
- 注89 福島孝行「弥生墳墓における鉢の副葬作法について(2)」（『京都府埋蔵文化財情報』第81号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター） 2001
- 注90 深澤芳樹「尾張における凹線文出現の経緯」（『朝日遺跡』V (財)愛知県埋蔵文化財センター） 1994
- 注91 赤塚次郎「山中式というデザイン」（『考古学フォーラム』3） 1993 朝日遺跡S X 194は包含層資料であるが、山中式前期の資料が含まれ、将来的には細別が可能とされる。
- 注92 加藤安信ほか『朝日遺跡』（愛知県教育委員会） 1982
- 注93 東海地方では、「ワイングラス形高杯」とされる形式に該当する。
- 注94 いわゆるワイングラス形高杯は、その基本デザインに異系統性が考えられるとされる(前掲注91文献)。
- 注95 森岡秀人氏は、瑞龍寺山山頂遺跡出土の舶載内行花文鏡等の金属器の搬入ルートとして、日本海側から近江地方北部を介して、東海地方へ至るルートに注目している(森岡秀人「弥生集落研究の新動向(Ⅳ)」（『みずほ』第33号 大和弥生文化の会） 2000)。

参考文献

三木弘編『弥生クロスロード－再考・信濃の農耕社会－』大阪府立弥生文化博物館 2001

京都府内における奈良・平安期の集落構造について

柴 暁彦

1. はじめに

平成9年度から11年度までの3か年、「京都府内における奈良・平安期の集落構造について」というテーマで研究員森下衛(現 京都府教育庁指導部文化財保護課)、古瀬誠三(現 京都府立総合資料館)および柴の3名によって共同研究を行った。府内でのこうした集成作業は他地域と比較すると、立ち遅れた状況にあり、共同研究において問題を取り上げ、その成果を公表することを目的に作業を進めた。本稿は、研究成果の一部を紙数の許す限り発表するものである。

2. 京都府内における古代集落の展開〈概観〉

(1) 丹後地域

集落の分布と立地 丹後地域とは、現在の京都府北部でも、丹後半島に相当する地域を指す。古代には、8世紀初頭に丹波国から分国されたもので、加佐郡・与謝郡・中郡・熊野郡からなる。当地域の古代集落跡の分布は、大きく海浜部と内陸部とに分かれ、それぞれが特性を示している。

海浜部に分布する集落跡は、農耕に適した平地部というより、漁業もしくは水上交通を意識した立地を示している。このため、漁港もしくは水上交通に適したかつての潟湖に近接する微高地上に展開する集落が非常に目につく。丹後半島には、現在も久美浜湾(小天橋)、離湖、阿蘇海(天橋立)などの潟湖が認められるが、かつては竹野川の河口部(現在の丹後町間人付近)などにも潟湖の存在したことが想定されている。そして、集落跡は、こうした潟湖を望む台地上もしくはこれに面した丘陵裾付近などに顕著に分布している。

一方、内陸部に分布する集落は、野田川・竹野川・佐野谷川などの各狭小な平野部を形成する河川に沿って形成された河岸段丘上などに分布する。これらは、非常に不安定ながら各河川に面した低地部に生活基盤たる水田を形成していたものと判断される。なお、近年、大宮町を中心に、丘陵が入組んだ狭小な谷部で丘陵裾に張り付くように立地する集落跡の検出例が相次いだ。これらは、緩斜面に設けられた竪穴式住居跡およびこれに近似した形状の掘立柱建物跡をその住処としているが、多くの場合、斜面の下方側はすでに流出しており、およそ半分のみが遺存する状況で検出される非常に特徴あるものである。平地部、特に河川の氾濫による被害を受けない平野部が少ない当地に特徴的な集落形態として注目すべきものといえる。

集落遺跡の動向 丹後地域においては、現在のところ、古代(奈良～平安時代)の集落遺跡としての良好な調査例は少ない。これは、近年、当地で進められた国営・府営による農業基盤整備事

業にともなう広範囲な調査によっても状況は変わらなかった。

当地域の特質として、まず集落立地に適した平地部が少ないといった点が指摘できる。そのため、仮に丘陵裾部のわずかな平坦部に集落が形成されたとしても、後世にその周辺を流れる小河川の流路変遷に伴い、流失してしまうといった地理的条件が存在したと思われる。

こうした調査事例として、松田遺跡・枯木谷遺跡・五十河遺跡(大宮町)などがみられる。松田遺跡は、大宮町の北東部にある。圃場整備事業に先立って調査が行われたが、旧河道と思われる流路跡から土器類とともに多くの木製品が出土したにもかかわらず、建物遺構等は検出されなかった。現地形などからみて、集落跡本体は、すでに流失してしまっている可能性が高いと判断された。また、枯木谷遺跡は大宮町南西部、狭小な谷筋の入り組んだ谷奥のわずかな平坦部に立地する。調査では、やはり流路跡とわずかに掘立柱建物跡の痕跡が確認されたが、この流路によって多くの遺構がすでに流失してしまっているものと判断される。五十河遺跡も圃場整備に先だって試掘調査が行われた。扇状地上に立地し、弥生時代後期から平安時代にわたる時期の遺物が出土したにもかかわらず、遺構の遺存状況は極めて悪かった。こうした事例に対し、当地域では、正垣遺跡(大宮町)や浅後谷遺跡など丘陵裾の緩斜面(扇状地状地形部)に形成された遺跡で、比較的良好に遺構が遺存している事例を認める。

一方、遺跡の立地という面で注目されるのが、近年発見が相次いだ、エノボ横穴・裾谷横穴・幾坂遺跡(大宮町)などのように横穴群の所在する谷奥の丘陵裾付近の狭小な平坦面で確認される竪穴式住居跡群など(7世紀後半～8世紀初頭)である。こうした事例は、平地部が限られるといった地理的な環境のなか、当地域で、比較的多く営まれていた集落の実態か特異な性格をもった集落跡か、現状では判断しかねる。

丹後地域における集落構造の大きな画期は、7世紀末～8世紀初頭頃に訪れたらしい。この時期を境に、住居の構造が竪穴式住居跡から掘立柱建物跡へ変化したといえる。現状では、こくばら野遺跡(久美浜町)がその1例である。当遺跡は、久美浜湾を望む台地上に立地するもので、7世紀後半～末頃に営まれた竪穴式住居跡による集落が、8世紀前半頃には掘立柱建物跡による集落への移行が完了したことを確認できる。これに対し、8世紀段階以降も竪穴式住居跡の存在が認められるのは、遠所遺跡・ニゴレ遺跡・黒部遺跡(弥栄町)などの製鉄関係遺跡を中心とし、工人の住居ないしは工房関連で、丘陵斜面や地形変換点付近に営まれたものに限定される。

官衙遺跡ほか 上記集落遺跡とともに、官衙遺跡ないしは、これに準ずる遺跡(官人層の居宅など)は、今のところ不明な点が多い。

丹後国府跡については、現在最も有力な説として岩滝町男山地区があげられているが、ほとんど発掘調査が行われておらず、確定には至っていない。また、国分寺跡については、現在、府立丹後郷土資料館がある宮津市国分の地にその遺跡を確認することができる。ただし現地表面に残る痕跡は鎌倉時代以降のものである。

一方で、各郡レベルの官衙遺跡においては不明であるが、郡もしくはそれ以下のレベル(里のちの郷レベルや官人層の居宅を含む)における官衙的な遺跡は、幾つかを指摘できる。日光寺遺

跡(久美浜町)では、2間×5間の大型の建物1棟が確認されているが、これに付随する建物の状況や、この建物跡の所属時期などは明らかでない。また、岩木遺跡(丹後町)では、円面硯の出土が確認されるが、これに伴う建物跡は確認されていない。ただ、このいずれの遺跡も、海(日本海ダイレクトではなく、潟湖)を眼前に望む台地上に立地している点で共通しており、水上交通に関する何らかの施設の存在も予想される点で注目すべき遺跡である。一方、内陸部にある遺跡としては、正垣遺跡(大宮町)で、庇付の建物をはじめとする建物群及び墨書土器などが確認され、有力者層(もしくは里・郷長層)の居宅の可能性が指摘されている。

また、このほか、出土遺物で注目すべき要素が認められるものに文字資料がある。現在までに11遺跡から墨書土器が、1遺跡から木簡の出土が確認されている。うち、10世紀とやや時代は下るが、小鍛冶の遺構を伴った横枕遺跡(網野町)は、単なる一般集落か、官衙的な遺跡に伴う工房か今後、十分な検討が必要であろう。また、官人層の居宅ではないかと考えられている正垣遺跡から出土が認められている点は、先にふれたが、ここから北東方向に約2km離れた、谷内遺跡で、明確な建物遺構は確認されなかったが、内外面に「富」と墨書された平安時代の須恵器碗が2点、土坑から出土しているのをはじめ、これに近接する大田鼻横穴群中から「厨」「厨物」と記された土師器が出土している。厨とはいうまでもなく、国府・郡衙などの厨房施設に関するものであり、この横穴群の被葬者がこうした官衙関連の施設へ出仕していたことを窺わせる。これが、在地的な墳墓としての横穴であることからすれば、郡レベルの官衙との関連を考えたい。

(2)中丹地域

集落遺跡の動向 この地域は、丹波の北半部、由良川流域に位置する地域である。やはり、古代集落の動向を探る上で、良好な調査例はいまだ少ない。各集落の立地に関してみると、由良川の形成した自然堤防上に立地する遺跡、由良川に面する段丘上に立地する遺跡、由良川の支流に面して存在する遺跡などがある。

一般的な集落の調査例としては、庵我遺跡・石場遺跡(福知山市)・里遺跡(綾部市)などがある。庵我遺跡は、由良川に面した段丘上に立地するもので、2間×3間の掘立柱建物跡2～3棟に、2間×2間もしくは2間×3間の倉庫建物が伴う。石場遺跡は、調査範囲の関係で遺跡全体が調査されたわけではなく、倉庫建物は未確認ではあるが、基本的に2間×3間(40～50m²)の南北棟建物によって構成されている。総数で9棟が確認されているが、その主軸方向などから、3～4期にわたるものと考えられ、一時期に存在したのは2棟前後であったと考えられている。時期的には、出土遺物に8世紀後半から9世紀中葉のものがあり、この間に継続的に営まれた集落遺跡であろう。また、里遺跡は、奈良時代の掘立柱建物跡(2間×3間)など小規模な南北棟建物が数棟検出されており、その様相は上記の石場遺跡と類似する。

これらに対し、志高遺跡(舞鶴市)もこうした集落跡に属すると考えられるが、2間×3～5間の建物2～3棟に総柱倉庫2～3棟が伴う。先の3遺跡例と比べやや上位に位置する立場の居住者を想定できる。

このほか、さらに有力者の居宅(より上位に位置した者)の集落として、上ヶ市遺跡(福知山

市)・桑飼上遺跡(舞鶴市)・小西町田遺跡(綾部市)・倉谷遺跡(舞鶴市)などがある。上ヶ市遺跡(福知山市)は由良川を望む台地(段丘)上に立地し、奈良～鎌倉時代にわたって、大規模な掘立柱建物跡が連綿と営まれつづけた注目すべき遺跡である。うち、奈良～平安時代の建物は2間×4～5間の南北棟建物2～3棟と倉庫建物1棟から構成される単位が3～4時期にわたって存続したものとされ、有力者の居宅と判断されている。一方、桑飼上遺跡(舞鶴市)では、8世紀前半～後半にわたる時期の掘立柱建物跡が検出され、3～4期にわたる変遷が考えられている。うち2期に想定されている建物群は、周囲に堀(柵列もしくは庇か)を有する東西棟(2間×4間)を中心に、その周囲に4～5棟の南北棟建物を配置することが確認されており、有力者の居宅と理解されている。小西町田遺跡は、奈良時代～平安時代の間に4期にわたる建物配置の変遷が確認されている遺跡であるが、出土遺物に施釉陶器や墨書土器などが認められ、単なる一般集落というより、官人層の居宅もしくは荘園の荘家ではないかと考えられている。このほか倉谷遺跡では、10世紀頃の南面庇を付した東西棟の掘立柱建物跡を中心に数棟の雑舎が配置される状況が確認された。

なお、当地域において、集落における住居の構造が竪穴式住居跡から掘立柱建物跡へと変化したのは、7世紀末葉頃と考えられる。ただし、竪穴式住居跡は、8世紀前半頃まで残っており、いち早く掘立柱建物跡を導入した集落と、竪穴式住居跡を継続的に使用し続けた集落とが明瞭に分かれる可能性がある。少なくとも8世紀中頃には全ての集落で掘立柱建物跡への移行は完了したようである。

官衙遺跡ほか 中丹地域の官衙遺跡として最も著名なものに何鹿郡衙跡とされる青野・綾中遺跡群(綾部市)がある。現在の綾部市街地の北西部一帯に所在し、7世紀段階からの集落跡や白鳳寺院である綾中廃寺を含み込む広大な遺跡群である。その中心部付近では、7世紀後半～8世紀初めころまでの大規模な掘立柱建物跡が確認されており、これが何鹿郡衙(時期的には推定何鹿評衙を含む)と推定される。ただし、掘立柱建物跡群を囲む周辺域では、竪穴式住居跡による集落が8世紀段階までは残ると報告がある。当地域内における官衙遺跡・古代寺院としては、このほか和久寺跡(白鳳寺院；福知山市)、多保市廃寺(奈良寺院；福知山市)などがある。ほかに官衙遺跡と認識されるものはないが、先の桑飼上遺跡などは、未調査部分に前庭部を有した官衙的な建物配置に復原することも可能な要素をもっており、由良川に面し、水運に関した官衙が営まれていた可能性もある。また、倉谷遺跡などは平安後期段階の荘園の荘家の可能性も考えておく必要がある。いずれにしても、由良川を中心とした水運は、当地において極めて重要な意味を有しており、今後、この地域で、官衙遺跡もしくはこれに準じる様な性格(特に倉庫群をとまなうような)を有した遺跡が発見される可能性は極めて高い。

こうした各遺跡のほかに、製塩遺跡としての浦入遺跡の存在は注目される。遺跡は、8世紀前半頃から急激に体制が整備され、製塩炉の数も増加する。そして12世紀頃まで操業が続けられたらしい。こうした特殊な窯業生産遺跡がどのように国家に掌握されていたのか、非常に興味を持たれる。なお、遺跡からは「政所」、「与社」と墨書された土器が出土している。

(3)南丹地域

集落遺跡の動向 南丹地域とは、亀岡市・八木町・園部町・京北町・日吉町を中心とするが、当地域も古代の集落跡の調査例は少ない。

当地域で、集落の様相が判明する遺跡として、まず北金岐遺跡がある。遺跡は弥生時代後期から鎌倉時代にわたる複合遺跡であるが、このうち奈良時代(8世紀中頃)の遺構として集落跡が検出されている。集落は2間×3間の建物2棟に、1棟の倉庫が付随するのを1単位として、2つの単位が同一地点に2期にわたって存在する。集落は南北幅約50m強の範囲に溝によって区画されている状況を呈し、建物の主軸方位は周囲に展開する条里地割に沿う。

一方、千代川遺跡では、Bブロックとしている調査区において、有力者層の居宅(北金岐遺跡と比べより上位に位置)と思える集落が確認されている。時期的には8世紀中頃から後半頃に属す数棟の建物が重複して認められるが、うち主軸がやや西偏する一群は2間×3間の南北棟建物3～4棟(一部東西棟を含むか)に、その東方で南北に並ぶ倉庫建物が2棟以上付随して1つの単位を構成するものと考えられる。現状で、傑出した規模の建物の存在や、その配置に明瞭な規則性などは認めがたいが、「大家」・「小家」などの墨書土器などが伴出するなど、特異な掘立柱建物跡群であったことを示す。同様な例として、船井郡衙と推定されている宮の口遺跡(園部町)がある。ここでは、多数の掘立柱建物跡が検出されているが、その配置に郡衙中心部を示すような配置は認められない。郡衙遺跡が所在するにしても、調査地点はその中心部ではないと考えられる。建物は2間×3～4間が多く、一部に倉庫建物が認められる。2～3棟の建物に1～2棟の倉庫が付随する単位が抽出されるものとする。

こうした事例に対し、千代川遺跡Dブロックでは、2間×5間の東西棟が南北に2棟並列し、官衙風の配置をとる一画が確認されている。時期的には9世紀段階のものとする。官人層の居宅とすべきか、当地に推定されている国府に関連する官衙ブロックとすべきか、難解な資料である。ただ、これが官人層の居宅であれば、先述の千代川遺跡Bブロックや宮の口遺跡の例より、さらに上位の居住者を想定すべき事例である。

これら各遺跡のほか、天若遺跡(日吉町)では、1～2棟の掘立柱建物跡に竪穴式住居跡が併存している可能性がある集落構造を呈しているほか、亀山城下層遺跡では、1間×3間の建物1棟に2間×2間の倉庫建物1棟がセットで検出されている例がある。先の北金岐遺跡例に近いタイプの集落といえる。

以上、南丹波の様相であるが、ここでもやはり、早くとも7世紀末葉頃に一般集落で竪穴式住居跡から掘立柱建物跡へ住居の構造が変化したものと考えられる。ただし、7世紀前半の豪族居館とされている八木嶋遺跡例は、この中で極めて特異な存在といえる。八木嶋遺跡は、現在の八木町の西半部、大堰川西岸の平地部に立地する。背後の丘陵裾には6世紀末から7世紀前半に築造された坊田古墳群があり、これと時を同じくして営まれた居館ともいべきもので、大型掘立柱建物跡群によって構成される。建物群は、大まかに3時期にわたって営まれたと推定されるが、今後、より詳細な検討が必要であろう。

官衙遺跡ほか 当地には、丹波国府、同国分寺・国分尼寺があり、また桑田郡衙、船井郡衙な

どが所在した。国府跡については、最も有力な候補地は千代川遺跡であるが、近年は八木町屋賀付近に求める説も有力となりつつある。先にも示したが、千代川遺跡Dブロックで確認された官衙風配置の建物跡に関しては、国府関連でとらえるのか、郡衙の一部とするのか、さらに官人層の居宅ととらえるのか、今後、十分に検討すべきである。また、遺構は未確認であるが、屋賀近辺には、中世期の絵図に国八丁と描かれており、鎌倉時代以降に国府が置かれていた可能性は高い。加えて、これも遺構は未確認であるが、先の八木嶋遺跡の一面では、9世紀に属す多量の墨書土器が、何らかの祭祀に使用されたかのごとく、自然流路に投棄されていた状況が確認されている。付近に公の施設が所在したことを窺わせる。なお、白鳳寺院としては、亀岡市内に観音芝廃寺(篠町)・与野廃寺(曾我部町)・桑寺廃寺(千代川町)・池尻廃寺(馬路町)のほか、北桑田郡京北町に周山廃寺がある。

国分寺・国分尼寺は、亀岡市千歳町にあり、ともに亀岡市教育委員会による発掘調査でほぼその様相が確認されている。ただ、各郡衙となると、いずれも不明な点が多い。

(4) 北山城地域

平安遷都以前の飛鳥時代においては官人クラスの建物跡は確認されていない。そのなかで寺院跡としては北野廃寺が挙げられる。この寺院跡は蜂岡寺と想定されているが、施設を区画する溝や築地跡が確認されているほか伽藍配置は不明である。実際には寺の存在が確認できるのは、「野寺」「鶴室」などの墨書が見られる土器の年代とされる8世紀初頭である。この後10世紀段階まで存続が確認されている。7世紀初頭とされる遺跡には檜原廃寺・鳥羽遺跡・中臣遺跡・上久世遺跡・大塚遺跡・大宅廃寺などがある。中臣遺跡は京都市の東部の山科区に所在する。遺跡の立地は東を山科川、西を旧安祥寺川が流れ2河川が合流する栗栖野丘陵の低位段丘にある。標高は30m前後である。当遺跡では60数次にわたり調査がなされており、その中で掘立柱建物跡、柵、溝などが検出されている。時期については7世紀中葉以前と以降に二分されるようである。前者の建物は磁北から西に振れる傾向がある。後者の建物跡はほぼ磁北を向く。上久世遺跡では奈良時代の遺構として掘立柱建物跡や柵列を検出している。建物跡は座標北から4°から9°西側に振れている。また、柵列についても同様の振れを持っている。ただし調査範囲が限定されており、詳細は不明である。ただし、8世紀後半以降は都が置かれており、遺構が判然としない。

(5) 乙訓地域

長岡京の置かれる以前の8世紀前半に集中して遺跡が認められる。中海道遺跡・中福知遺跡・東代遺跡・今里遺跡・開田城ノ内遺跡・南栗ヶ塚遺跡・下植野南遺跡などがある。中福地遺跡は山城盆地の西側を南流する桂川の右岸に立地する。標高は13～16mの扇状地や氾濫原にあたる。この遺跡では大型瓦葺き建物のほか、掘立柱建物跡、井戸などが検出されている。南栗ヶ塚遺跡では2間×5間以上の東西棟の身舎に南北二面庇の大型掘立柱建物跡や2間×5間の南北棟掘立柱建物跡などが検出されている。この遺跡は国府に推定されているが、不明な点が多い。下植野南遺跡では古墳時代後期初頭(5世紀末～6世紀初頭)段階で竪穴式住居跡と掘立柱建物跡が併存する状況にあり、奈良時代前半には確実に竪穴式住居跡が存続する。これが奈良時代中葉段階に

なると掘立柱建物跡に置換されるようである。この状況が乙訓地域の通有性といえる。また国府推定地には百々遺跡も含まれるが、出土遺物の中心が9世紀中ごろ～10世紀と見られ第3次山城国府の年代と齟齬をきたす。

(6) 南山城地域

集落遺跡の動向 木津川流域の微高地に立地する遺跡を中心とする。京都市と接する久御山町から奈良県と接する木津町まで広範に及ぶが該当する遺跡は散発的であり、平城京に接する地域にやや集中する。全体としては不明な点が多い。

この地域では八幡市の内里八丁遺跡がある。当遺跡は木津川左岸の微高地に位置し標高は13m前後である。弥生時代後期から鎌倉時代にわたる複合遺跡である。飛鳥時代に竪穴式住居跡から掘立柱建物跡への変遷が見られるようであり、この時期に並存していたものが奈良時代には掘立柱建物跡に完全に移行する。遺跡の場所は古山陰道の推定地に近く、D・E地区から道路状遺構が確認されており、候補のひとつとされる。平安時代後半(9世紀)には、建物は母屋と納屋といった付属建物とセットを成しているようである。この時期には農村集落へ変化することがうかがえる。新田遺跡は八幡市と京田辺市にまたがる遺跡である。調査が断片的であり集落の規模は判然としないが、7世紀前半～中葉には竪穴式住居跡跡が主体として見られ、一部掘立柱建物跡が併存する状況にある。これが7世紀後半～8世紀初頭になると掘立柱建物跡に移行するようである。

城陽市の芝山遺跡は宇治丘陵から西方に延びる低丘陵の先端に位置する。付近には梅の子塚古墳群などが所在している。遺跡の標高は35～40mである。7世紀前半の飛鳥時代には環状に5基の竪穴式住居跡が配置されている。8世紀段階になると、大規模な集落が形成される。多数検出した柱穴のなかで18棟の掘立柱建物跡が復原されている。これらの建物跡について明確な言及は避けているものの、A地区で検出した井戸の出土遺物に平城宮式の瓦、土師器・高杯が見られ、平城京や長岡京などの都城で出土する遺物構成に類似することから、Eトレンチ周辺で検出した建物群が官衙的性格と考えた場合、A地区で検出した掘立柱建物跡群は、一般集落以外の官衙に付随した施設の可能性を指摘している。今後周辺での調査成果の蓄積に期待される。

畑ノ前遺跡は相楽郡精華町に所在する。木津川左岸の台地上に位置しており、70m×70mの範囲に奈良時代前期から中期にかけての掘立柱建物跡が23棟検出されている。建物規模は2間×3間、2間×4間が主体となる。建物配置は中央部付近に切り合い関係を持ち、その周囲に東は南北棟、北は東西棟の建物が配されている。しかし、建物のさらに外周は溝・土塁などの人工的な施設は見られず、巧みに自然地形を利用している。建物の時期はI期とする奈良時代前半とII期とする奈良時代中葉に大別される。建物跡の性格については建物配列の低企画性から官衙より文献に残る稲蜂間氏関係の私的居館を提唱している。

樋ノ口遺跡は生駒山地に源を発する山田川と木津川が北に大きく流れを変える屈曲部の合流地点の西側平坦部に位置する。標高は45m前後である。平城宮の北約5kmの距離で遺跡の東側には古代山陽・山陰道が想定される場所にある。建物の時期はA期(8世紀中葉)とB期(8世紀末～10世紀初頭)に区分される。寺院跡や離宮跡と考えられる説も見られるが、相楽郡衙をも視野に

入れる向きもある。

官衙遺跡ほか この地域で主要な遺跡に城陽市の正道官衙遺跡がある。久世郡衙の推定地に比定される。木津川右岸の丘陵端部にあたる標高40～50mの台地上に位置している。7世紀第3四半期から9世紀前半までの掘立柱建物跡31棟が検出されており、出土遺物および建物の主軸方位・規模・構造などからⅠ～Ⅲ期に分類される。また、木津町の上津遺跡は、木津川が北に大きく流れを変える自然堤防上に立地する遺跡である。この遺跡の対岸にあたる山城町には、高麗寺跡がある。当遺跡の標高は31m前後である。トレンチによる試掘調査を経て遺構密集部分についての拡張調査であり、全体の建物配置および集落を画する施設について不明な点も見られる。検出遺構には掘立柱建物跡5棟のほか、東西方向の溝跡などがある。これらの遺構についてはⅠ・Ⅱ・Ⅲ群に分類される。Ⅰ群の中心建物は3間×2間の東西棟の身舎に東を除く三方に庇を持つものである。この建物に2間×2間の南北棟建物が付随する。時期は平城Ⅲである。Ⅱ群は磁北から東に4°程度振れを持つ遺構群で溝、柵列などである。時期は平城Ⅲ～Ⅴである。Ⅲ群はほぼ真北を向く遺構であり、3棟の建物がある。時期は平城Ⅴである。しかしⅢ群の遺構については中心建物に対する付属建物という判断であるが、中心建物については判然としない。これらの遺構についての性格は、奈良時代の文献に見られる「泉木津」の官衙施設とする説もある。

3. 小 結

京都府北部においては、7世紀末葉頃から8世紀中葉頃の間には竪穴式住居の廃絶、掘立柱建物のみからなる集落の出現といった様相が認められ、集落景観が変容したことが再認識された。さらに、丹後地域においては、近年調査された横穴墓群でも8世紀中葉を境に造営が停止されたことが確認されている。この時期、当地の人々の生活様式には大きな変革が訪れたとみることができ。

このような京都府北部の状況は、7世紀前半頃に大きな変革期を迎えた畿内とは大きな差異が認められる。

また、南山城地域ではこの画期がおおよそ7世紀後半から8世紀前半に認められる。さまざまな政策によって急激に社会変革を迎えた畿内中心部とは異なり、当地においては、きわめてゆるやかに律令社会へと変化していった状況が認められ、最終的に大きな変化として現れるのは、8世紀中葉頃である。このことは、国府の設置・整備などを背景に、実質的な律令制が急激に浸透したことを示すものと考えられる。

これらの集落の一部は在地の有力者として確実に成長し、やがて平安時代には律令体制を崩壊する社会情勢をかたち作っていったのである。

なお、今回発表したものは、共同研究者との資料収集、討議を基に柴が執筆したものである。文献については紙数の関係から割愛した。

(しば・あきひこ＝当センター調査第2課調査第4係調査員)

11. 愛宕神社古墳

所在地 竹野郡丹後町竹野小字イリ
調査期間 平成13年10月23日～平成14年2月14日
調査面積 約600m²

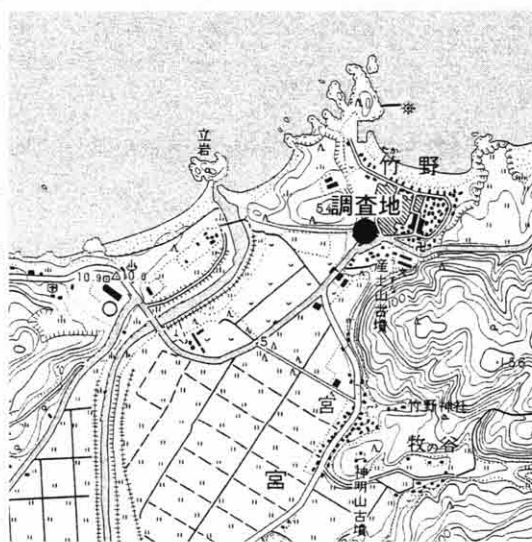
はじめに 愛宕神社古墳は竹野川河口部東岸の丘陵稜線上に立地する。竹野川河口域には古代の潟湖を中心に多数の遺跡が分布し、丹後半島でも有数の遺跡密集地といえることができる。集落遺跡としては、竹野遺跡が弥生時代前期から中世にかけての集落として知られ、古墳としては、200m級の前期大形前方後円墳である神明山古墳や中期の大形円墳である産土山古墳、後期の横穴式石室を内部主体とする大成古墳群、片山古墳群が近隣に分布する。愛宕神社古墳も、大成古墳群や片山古墳群同様、この地域の後期古墳の1基である。

今回の調査は国道178号道路特殊改良1種事業に伴う事前調査として実施した。なお、調査に係る経費は全額京都府土木建築部が負担した。

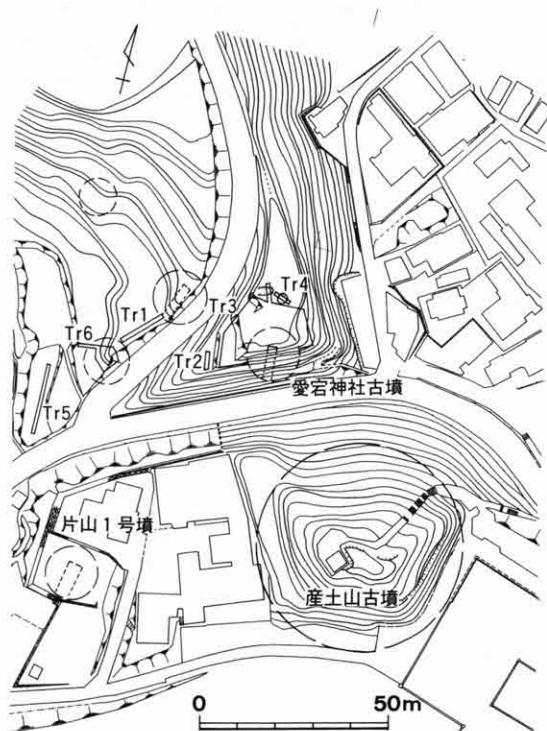
調査概要 今回の調査は、愛宕神社古墳本体の調査および周辺の遺構・遺物分布状況を把握するため6か所の試掘トレンチを設定して実施した。そのうち第3トレンチでは愛宕神社古墳の石室を確認したため、面的な調査を実施することとした。

愛宕神社古墳は横穴式石室を内部主体とする後期古墳であることが明らかとなった。古墳は、国道建設時に大部分を削平されているために遺存状況が悪く、墳丘については墳形・規模とも明確にすることができなかった。石室も大部分が破壊されており奥壁部分のみが残存していた。残存部の規模は奥壁幅約1.9m、残存長約1.3m、残存高約1.4mを測る。奥壁は3段分が遺存しており側壁は奥壁から2石分を確認することができた。奥壁は基底から2段目までを垂直に積み、3段目より持ち送る。基底には大形の石材と小形の石材を併用し、石材の隙間にはさらに小形の石材を詰め込み壁面を調整している。

埋葬面は2面を確認することができた。このうち、追葬面からは扁平な石材を用いた棺台を中心に玉類(ガラス製勾玉1点、瑪瑙製勾玉5点、碧玉製勾玉1点、碧玉製管玉2点、緑色凝灰岩製管玉1点、碧玉製切子玉1点、碧玉製平玉1点、ガラ



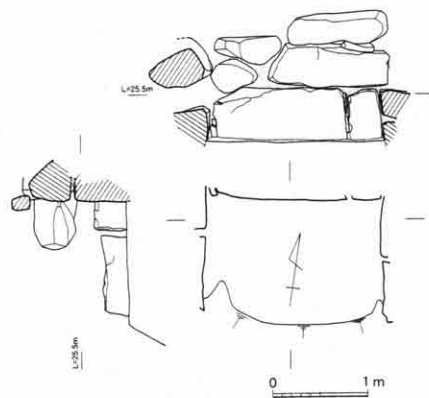
第1図 調査地位置図(1/25,000)



第2図 調査地周辺地形図およびトレンチ配置図

ス製丸玉4点)、須恵器椀1点、鉄刀1点を検出した。副葬品の検出状況や、棺台の配置から見て被葬者は奥壁に平行する形で西に頭位を置いて埋葬されたものとする。初葬面は追葬時の片付け行為などにより、埋葬当初の副葬品配置を留めていなかったが、須恵器杯蓋1点、鉄鏃1点が検出された。古墳の築造時期は出土須恵器から判断して陶邑TK217型式併行期、7世紀前半頃と考える。また、石室内からの出土ではないが、周辺部分から金環1点、須恵器高杯片・杯身片などが出土した。

丘陵の東西両側面には、地山を「L」字状にカットしたテラスが造成されていた。このテラス上からは多数の石仏、五輪塔が検出された。その数は約200点にのぼる。一石五輪塔の形態から見て中



第3図 石室実測図

世末期から近世にかけて造営された墓地と考える。東側テラスから、丘陵頂部にかけて直径20cm前後、深さ10~40cm程度のピット群を確認した。ピット埋土中には2・3点の火葬骨を収めるものがあり、火葬後、焼骨の一部を持ち帰り埋葬したものと判断される。西側テラスでは、このような火葬骨の埋納遺構は確認されなかったが、テラス上の流入土内から火葬骨片がわずかに出土している。

その他の試掘トレンチでは、1・5・6トレンチにおいて、ピット群・テラス状遺構などを確認し、古墳時代から

中世に至る遺物を確認した。中でも、第6トレンチでは新たに古墳を1基確認することができた。周囲に石材が露出していることから横穴式石室を内部主体とするものと推測される。この試掘トレンチ周辺は次年度以降面的調査を実施する予定である。

まとめ 今回の調査では新たに横穴式石室の調査事例を追加することとなった。この地域は大成古墳群、片山古墳群など横穴式石室墳が多数分布する地域であり、この地域の後期古墳の動向を知る上で欠かせない資料を得ることができたといえよう。また、中・近世墓群の調査として、丹後では野田川町地蔵山遺跡などが知られてきたが、今回の調査は新たに中・近世墓、石造物の資料を追加したものと評価できよう。

(石崎善久)

12. 桑原口遺跡第6次

所在地 宮津市喜多
 調査期間 平成13年6月5日～11月9日
 調査面積 約1,800m²

はじめに 今回の調査は、京都府道路公社の依頼により鳥取豊岡宮津自動車道路の建設事業に先立って実施した。桑原口遺跡は、宮津谷の中央部を北流する大手川の右岸に立地し、丘陵裾部から大手川にのびる微高地上に展開する。今回の調査は、遺跡範囲内の道路部分を本調査、遺跡隣接地の道路部分を試掘調査として実施した。なお、本調査地を便宜上A地区、試掘地をB地区と呼ぶこととした。A地区は昨年度に行った第5次調査に囲まれる調査地であり、このため、昨年度の調査成果から、遺構・遺物の密度が高いことが予想された。しかし、A地区は小規模な谷地形に当たっており、予想されたほどの遺構は見られず、南東隅の一部を除いて全体に遺構密度は低い。

調査の概要 A地区はトレンチ南東部の弥生後期から古墳時代の遺構が密集する部分、中央部を北流する流路群、西部に分布する掘立柱建物跡群、西端の弥生時代後期の土坑、溝という分布状況を示す。ここでは主な遺構として竪穴式住居跡SH01、不明遺構SX02、土坑SK42を紹介する。

竪穴式住居跡SH01はトレンチ南東部で検出した。多数の遺構に削平され、周壁溝のみを検出したに過ぎない。規模は南北5.0m、東西3.8mを測る。周壁溝は西側中央部で浅い部分があり、ここが入口になる可能性がある。支柱穴は北東、北西、南西隅付近で検出したが、南東隅付近では検出することができなかった。また、炉や竈、貯蔵穴などの屋内施設についても激しい遺構の切り合いなどにより床面がほとんど残っていないため、検出できなかった。遺物は周壁溝から弥生土器の小片が出土した。

不明遺構SX02はトレンチ南東部で検出した性格不明の遺構である。平面形は「T」字形で、3基の土坑が接続した遺構であるかのように見えるが、埋土は連続しており、遺物もお互いに接合するため、一つの遺構であると考えられる。規模は南北の残存長が2.5mを測り、東西が2.7mを測る。遺構の壁は袋状にえぐれており、東側の袋状にえぐれた部分からは長さ11mmの勾玉が出土した。底面は北側が最も深く、南側は比較的浅い。検出面



調査地位置図(1/50,000)

から最深部までの深さは35cmを測る。埋土は上層の黒褐色シルト、下層の黒褐色砂質シルトで構成されており、上層と下層の間に炭化物と焼土の層が挟まっている。また、上層と下層の間で、多量の土器が一括で出土した。こうした状況から、この遺構は最終的には焼土などと共に土器を廃棄した土坑であったと考えられる。また、西側をNR02によって上半部を削平されているため、土層断面にはNR02の堆積物が現れている。この遺構の当初の掘削目的に関して、壁が袋状を呈する浅い土坑を粘土採掘坑として報告した例があるが、こうした土坑の壁には良質な粘土の露出があるという。しかし、SX02の壁には粘土の露出は見られず、粘土採掘坑とするには根拠に乏しい。したがって、現状ではSX02は廃棄のために掘られた土坑であるとするより他はない。出土した遺物から、この遺構の埋没時期は弥生時代後期末、畿内地域で庄内式が盛行する段階であろう。

土坑SK42はトレンチ西端で検出した平面形が不整楕円形を呈する土坑で、規模は長軸550cm、短軸350cmを測る。埋土は炭化物を多く含む黒色シルトの単層である。土坑の中央部を後世の井戸SE01に切られている。埋土からは多数の弥生土器が出土した。土器は遺構底部分に比較的集まっており、炭化物も底部付近の密度が高かったことから、焼いたもの、または、焼けたものを土器片などのゴミと共に投棄した廃棄土坑であると考えられる。出土した土器は大型の壺、高坏、器台などで、時期は弥生時代後期でも前半であろう。

B地区では当初遺跡の境界付近から西に向かって長さ70mのトレンチを設定した。その結果、当初の予想を裏切り、トレンチ全面に柱穴、溝、土坑などの遺構が分布したため、さらに20m西側に延長した。しかし、延長部分には遺構は分布しなかった。また、橋脚部分2か所に一部拡張トレンチを設定したところ、東拡張区で弥生後期の流路と溝、西拡張区で溝を検出した。

まとめ 桑原口遺跡では、従来丘陵裾部でしか検出されていなかった住居跡などが北近畿タンゴ鉄道より西側に広がっていたことが、今回の調査で判明した。また流路内から多量に出土した土器から、流路の上流側、すなわち南側の微高地上に遺構の存在する可能性が極めて高いことが予想されることも判明した。また、遺構が分布する範囲が西側に大きく広がるのがB地区の調査から判明した。第5次調査および今回の調査により、桑原口遺跡の範囲は再検討が必要となるだろう。

(福島孝行)

13. ^{さと}里遺跡第2次

所在地 亀岡市旭町美濃田
 調査期間 平成13年8月23日～10月9日
 調査面積 約500m²

はじめに 今回、実施した里遺跡の発掘調査は、京都府農林水産部が施工する府営圃場整備事業に伴う事前調査である。亀岡市教育委員会の試掘調査により、調査地一帯に奈良時代の掘立柱建物跡群が存在することが確認されたため、最も遺構が密集する部分を中心に面的な発掘調査を実施した。

調査の概要 調査地の遺構検出面は、標高約117mを測り、ほぼ平坦である。検出した遺構には土坑、溝などがあり、調査地のほぼ全面において円形ないし方形の柱穴を検出した。柱穴の分布には部分的な粗密がみられるが、調査地周辺には、同様な平坦面が広がっていることから、広い範囲に掘立柱建物を中心とした諸施設が存在する可能性が指摘できる。

検出した柱穴群から確実に復原できる掘立柱建物跡の棟数は、わずか5棟であるが、トレンチ西端では、後述する掘立柱建物跡4とほぼ同一の主軸を有する2間分の柱穴列を確認しており、掘立柱建物跡である可能性も高い。

以下、主要な検出遺構について概観しておきたい。

掘立柱建物跡1は、一辺1.1mの方形掘形をもつ柱穴によって構成される東西棟である。南北1間(2.3m)以上、東西3間(8.4m)以上の規模に復原でき、建物の主軸は、座標北から98°東に振っている。梁間の南東隅の柱穴が、掘立柱建物跡の復原線からわずかにずれるが、柱穴の規模や深度が酷似していることから、一連の掘立柱建物跡を構成する柱穴として認識できる。

掘立柱建物跡2は、直径0.6mの円形ないしは隅丸方形の掘形をもつ柱穴によって構成される南北棟である。桁行3間(7.6m)、梁間2間(5.2m)の規模であり、主軸は、座標北から9°西に振っている。柱間距離は、8尺(2.4m)である。なお、掘立柱建物跡2の東側には、桁行と同じ距離を有する柱列を1条検出しており、掘立柱建物跡2に付随する庇か柵である可能性がある。

掘立柱建物跡3は、一辺0.7mの方形の掘形をもつ柱穴によって構成される南北棟である。桁行4間(7.6m)、梁間2間(5.2m)の規模に復原でき、主軸は、座標北から9°西に振っている。柱間距離は、桁行が5尺(1.5m)、

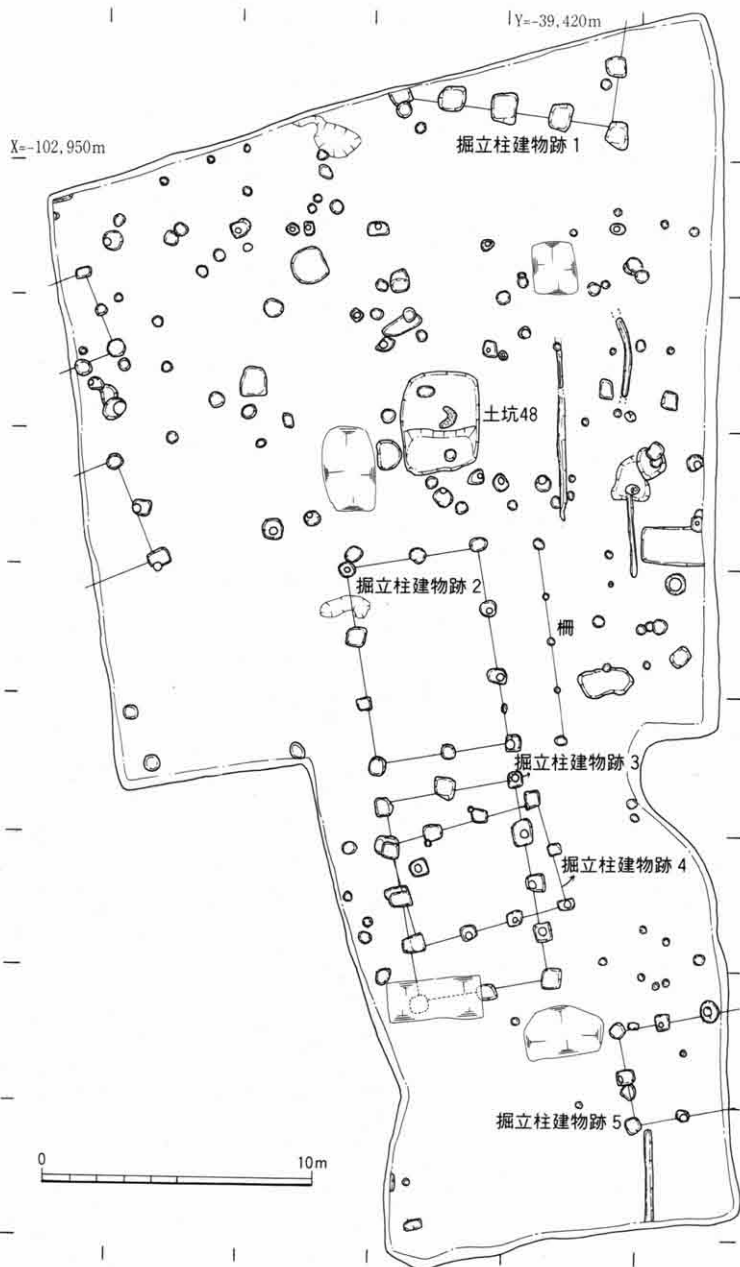


第1図 調査地位置図(1/25,000)

梁間が2.4~2.6mを測る。先に述べた掘立柱建物跡2と比較すれば、梁間および桁行は、ほぼ同一規模である。が、掘立柱建物跡2の桁行の柱間が、3間であるのに対して、掘立柱建物跡3の柱間は、4間である点が大きく異なっている。なお、両掘立柱建物跡は隣接しており、同時に併存したか否かについては、事例研究などを通して検討する必要がある。

掘立柱建物跡4は、一辺0.6mの方形の掘形をもつ柱穴によって構成される東西棟である。桁行3間(6m)、梁間2間(4.6m)の規模であり、建物の主軸は、座標北から73°東に振っている。柱間距離は、桁行が7尺(2.1m)、梁間が同じく7尺(2.1m)を測る。

掘立柱建物跡5は、一辺0.6mの方形の掘形をもつ柱穴によって構成される建物跡である。桁行2間以上(3.8m)、梁間2間(3.8m)の規模に復原でき、建物の主軸は、座標北から79°東に振っている。



土坑48は、南北約3.7m、東西約3mの方形プランを有し、ほぼ中央に「U」字形の竈をもつ。床面の北半と南半の高さは、北半が約0.2m高く、通常に見られる竪穴式住居跡とは様相が著しく異なっている。当該土坑の用途については、今後の検討課題である。

まとめ 今回の発掘調査では、奈良時代に比定できる掘立柱建物跡とそれに付随する土坑などを検出した。今後、里遺跡およびその周辺域での検出事例をまっけて、これらの掘立柱建物跡群の性格を考察しなければならない。

(小池 寛)

第2図 検出遺構平面図

14. さと 里遺跡第3次

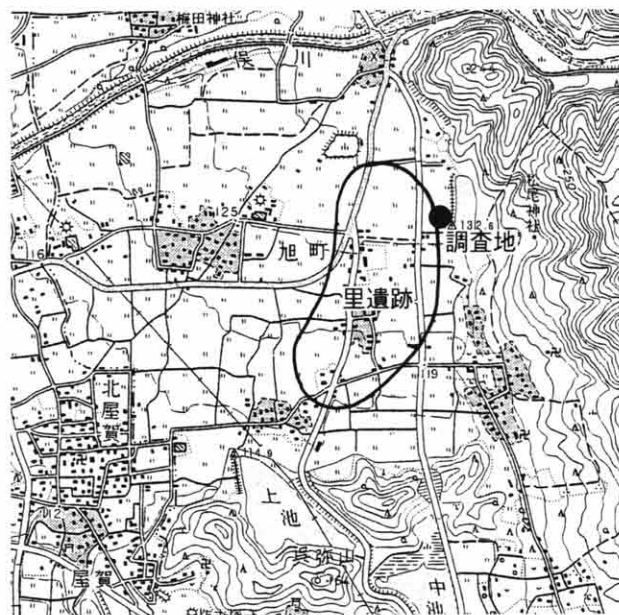
所在地 亀岡市旭町森本47-1ほか
 調査期間 平成13年11月21日～12月20日
 調査面積 約300m²

はじめに 今回の発掘調査は、府営ほ場整備事業に伴う事前調査であり、京都府南丹土地改良事務所の依頼を受けて実施した。里遺跡は、弥生時代から中世にかけての集落跡で、調査地は同遺跡の北東隅に位置し、集落の縁辺にあたと推測されていた。亀岡市教育委員会の試掘調査により竪穴式住居跡の一部が4基分見つかったため、この部分について拡張して調査を行った。

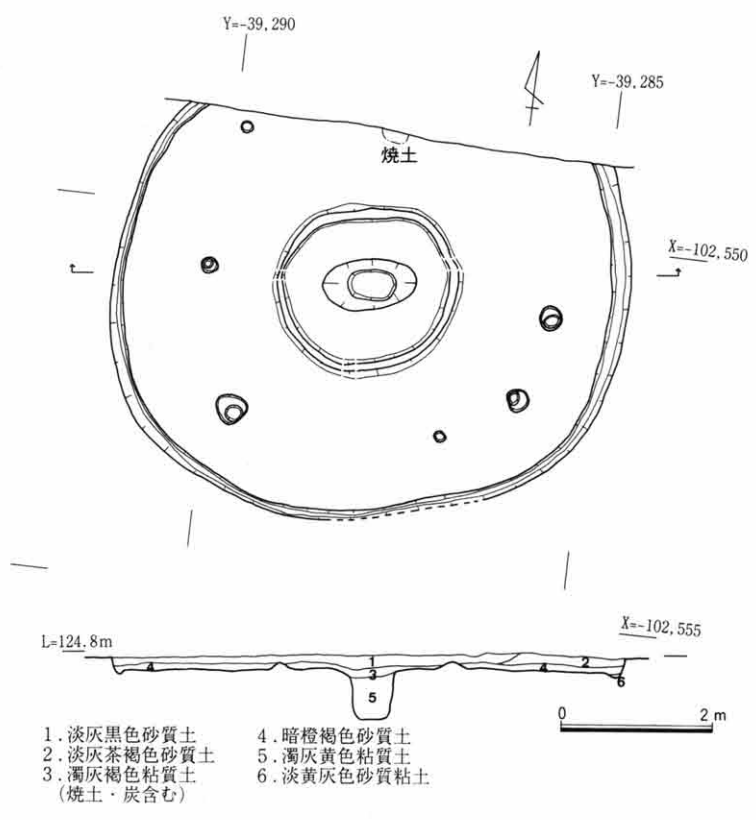
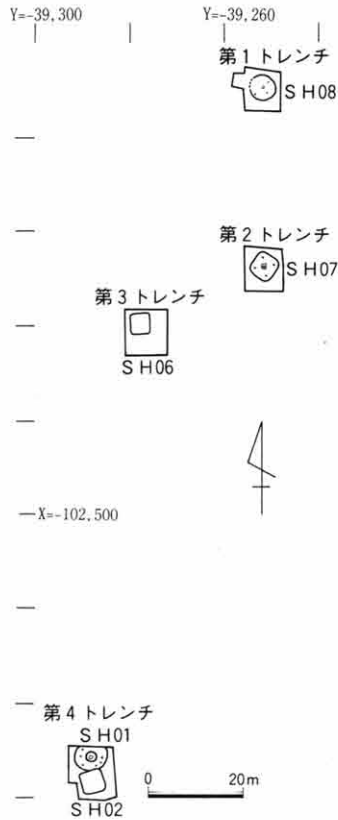
調査概要 調査は、4か所の調査区を設定して行い、新たに検出したものを加えて合計5基の竪穴式住居跡を確認した。第1トレンチでは円形の住居跡1基(SH08)、第2トレンチでは隅丸方形の住居跡1基(SH07)、第3トレンチでは方形の住居跡1基(SH06)、第4トレンチでは円形の住居跡1基(SH01)と方形の住居跡1基(SH02)を確認した。ここでは、残存状況が良好であった第4トレンチの遺構について報告する。

竪穴式住居SH01は直径約7mの平面形が円形の住居跡で、検出面からの深さは約0.2mである。住居跡の北端は調査地外に続く。支柱穴は6本であると考えられるが、本調査では5本分確認した。残りの1本は調査地外にある可能性も考えられる。住居の中央には径約0.5m、深さ約0.6mの楕円形の土坑があり、周囲には幅約20cm、高さ約5cmの周堤をもつ。埋土の最上層に焼土や炭が混じっていることから灰穴炉である可能性が考えられる。土坑の北側には焼土が分布する。また、土坑の南側では壺や甕、水差しなどの弥生土器がまとまって出土した。水差しは口縁部外面に5条の凹線を施すものであり、弥生中期のものと考えられる。

竪穴式住居跡SH02は一辺約5mの平面形が方形の住居跡である。検出面からの深さは約0.5mで非常に残りがよかった。壁面や床面には炭化した木材が残っており、その残存状況からこの住居は焼失住居であると考えられる。中央には炉があり、その西側には平坦面を上にした長軸約0.4m、短軸約0.3mの不整形な石が出土しており、作業台として使用されたものと思われる。この住居跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。



第1図 調査地位置図(1/25,000)



第2図 トレンチおよび遺構配置図

第3図 SH01平・断面図

出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、石器などがあり、遺物整理箱で4箱分出土した。

まとめ 今回の調査では、弥生時代中期および古墳時代前期の竪穴式住居跡を、あわせて5基確認した。1基を除いて残存状況は良好である。竪穴式住居跡SH01のように中央の土坑の周囲に堤を持つ住居については、綾部市小西町田遺跡や久御山町佐山遺跡などで類例が見られるが、京都府内では少なく南播磨地域に多くみられるようである。遺物整理において出土遺物に他地域から搬入されたものがないか検討を要する。

里遺跡では、これまでの調査において古墳時代後期や奈良時代の集落跡であることが分かっていたが、今回の調査により弥生時代まで遡ることが明らかになった。調査地は里遺跡の北東隅に位置しており、古い時期の集落は山手の方に存在していたと考えられるであろう。

(松尾史子)

ほづくるまづか 15. 保津車塚古墳第2次

所在地 亀岡市保津町案察使社ノ下
調査期間 平成13年9月3日～12月13日
調査面積 約860m²

はじめに この調査は、国営農地ほ場整備事業に伴う事前調査である。保津車塚古墳(案察使1号墳)は、亀岡市保津町案察使社ノ下に所在する。保津川(桂川)右岸の当地域には、保津山の丘陵上に全長60mの前方後円墳(E2号墳)を初めとする19基からなる保津山東古墳群と、保津車塚古墳を初めとする合計19基が知られている案察使古墳群がある。

検出遺構 調査によって検出した遺構は、墳丘の一部と後円部を巡る2重の周濠、濠と濠の間を巡る外堤、濠内に造営された陸橋部などである。

墳丘 濠側で黄褐色の粘土と礫を約1mの幅で、30cmほどの厚さにドーナツ状に積み上げ、堅く叩き締めている。その内側に灰色の砂礫を盛り土し、その上を黄色の粘土で覆っている。この作業をくり返し盛り土を構築したと考えられる。

外表施設 葺石は、後円部の周濠斜面と前方部西斜面、東側のくびれ部で拳大から人頭大の円礫・角礫を用いており、長側面を表に張り付けている。

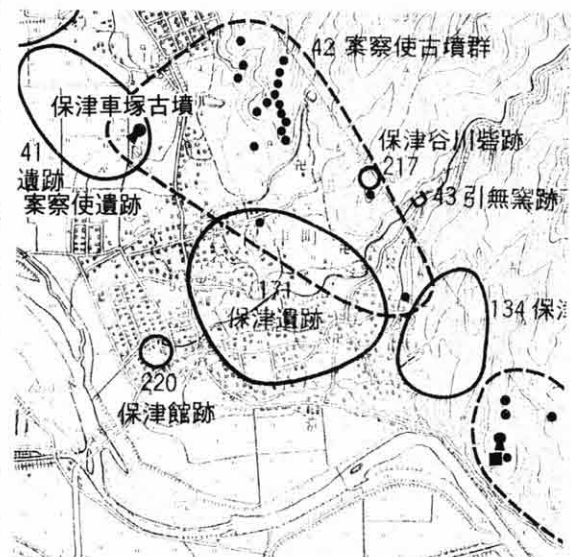
くびれ部およびテラス くびれ部では、幅約1.8m、後円部側で幅約1.5m、前方部側で幅約0.5mを測るテラスおよび墳丘2段目の葺石3段分を検出した。

内濠SD01 後円部では幅約5.5m、深さ約0.8mの規模を確認した。南東側では幅約6.5m以上、深さ約1.26mを確認した。前方部側では、南西の角で約4.2m、前方部の正面で約3.5mと最も狭くなり、深さも0.5mを測る。

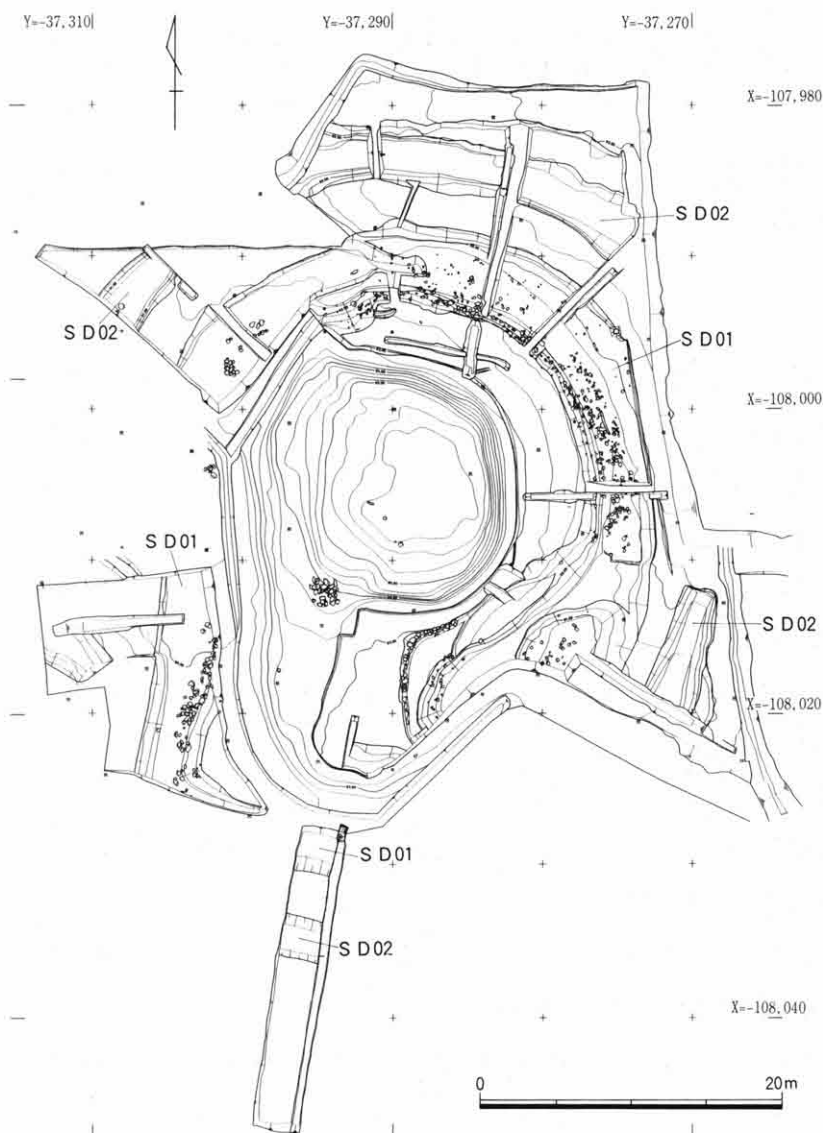
陸橋部 SD01を基底部の幅約4.0mで地山を掘り残して土手状に堤を築いたものである。前方部側の濠底は後円部側より約0.5m深くなっている。

外濠SD02 後円部側の北東よりで幅約3.5m、深さ約0.4mの規模を確認した。北西では幅約3.5m、深さ約1.2mの規模を確認した。前方部の正面では、内濠と同じく約2.5mと最も狭くなり、深さも0.4mを測る。

外堤 2条の濠の間の幅約2.5～3.0mの部分である。上面に黄褐色粘土層による盛り土で造成していることが認められる。



第1図 調査地位置図(1/25,000)



第2図 保津車塚古墳平面図

出土遺物 調査によって出土した遺物の大部分は内濠 S D01からのものである。外濠 S D02の底からは、少量であるが古墳時代の須恵器が出土している。S D01では、上層からは中世の瓦器椀、貿易陶磁器が出土しており、中層からは平安時代以前の土器が出土している。下層では平安時代の須恵器、古墳時代の須恵器、土師器とともに、木製品として食器の皿や建築部材などが出土している。最下層からは楕形木製品がまとめて出土した。

石見型の楕形木製品は、大木の表面のカーブを巧みに利用して楕の形状を表現している。表面は、第1段帯と第2段帯を残し他の部位を削り込んで立体的に表現し、側面は、角状突起部、中央帯、第3段帯を抉り込み、第1段帯と第2段帯に鱗状の突起を表現している。上記2例にくらべ幅や厚さの数値が低く、追柁の板材を使用しているものもある。

ほかに笠形木製品の笠部や柱部・木偶などがある。

まとめ 今回の調査では、保津車塚古墳の墳形や規模がはじめて明らかになった。調査の成果を簡単にまとめると、以下の4点になる。

①古墳の規模 全長約52.7m、墳丘長約36.0m、後円部の直径約26.8m、前方部復原幅約20m、前方部長約9.2mを測る。古墳の主軸は、N-10°20'-Eの傾きを持っている。

②2重の周濠 内濠は後円部側と前方部側とで水位を違え水濠となっていたと考えられる。外濠は、空濠であったと考えられる。

③墳丘施設 葺石を伴い、木製樹物によって飾られていたと考えられる。

④古墳の築造時期 出土した須恵器高杯や壺はT K23型式からT K47型式の特徴を示しており、5世紀の後半から終わり頃にかけてのものと考えられる。 (戸原和人)

16. ^{しもうえのみなみ}下植野南遺跡

所在地 乙訓郡大山崎町円明寺小字土辺、下植野小字五条本
調査期間 平成13年4月9日～12月21日
調査面積 土辺地区(1,700m²)・五条本地区(1,100m²)

はじめに この調査は、中央自動車道西宮線大山崎ジャンクション建設工事に伴い、日本道路公団関西支社の依頼を受け実施したもので、本年度で5年目を迎える。現在までの調査では、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代中期・後期以降の竪穴式住居跡や掘立柱建物跡が多数検出されている。今年度調査は、門田地区、土辺地区、五条本地区の3地区が対象となった。門田地区の調査については、今年度、調査略報を報告済みである。

調査概要 土辺地区で5か所、五条本地区で1か所のトレンチを設定した。

土辺地区 第1トレンチでは、中心部に3か所の埋葬施設と土器埋納土坑を持った不整形ではあるが一辺約10mの弥生時代中期の方形周溝墓1基を検出した。中心部に位置する主体部内からは石鏃2点が出土した。方形周溝墓の南西部では明確な遺構は存在しなかったが欠損した石剣が1点出土している。トレンチ南西端は流路となっており大量の湧水と礫の堆積が認められた。

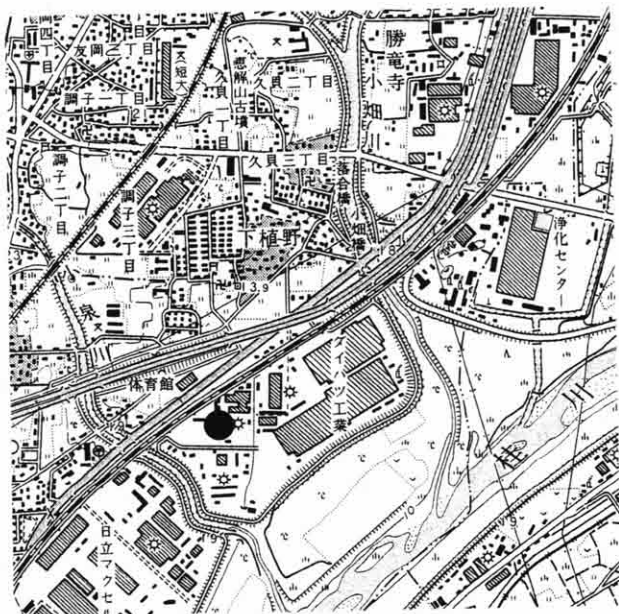
第2トレンチでは、幅約5m、深さ約0.2mの古墳の南側周濠の一部と考えられる溝が検出された。トレンチ北側に広がるもので、約10mの円墳が想定される。周濠内からは、6世紀前半に比定される須恵器杯蓋が出土している。

第3トレンチでは、遺構は検出されず、遺物包含層のみ確認した。

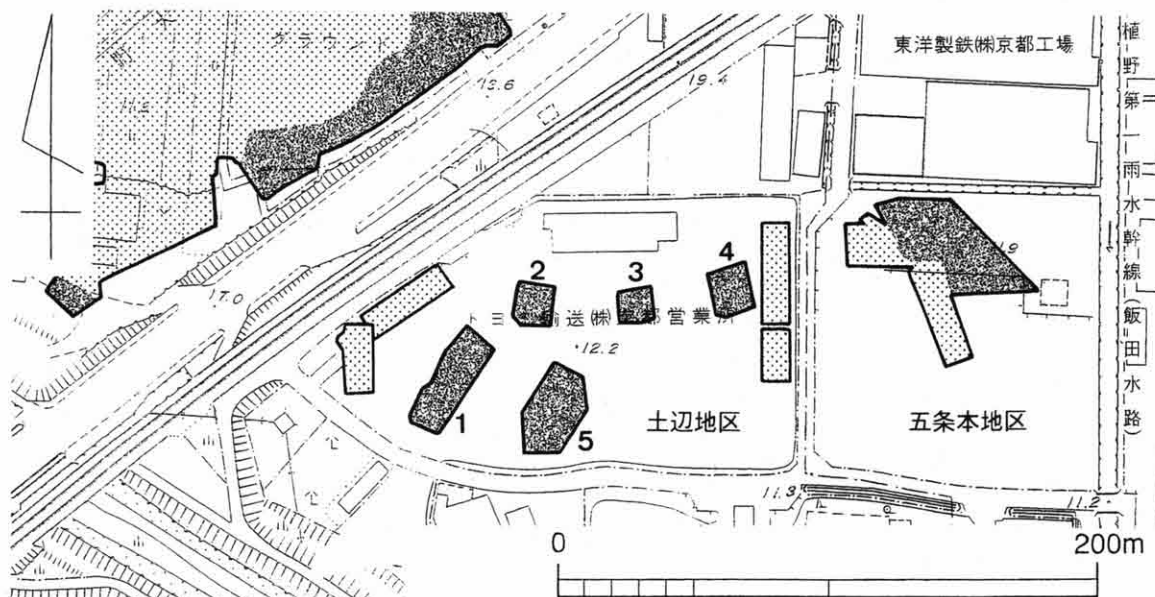
第4トレンチは、第2トレンチ同様、北側に広がる古墳の南側周濠の一部を検出した。周濠は幅約3m、深さ約0.3mを測り、直径約15mほどの円墳が想定される。内部から円筒埴輪片が多数出土した。この古墳については、平成14年度に調査予定である。

第5トレンチでは、整地層を確認した。この整地層中には整地に伴って混入したと考えられる弥生土器甕、布留式土器甕が出土した。五条本地区の整地層同様、古墳時代前期に集落の形成に伴い整地、土地利用が開始されたものと考えられる。

五条本地区 平成10年度調査で古墳時代前期の井戸や竪穴式住居跡の一部が確認されており、今年度はその東側にトレンチを



第1図 調査地位位置図(1/25,000)



第2図 トレンチ配置図

設定した。中世以降と考えられる遺構は、洪水を受けるたびに整地、耕作が繰り返行われていた土地利用の様子が窺えた。これらの耕作面には畝跡や人・牛・馬などの足跡と考えられる痕跡も確認できた。

古墳時代の遺構は、竪穴式住居跡3基、井戸跡1基、土坑4基、溝4条などがある。竪穴式住居跡SH05は一辺4.8×5m、検出面から床面までの深さ約0.15m、SH06・09は遺存状態が悪く周壁溝しか残存しないが、SH06で3.3×3.9m、SH09で一辺約4mの規模を測り、床面の標高は約7.8mを測る。いずれも出土遺物から古墳時代前期に相当するものである。これらの竪穴式住居跡は、調査地北側で検出された幅2.3m～3.1m、深さ約0.3～0.5mの人為的に掘削された東西に延びる溝SD01が土石流など大量の土砂で一気に埋まった後、それを整地した上に造られている。SD01は出土遺物がないため時期は不明である。

SH05南側には井戸SE11がある。崩落の危険があるため完掘できなかったが、井戸枠として使用されていた板材の一部が出土した。整地層上から掘り込まれていることや、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。トレンチ東端には南北方向に延びる幅約2m、深さ約0.4mの溝SD03がある。遺構の検出状況からみて、この溝を境に居住域と生産域ないし湿地とが分けられていた可能性がある。また、この溝の東側には整地に伴う礫の堆積がほとんど認められないことから、整地は居住域を中心に行なわれたものと考えられる。

まとめ 土辺地区では門田地区に続くと考えられる弥生時代中期の方形周溝墓が検出されたことにより、弥生時代の墓域がさらに広がることが明らかとなった。古墳時代中期・後期の周溝を伴う古墳2基を検出し、古墳時代においてもこの地が墓域として利用されていたことが明らかになるとともに、大山崎町内でも数少ない埴輪を持つ古墳となった。

五条本地区では標高8m以下の低湿地において、古墳時代前期の竪穴式住居跡が検出され、山城盆地では最も標高の低い集落遺跡の一つであることが明らかとなった。下植野南遺跡の集落の範囲を考える上で重要な成果を得ることができた。(増田孝彦)

17. 木津川河床遺跡第14次

所在地 八幡市八幡源野
 調査期間 平成12年6月8日～10月18日
 調査面積 約1,200m²

はじめに 木津川河床遺跡は、八幡市から京都市域にまたがる弥生時代から中世にかけての集落跡で、調査対象地は宇治川・桂川・木津川の3河川が合流する地点の東側に位置する。

同遺跡では、洛南浄化センターの建設に伴い、昭和58年から発掘調査が行われており、今回の調査は第14次調査となる。これまでの調査では、弥生時代後期および古墳時代後期の竪穴式住居跡や古代の土壙墓群、中世の掘立柱建物跡などのほか伏見大地震の痕跡が確認されている。

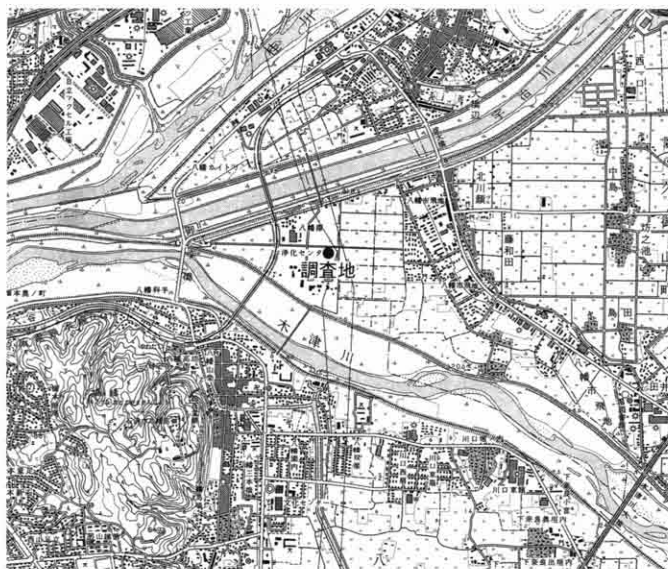
今回の調査は洛南浄化センター浄化水槽建設に伴う試掘調査であり、遺構・遺物の分布状況を把握し、本調査の要否ならびに規模などを判断するための資料を得ることを目的とした。

調査の概要 今回の調査は、調査対象地に3か所の調査区を設定して実施した。調査地における基本層序は、地表下約1.5mまでは浄化センター建設に伴う造成土で、造成土の下には旧耕作土があり、地表下約3mで中世の包含層黒灰色粘土に達した。黒灰色粘土の下には順に暗灰色粘質極細砂、暗灰色～青灰色細砂が堆積し、その下には木津川流域特有のまさ土である黄白色砂が厚く堆積している。黒灰色粘土から下の層は地震のため南北方向に隆起しており、断面を見ると波打った状態になっている。これは下層の黄白色砂が液状化したため起こったもので、噴砂も調査地のいたるところで見られる。このように地面が隆起するような地震はM(マグニチュード)7か8の大地震であり、これに該当するのは1596年に起こった伏見大地震^(注)と考えられる。

黒灰色粘土の上には地震後の整地層と考えられる緑灰色砂質土が厚く堆積している。

いずれの調査区においても遺構面は2面あり、遺構は黒灰色粘土上面(上層)と暗灰色粘質極細砂上面(下層)で検出した。

上層では素掘り溝群を、下層では素掘り溝群と土坑3基を検出した。いずれの素掘り溝群も東西方向および南北方向の素掘り溝が一定の間隔で並ぶ。下層の素掘り溝群からは12・13世紀を中心とする遺物が出土した。上層の遺構埋土は灰色砂質土、下層の遺構埋土は暗褐色粘土である。第1トレンチで



第1図 調査地位置図(1/50,000)

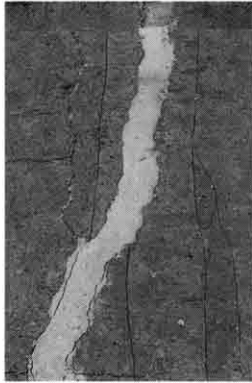


写真1 噴砂に裂かれた溝

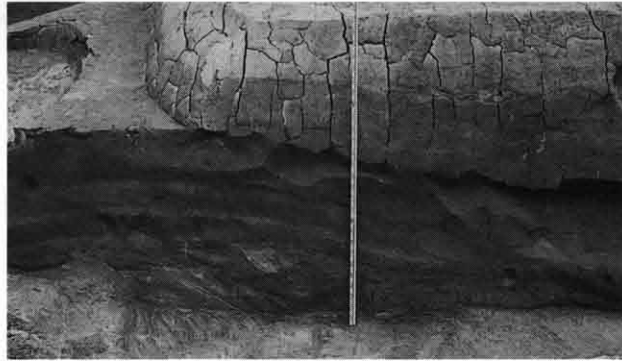


写真2 隆起した部分

確認した土坑は、切り合い関係により、下層の素掘り溝群より古いことが確実であるが、出土遺物が無く時期は不明である。埋土の状況からすぐに埋め戻されたようであり、土壙墓

の可能性がある。また、前述のように、いずれのトレンチでも、遺構面は、地震により部分的に隆起して波打っているような状況であった。この隆起した部分の標高は約8.2mで、低いところとの比高差は約0.5mである。噴砂はおおよそ南北方向に走るものがほとんどで、溝のなかには噴砂によって縦方向に引き裂かれているものがあつた。

出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器、信楽焼、近世陶磁器、砥石などがあり、遺物整理箱で3箱分出土した。遺構に伴う遺物は少なく、ほとんどが包含層から出土した。上層遺構のベース面となる黒灰色粘土層からは15世紀の信楽焼摺り鉢や龍泉窯系の青磁碗を含む古代から中世の遺物が出土している。上層遺構の時期は伏見大地震が下限となり、15世紀から16世紀と考えられる。下層遺構の時期は、素掘り溝出土遺物から、12・13世紀を中心とすると考えられる。

まとめ 今回の調査では、中世素掘り溝群を確認し、調査地一帯が耕作地として利用されていたことが明らかになった。素掘り溝群は、座標の南北または東西方向をとっており、久世郡条里との関連で捉えられることができよう。なお、古墳時代以前の遺構は検出されず、これまでの調査で確認されていた弥生時代および古墳時代の集落は、この一帯までは及んでいなかったと考えられる。

また、噴砂や地面の隆起などの地震痕跡については伏見大地震の規模の大きさを感じさせるものであり、震源地近くでの地震の影響を知る上での良好な資料といえよう。

(松尾史子)

注 地震痕跡については独立行政法人活断層研究センター主任研究員寒川旭氏にご指導いただいた。

18. ^{みやまぎ}三山木遺跡第4次

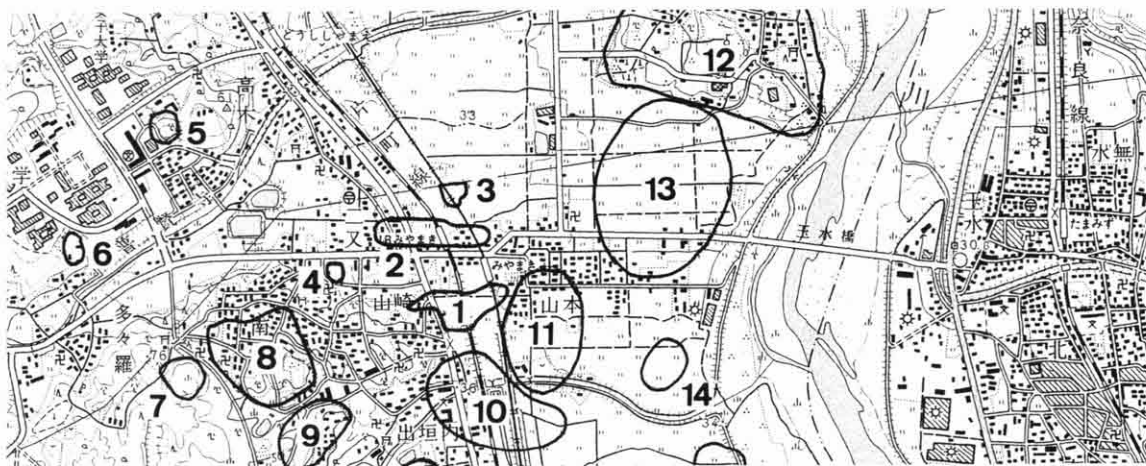
所在地 京田辺市三山木
 調査期間 平成13年5月21日～10月26日
 調査面積 約1,300m²

はじめに 今回の調査は、三山木地区特定土地区画整理事業に伴うもので、京田辺市の依頼を受けて実施した。これまでの調査では、弥生時代前期以降の多くの遺構が検出されている。また、縄文時代晩期の土器なども出土している。調査地付近には、平城京と山陽・山陰を結ぶ官道が敷設され、「山本駅」が三山木山本の地に設置されたと想定されている。

調査概要 今回は、3か所のトレンチを設定して調査を行った。1トレンチは、JR学研都市線の東側に設定した。このトレンチでは、弥生時代の溝や近世の池などの遺構を検出した。2トレンチは工事用道路を挟んで1トレンチの東側に位置する。このトレンチでは、上下2層の遺構面を確認した。上層では、飛鳥時代から平安時代頃にかけての溝、土坑、柱穴などを検出した。下層では、弥生時代の溝、川跡などを検出した。3トレンチは2トレンチの北側に位置する。このトレンチでは、中世の柱穴、溝などを検出した。柱穴は、建物としてはまとまらない。また、トレンチ南側から古墳時代前期の川跡を検出した。

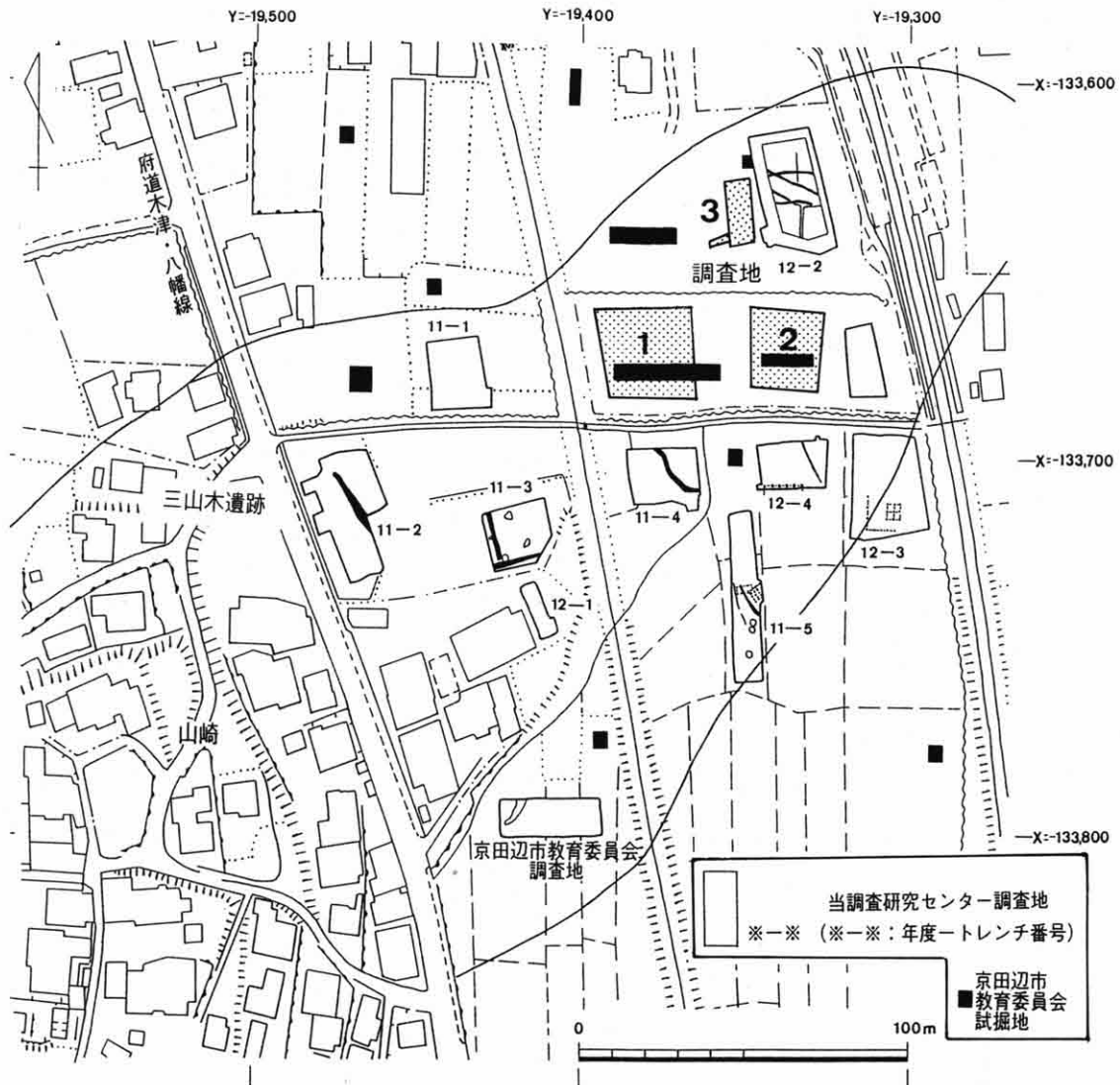
まとめ 今回の調査では、弥生時代前期から近世にかけての遺構を検出した。遺物としては、縄文時代晩期の土器片なども出土している。

これまでの調査でも、この遺跡からは弥生時代前期の土器などが出土しており、南山城地域でも最も早く成立した弥生集落遺跡のひとつであることが想定されていた。今回も2トレンチ下層で弥生時代前期の土器が出土した溝を確認している。ただ、今回確認した弥生時代の遺構は、全



第1図 調査地および周辺主要遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | | | |
|-----------|----------|----------|-----------|----------|----------|
| 1. 三山木遺跡 | 2. 二又遺跡 | 3. 東角田遺跡 | 4. 上谷浦遺跡 | 5. 天神山遺跡 | 6. 新宗谷遺跡 |
| 7. 口駒ヶ谷遺跡 | 8. 南山遺跡 | 9. 西羅遺跡 | 10. 宮ノ下遺跡 | 11. 直田遺跡 | 12. 飯岡遺跡 |
| 13. 古屋敷遺跡 | 14. 遠藤遺跡 | | | | |



第2図 トレンチ位置図

で溝もしくは川跡とみられるものである。古墳時代前期の川跡も確認しており、弥生時代から古墳時代前期頃にかけては、湿地状の居住には適さない場所であったものとも考えられる。なお、古墳時代前期の川跡から出土した布留式併行期の土師器は、田辺地域においては類例が少なく、まとまった資料として注目される。

奈良時代の当地域は、官道および山本駅の設置が想定されている。今回の調査では、直接それらに関係する遺構は検出できなかった。ただ、2トレンチ上層で検出した斜行する溝は、官道の方に規制された地割りに係わるものとも考えられる。

寛政9(1797)年の年紀をもつ絵図によると、1トレンチで検出した池に当たると考えられる池が描かれており、「クスハラ池」という池の名称が記されている。この絵図によると、現在も残っている大きい用水池のほかに、今回見つかったような小さい池が30か所描かれている。このような小さな池は、現在全く残っていない。今回検出した池は、17世紀末頃おそくとも18世紀前半頃には存在し、幕末もしくは明治のごく初期頃に埋められたものと考えられる。(引原茂治)

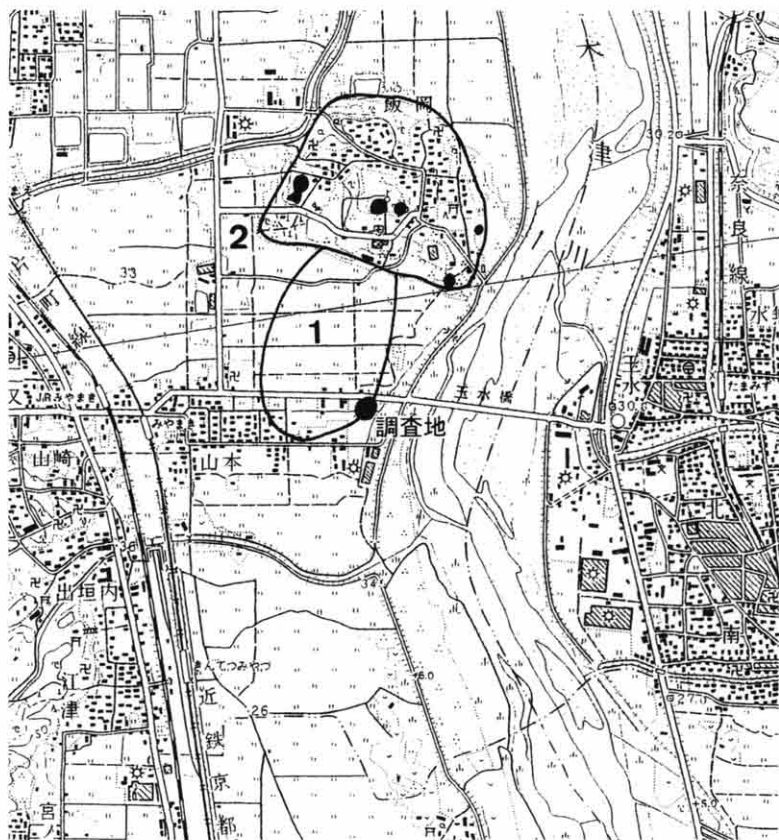
19. 古^{ふる}屋^{やしき}敷遺跡

所在地 京田辺市三山木垣内
 調査期間 平成13年9月17日～12月4日
 調査面積 約500m²

はじめに 今回の調査は、府道生駒井出線道路整備促進工事に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。古屋敷遺跡は、南北500m、東西200mの範囲に広がる中世の集落跡として知られている。昭和53年に同志社大学校地学術調査委員会、田辺町(現京田辺市)教育委員会によって発掘調査が行われ、中世における田畑の耕作に関連する畦畔や溝、それらに伴う遺物が報告されている。当初は遺跡周辺における条里地名や水田畦畔の存在から、条里遺構や古い水田遺構の検出に主眼が置かれた。今回の調査地は古屋敷遺跡の東端であるが、古代交通の要所に設けられる駅家(山本駅)推定地の東側に当たる。木津川を渡って東山・北陸道に通じる地点としても重要な位置にあることから、関連遺構の検出に努めた。

調査概要 調査は重機により盛り土を除去し、さらに京都府教育委員会の昨年度試掘調査における中世遺物検出面(地表下120cm)を精査し、当該期の数条の素掘り溝、井戸1基、土坑、集石遺構1基、沼地状落ち込みなどを検出した。出土遺物の年代から、平安時代後期(12世紀後半)から安土桃山時代前期(17世紀初頭)にかけてのものである。

最も古い遺構は、溝と井戸で、12世紀後半のものである。溝については、最も残存状況の良い溝(SD05)で見ると、長さ約13m分、幅約50～150cm、深さ30cmを測り、中から多量の土器が出土した。また井戸(SE01)は本溝の北西側に約3mを隔てて設けられている。直径1.4m、深さ1.6mの規模である。底の集水施設は1段の曲物(直径約



調査地位置図(1/25,000)

1. 古屋敷遺跡 2. 飯岡遺跡

45cm)が据えられて、中から瓦器皿と瓦が1点ずつ出土した。この井戸が検出されたことで、溝(SD05)は集落内における宅地内の外縁部を画したものである可能性がある。

集石遺構は、拳大の礫が多量に盛られたものである。範囲はほぼ直径2.3mである。周辺の耕作地で集められ、ここにまとめて廃棄されたものと考えている。古代の瓦や五輪塔の部材も伴っており、周辺に古代から中世にかけての建物や墓が存在していた可能性を示唆する。遺構内における中世土器の出土から、時期は14世紀である。

沼地状落ち込みは東側の南北両側で検出した。暗青灰色粘質土が詰まっており、流れがなくゆっくりと土砂が堆積していったようである。形成時期は安土桃山時代(17世紀初頭)である。

調査地東端では、河川堆積に伴う灰色細砂の詰まった落ち込みが検出された。東側の木津川の氾濫による堆積であろう。時期は17世紀に形成されたものである。

まとめ 今回の調査では、古屋敷遺跡の東端にあたり、木津川による氾濫の影響で遺構の存在があまり期待できない地点とみられたが、溝、井戸、集石遺構などの遺構を検出することができた。住居跡は検出していないが、溝と井戸の検出から、調査区西半は、集落および宅地の外縁部に当たっていると言える。

他の溝や土坑は田畑の耕作に関するものといえる。また集石遺構についても、農地の耕作時に邪魔になる石や土器などを集めたものであろう。また五輪塔の部材が含まれていることから、周辺に中世墓地が存在していたものといえよう。東側の耕作地に関連する溝や土坑は残存状況が悪い。度重なる木津川の氾濫などで浸食され、わずかながら当時の姿をとどめているにすぎない。以上、平安時代後期から室町時代にかけての遺構・遺物を検出したことが今回の成果である。

(黒坪一樹)



調査地全景(西から)

91. ^{たけのがわ}竹野川河口域の遺跡群

竹野川は丹後半島最大の河川であり、その流域には多数の遺跡が存在する。中でも、竹野川河口域には京都府北部を代表する遺跡が集中する。竹野川河口域には古代潟湖が形成されていたとみられ、こうした状況は潟湖を天然の港として利用した人々の生活の営みを示しており、かつての丹後地域の歴史を知る上で欠かせない資料といえる。ここでは、代表的な遺跡を概観し、見学の際の参考にしていただきたい。

1. ^{たかの}竹野遺跡 河口域東岸の砂丘上に営まれた集落遺跡である。過去11次におよぶ調査が実施され、弥生時代前期から中世の各時期の遺構・遺物が確認された。中でも、注目されるのは弥生時代前期後半の資料であり、丹後半島に農耕をもたらした人々の居住地と見ることができる。

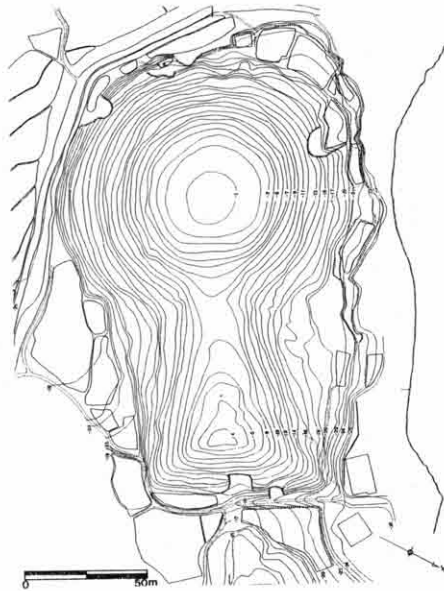
2. ^{しんめいやま}神明山古墳 河口域東岸の丘陵先端部に築造された大型前方後円墳である。かつての潟湖に対し、側面を向け築造されている。その規模は全長約190m、後円部径129m、同高さ26m、前方部幅78m、同高さ15mを測り3段の段築を有し、葺石・埴輪を完備する。かつて墳頂部に板石が散乱していたことを考えると内部主体には竪穴式石室が採用されている可能性が高い。また、出土遺物として合子などの滑石製模造品が東京大学に伝神明山古墳として保管されている。その他、準構造船の線刻をもつ丹後型円筒埴輪や前方部採集品の土師器群などが丹後町古代の里資料館に保管・展示されている。出土遺物からみて古墳時代前期末頃の築造と考えられる。

3. ^{うぶすなやま}産土山古墳 神明山古墳から河口へ約500mに位置する丘陵頂部に立地する大型円墳である。その規模は直径58m、高さ5.6mを測り、3段の段築をもち、葺石・埴輪を有する。墳頂部の三柱神社再建時に石棺が露出し、昭和14年に発掘調査が実施された。内部主体は緑色凝灰岩製の長持形石棺を直葬しており、石棺内からは東頭位の人骨1体のほか、副葬品として、鏡・竪櫛・玉類・武器類



第1図 遺跡等分布図(1/25,000)

- 1.竹野遺跡 2.神明山古墳 3.産土山古墳 4.樹塚古墳
5.大成古墳群 6.片山古墳群 7.丹後町古代の里資料館



第2図 神明山古墳測量図
(『同志社考古』10号)

が検出され、棺外には短甲・武器類・農耕具類が配されていた。この石棺は調査後に埋め戻されたが、平成8年、丹後町教育委員会により実施された範囲確認調査の際に再び検出され人々の目に触れることとなった。現在は再び埋め戻され石棺そのものを見学することはできない。出土遺物からみて、古墳時代中期中葉、5世紀中葉に築造されたものと考えられる。

4. ^{ますづか}柵塚古墳 産土山古墳から国道沿いに経ヶ岬方面に約1km、日本海に突き出た丘陵上に位置する中形方墳である。規模は1辺約25m、高さ5mを測る。後世の削平により、墳丘が改変されているが、段築・埴輪を有する。丹後町教育委員会により範囲確認調査が実施され、埴輪が出土した。埴輪の年代観から古墳時代中期前半、

5世紀前半に築造された古墳と考えられている。

5. ^{おおなる}大成古墳群 産土山古墳の北側、日本海に突出し、眼下に名勝立岩を望む丘陵に分布する15基の古墳からなる後期古墳群である。昭和42年に京都府教育委員会により7・8・9号墳の3基の古墳の調査が実施され、それぞれ横穴式石室が確認された。7号(片袖)→8号(両袖)→9号(無袖)の順に6世紀後半から7世紀前半に相次いで築造されたものとみられている。出土遺物には須恵器・土師器・武器類・玉類などがある。この3基の古墳は現状で保存され、いつでも石室の見学が可能である。

6. ^{かたやま}片山古墳群 産土山古墳の南側に分布する後期古墳群である。工場の建設により、本来何基分布していたのか定かではなくなっているものの、現在、1号墳(通称^{こうもり}蝙蝠の穴古墳)の横穴式石室のみが見学可能である。墳丘は削平され、巨大な天井石が露出している。石室は片袖式であり、玄室長6.2m、幅2m、高さ2.7m以上を測る大形横穴式石室である。石室内には奥壁の隙間から入ることができるが、見学の際には懐中電灯を携行することをお勧めする。

7. 丹後町古代の里資料館 上記の遺跡の出土遺物をはじめ、丹後町内で確認された遺跡や遺物の展示が行われている。入館料は500円(平成13年現在)。

以上、竹野川河口域に分布する主要な遺跡について概観してきたが、潟湖あるいは日本海を望む丘陵上に多くの古墳が築造されている点は興味深い。今回は触れることができなかったが周辺には願興寺古墳群や、竹野神社などがあり見るべきところは多い。また、近くに間人という地名があり、聖徳太子の生母である間人皇后に由来する地名と考えられているように、畿内政権との親族伝承をもつ地域であることも見逃せない。このように、潟湖周辺の遺跡群は天然の港を中心に、畿内と太いつながりをもちつつ発展した丹後地域における人々の足跡を示す物として理解されよう。

(石崎善久)

長岡京跡調査だより・80

前回『たより』以降の長岡京連絡協議会は、平成13年11月28日・12月19日、平成14年1月23日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は宮内2件、左京域2件、右京域12件であった。京域外の5件を併せると、合計21件となる。

調査地一覧表(2002年1月末現在)

番号	調査回数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第409次	7ANEYT-8	向日市鶏冠井町山畑19-3、他	(財)向日市埋文	9/20～11/30
2	宮内第410次	7ANEKI-4	向日市鶏冠井町北井戸30	(財)向日市埋文	1/8～1/31
3	物集女車塚周辺遺跡第8次	7AMAMO	向日市物集女町豆尾35-1	(財)向日市埋文	11/13～1/18
4	左京第467次	7ANFKW-7	向日市上植野町桑原11-1	(財)向日市埋文	10/29～11/9
5	左京第468次	7ANDSD-2	向日市森本町下町田23	(財)向日市埋文	1/8～2/28
6	右京第705次	7ANMDB-4	長岡京市神足二丁目地内	(財)長岡京市埋文	12/10～1/25
7	右京第717次	7ANKST-9	長岡京市開田二丁目207他	(財)長岡京市埋文	9/13～10/24
8	右京第719次	7ANMSC-3	長岡京市神足三丁目827-1他	(財)長岡京市埋文	10/1～11/2
9	右京第720次	7ANKHT-7	長岡京市開田四丁目706、704	(財)長岡京市埋文	10/9～11/9
10	右京第721次	7ANKST-10	長岡京市開田二丁目208-2他	(財)長岡京市埋文	10/3～11/22
11	右京第722次	7ANOKT-1	長岡京市下海印寺岸/下1-11	(財)長岡京市埋文	10/15～11/8
12	右京第723次	7ANIFC-7	長岡京市今里更ノ町19他 長岡京市井ノ内下印田9-1	(財)長岡京市埋文	11/1～2002.1/25
13	右京第724次	7ANMDB-5	長岡京市神足二丁目地内	(財)長岡京市埋文	11/12～12/11
14	右京第725次	7ANMDB-6	長岡京市神足二丁目地内	(財)長岡京市埋文	11/19～12/13
15	右京第726次	7ANUMD	京都市西京区大原野石見	(財)京都市埋文	11/19～2/
16	右京第727次	7ANUDC	京都市西京区大原野石見	(財)京都市埋文	11/19～2/
17	右京第728次	7ANIFC-8	長岡京市今里更ノ町18	(財)長岡京市埋文	12/26～1/15
18	山城国府跡第64次遺跡確認調査	7XYS'ZH-2	大山崎町字大山崎小字銭原	大山崎町教委	11/15～11/22
19	山城国府跡第65次遺跡確認調査	7XYS'TH-6	大山崎町字大山崎小字高橋13-8	大山崎町教委	12/17～1/31
20	山崎津第15次	7YYMS'YS	大山崎町字大山崎小字柳島	大山崎町教委	1/22～3/31
21	下植野南遺跡		大山崎町下植野門田地区 土辺、五条本地区	(財)京都府埋文	4/9～2002.3/

長岡京跡発掘調査抄報

宮内第409次 朝堂院西第四堂、南門、南面回廊の調査においては、西第四堂の桁行が10間であることがほぼ確定した。ただ、10間の場合、階段の取り付け部が不明であるなど細かな問題が残される。また、南門、南面回廊の正確な位置が「半世紀ぶりに」判明したことで、朝堂院の規模、構造などが、おおよそ確定した。なお、当調査地は今年度中に公有化される見込みで、西第四堂全体を含めて朝堂院南西部の一画が保存されることになった。

物集女車塚周辺遺跡第8次 調査地は物集女車塚古墳の北側に隣接する水田である。検出された遺構(長岡京期)はトレンチ東側から掘立柱建物跡、柵列、溝などがあり、それぞれほぼ真北に軸を揃えている。掘立柱建物跡は身舎で梁間2間、桁行2間以上、南、北側に庇を持つ東西棟建物である。柱間寸法は梁間10尺等間である。柱穴は一辺1m、柱痕が30cmであることからかなり大きな建物である。柵列は南北3列(3m等間隔)並行しており、中央列の柱穴は外側の両柱列に比べると際立って大きい。この遺構は両側の柱列を「側柱」とすれば回廊(複廊)に復原されるが、両側の柱列が「添え柱」とすれば中央の柱列が柵列とも考えられ、現在、この二つの復原案のどちらにするかは決定されていない。溝は中央の柵列の西側6mで幅1.5mを測る南北方向の溝である。この遺構は柵列、掘立柱建物跡と並存していたかは判然としないが、調査担当者は、建物に先行して設けられた方格性を意図した土地区画施設と解しておきたいとしている。

今回の調査地は北京極大路から北に5町分に位置し、長岡京の「北限」や「北苑」に関する問題が提起され始めている昨今、今回の成果は長岡京跡調査に一石を投じたものとして、極めて意義深い調査成果であると思われる。

右京719次調査 西二坊坊間東小路両側溝(溝心々間9m)が、初めて確認された。七条条間小路南側溝は左京域では検出例があるが、右京域では初見である。

右京721次調査 東西棟の掘立柱建物跡3棟は、いずれも柱間寸法が7尺、柱穴の規模が一辺30cmの小規模(雑舎)建物であるが、右京六条二坊三町の宅地利用の一端が分かる成果であった。

当調査地周辺は近年、長岡京西市の存在が言及されはじめていたが、このほど須恵器杯の内面底部に「市」と墨書された墨書土器が発見された。(京都新聞2002年1月23日 朝刊)

右京723・728次調査 二条大路南側溝はたびたびの洪水により3回の掘り返しが確認された。区画溝は町内1/3の宅地割を示している。西二坊坊間西小路西側溝はわずかにその痕跡を残していた。遺物は土師器、須恵器、製塩土器、合子などの土器類が多数あり、墨書土器(「中」、「弟」など)もみられる。その他、瓦、曲物、銅製品などが出土した。

当調査地が宅地利用に不向きな土地にもかかわらず、多くの資料が得られたこと、また、周辺の調査成果を加えると遺跡の性格については「官司」の存在が推定されるとの報告がなされた。

右京726・727次調査 調査地は京都市西京区大原野石見で、長岡京跡の北西部にあたる。試掘調査の対象は路線長1kmに及ぶ道路建設予定地内で、多くの長岡京期の遺構が確認され、旧石器も採集された。来年度の本格的な調査が期待される。

(竹井治雄)

センターの動向(01.11～02.01)

1. できごと
11. 2 高橋誠一理事、棕ノ木遺跡(精華町)現地視察
棕ノ木遺跡現地説明会
- 5 上田正昭理事、保津車塚古墳(亀岡市)現地視察
荒坂遺跡(八幡市)試掘調査開始
- 8 太田遺跡(亀岡市)発掘調査開始
- 9 中谷雅治常務理事・事務局長、保津車塚古墳現地視察
桑原口遺跡(宮津市)現地調査終了(6. 5～)
- 12 増田富士雄理事、下植野南遺跡(大山崎町)現地視察
- 13 都出比呂志理事、保津車塚古墳現地視察
- 13～15 一般職員研修Ⅱ(於：職員研修所)藤井整、福島孝行、松尾史子各調査員出席
- 15 荒坂遺跡、試掘調査終了(11. 5～)
- 15～16 全国埋蔵文化財法人連絡協議会コンピューター等研究委員会(於：札幌市)森島康雄調査員出席
- 16 人権研修会(於：京都市)福嶋利範事務局次長出席
職員研修(於：当センター)講師：筒井崇史調査員「木津城山遺跡の発掘調査とその成果」
- 21 教育庁職員行政・人権問題研修(第1回)(於：京都府庁)久保哲正調査第1課主幹、松井忠春・石井清司・田代弘主任調査員、石尾政信専門調査員、今村正寿・鍋田幸世主事、野島永・高野陽子・河野一隆・福島孝行・筒井崇史調査員出席
- 22 里遺跡第3次(亀岡市)発掘調査開始
- 26 案察使遺跡(亀岡市)発掘調査開始
古屋敷遺跡(京田辺市)関係者説明会
- 27 教育庁役付職員人権問題研修Ⅱ(於：ルビノ京都堀川)小山雅人調査第1課長、安田正人総務課主幹、辻本和美調査第3係長、伊野近富調査第2係長、杉江昌乃主任、戸原和人・増田孝彦・岩松保主任調査員出席
杉原和雄理事、保津車塚古墳現地視察
- 28 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 29 教育庁職員行政・人権問題研修(第2回)(於：京都府庁)平良泰久調査第2課長、引原茂治・田中彰主任調査員、竹井治雄専門調査員、黒坪一樹・伊賀高弘主査調査員、鈴木直人主事、中川和哉・森島康雄・中村周平・柴暁彦・石崎善久・藤井整・村田和弘調査員出席
下植野南遺跡、現地説明会
- 30～12. 7 全国埋蔵文化財法人連絡協議会海外研修「中国」高野陽子調査員参加

- | | | | |
|-------|--|-------|---|
| 12. 1 | 保津車塚古墳、現地説明会 | 19 | 長岡京連絡協議会(於：当センター) |
| 4 | 古屋敷遺跡(京田辺市)発掘調査終了(9. 18～) | 20 | 里遺跡第3次、発掘調査終了(11. 22～) |
| 5 | 増田富士雄理事、棕ノ木遺跡現地視察 | | 下植野南遺跡、発掘調査終了(4. 9～) |
| 7 | 中谷雅治常務理事・事務局長、池上遺跡現地視察 | 1. 9 | 薪遺跡(京田辺市)発掘調査開始 |
| 10 | 新堂池古墳群(園部町)試掘調査開始 | 16～25 | 埋蔵文化財発掘技術者専門研修「報告書作成課程」(於：独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所)柴暁彦調査員参加 |
| 13 | 保津車塚古墳、発掘調査終了(9. 4～) | 23 | 長岡京連絡協議会(於：当センター) |
| 17 | 第63回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)樋口隆康理事長、川上貢副理事長、中谷雅治常務理事・事務局長、上田正昭、藤井学、井上満郎、高橋誠一、増田富士雄、三品廣実、杉原和雄各理事、塩見司郎、竹延信三各監事出席 | 24 | 愛宕神社古墳(丹後町)関係者説明会 |
| | 芝山遺跡(城陽市)発掘調査開始 | 30 | 池上遺跡(八木町)関係者説明会 |

受贈図書一覧(01.11~02.01)

(財)北海道埋蔵文化財センター

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第154集 白滝遺跡群Ⅱ、同第156集 千歳市ウサマクイ遺跡

(財)いわき市教育文化事業団

年報11、同12、いわき市埋蔵文化財調査報告第77冊 横山B遺跡

(財)東総文化財センター

年報6、同7

(財)新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館

北新宿二丁目遺跡Ⅳ、落合遺跡Ⅲ、百人町三丁目西遺跡Ⅳ

(財)かながわ考古学財団

かながわ考古学財団調査報告117 山王堂東谷やぐら群、同119 和田山やぐら群遺跡Ⅱ、同120 覚栄寺やぐら群遺跡、同121 飯綱上遺跡、同122 向原遺跡Ⅲ、同123 半原向原遺跡・半原屈中原遺跡、同124 上行寺裏遺跡、同125 王禅寺通やぐら遺跡、同126 長岡西遺跡、年報8 平成12年度

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

瀬戸大窯とその時代

(財)大阪府文化財調査研究センター

大河内展、大阪文化財研究 第20号、大阪府埋蔵文化財研究会(第43回)資料、(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第65集 大和川今池遺跡、同第66集 吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点

(財)大阪市文化財協会

大阪市埋蔵文化財発掘調査1998年度、森小路遺跡発掘調査報告Ⅰ

(財)枚方市文化財研究調査会

枚方市文化財年報22

桜井市立埋蔵文化財センター

山の辺古道と古代大和政権

(財)広島県埋蔵文化財調査センター

年報17 平成12年度

(財)松江市教育文化振興事業団

埋蔵文化財課年報Ⅴ、松江市文化財調査報告書第90集 奥山古墳群発掘調査報告書

盛岡市教育委員会

盛岡城跡平成10・11・12年度本丸南西部発掘調査概報、盛岡市内遺跡群平成12年度発掘調査概報、館・松ノ木遺跡

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第191集 下飯田遺跡発掘調査報告書、同第247集 五本松窯跡ほか発掘調査報告書、同第251集 郡山遺跡、同第254集 平成12年度文化財年報22

さいたま市教育委員会

浦和市内遺跡発掘調査報告書第29集 山崎貝塚・皇山西遺跡・根岸遺跡・本村遺跡・付編

櫛形町教育委員会

櫛形町文化財調査報告No. 3 六科丘遺跡、櫛形町の文化財

氷見市教育委員会

氷見市埋蔵文化財調査報告第31冊 脇方谷内出中世墓、同第32冊 氷見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区)Ⅰ、同第33冊 柳田布尾山古墳、同第34冊 新保南遺跡

神岡町教育委員会

神岡町埋蔵文化財調査報告第6集・江馬氏城館跡調査報告書第6集 江馬氏城館跡Ⅴ

静岡市教育委員会

静岡市埋蔵文化財調査報告57 特別史跡登呂遺跡発掘調査概要報告書Ⅱ、ふちゅ〜るNo. 9

朝日町教育委員会

朝日町文化財調査報告書第1集 朝日町文化財調査報告書Ⅰ

四日市市教育委員会

四日市市文化財保護年報12

米原町教育委員会

米原町埋蔵文化財調査報告書ⅩⅥ 福島城跡・米原駅西遺跡、同ⅩⅩ 松尾寺遺跡発掘調査報告書、鎌刃城跡発掘調査概要報告書、米原町の文化財、登録有形文化財旧醒井郵便局舎修理工事報告書、川口家住宅(旧醒井宿問屋場)修理工事報告書

大阪狭山市教育委員会

大阪狭山市文化財報告書21 平成12年度狭山藩陣屋跡発掘調査報告書、同22 大阪狭山市内遺跡群発掘調査報告書

高槻市教育委員会

史跡・今城塚古墳

藤井寺市教育委員会

藤井寺市文化財報告第16集 西墓山古墳

東大阪市教育委員会

西ノ辻遺跡第42次発掘調査報告、豊浦谷古墳群第1次発掘調査報告

熊取町教育委員会

熊取町埋蔵文化財調査報告第36集 熊取町遺跡
群発掘調査概要報告書X V

能勢町教育委員会

能勢町文化財調査報告書第17冊 平成12年度能
勢町埋蔵文化財調査概要

佐用郡教育委員会

平成11年度埋蔵文化財調査年報

加東郡教育委員会

加東郡埋蔵文化財報告27 埋蔵文化財調査年報
2000年度(CD-ROM)

津名郡町村会

津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ

田原本町教育委員会

唐古・鍵遺跡の考古学 田原本町文化財調査報
告書第2集 矢部南遺跡発掘調査報告、田原本
町埋蔵文化財調査年報10

灘崎町教育委員会

灘崎町埋蔵文化財発掘調査報告1 左古谷遺跡

徳島市教育委員会

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要11

三木町教育委員会

天神山古墳群

行橋市教育委員会

豊の国からのメッセージ

大野城市教育委員会

大野城市の文化財第33集 大野城市の遺跡⑥、
大野城市文化財調査報告書第57集 瑞穂・原ノ
畑遺跡

佐賀県教育委員会

むかしむかしの弥生が丘、佐賀県文化財調査報
告書第137集 大久保遺跡Ⅱ、同第148集 柚比
遺跡群1

佐賀市教育委員会

佐賀市文化財調査報告書第119集 野中遺跡、
同第120集 石土井遺跡Ⅰ、同第121集 増田遺
跡群Ⅴ区、同第122集 佐賀市埋蔵文化財確認
調査報告書1997・1998年度、同第123集 上岸
川遺跡、同第124集 徳永遺跡群Ⅳ、同第125集
徳永遺跡群Ⅴ、同126集 上和泉遺跡群Ⅲ

三光村教育委員会

三光村文化財調査報告書第3集 三光村の遺跡

佐土原町教育委員会

佐土原町文化財調査報告書第19集 内城第1遺
跡、同第21集 佐土原町内遺跡Ⅳ

上高津貝塚ふるさと歴史の広場

土浦の旧石器、いさろ遺跡、下郷遺跡・下郷古
墳群遺跡

玉里村立史料館

近現代遺跡、発掘!

栃木県立博物館

研究紀要-人文-第18号、野州麻作りの民俗

国立歴史民俗博物館

研究年報9、研究報告 第91集

流山市立博物館

常設展示図録、年報No.23

出光美術館

館報第116号

平塚市博物館

自然と文化第24号、年報第24号、相武国の古墳

小田原市郷土文化館

研究報告No.37(人文科学No.19)、小箱根八里

みのかも文化の森美濃加茂市民ミュージアム

文字の登場、そして広まり、伊瀬粟地遺跡発掘
調査報告書、仲迫間遺跡発掘調査報告書、池奥
古墳群・仲坂古墳発掘調査報告書、市橋北野遺
跡発掘調査報告書、木ノ下遺跡発掘調査報告書

常滑市民俗資料館

陶器造り500年・知多半島の須恵器展

斎宮歴史博物館

研究紀要10、斎王の読んだ物語

滋賀県立安土城考古博物館

是非に及ばず、陸路・海路の考古

大阪府立狭山池博物館

古代の土木技術

吹田市立博物館

垂水遺跡・高城遺跡・中ノ坪遺跡・豊島郡条里
遺跡・高城B遺跡・片山遺跡・吉志部遺跡、吹
田の石器時代、高城B遺跡第2次発掘調査報告
書、すいた歴史散歩、あルック吹田観光マップ

東大阪市立郷土博物館

縄文と弥生のつながり

茨木市立文化財資料館

平成12年度発掘調査概報

八尾市立歴史民俗資料館

河内の手織機、久宝寺寺内町と戦国時代

橿原市千塚資料館

かしはらの歴史をさぐる9

春日市奴国の丘歴史資料館

春日市埋蔵文化財年報6～8、春日市文化財調
査報告書第25集 上平田遺跡、同第26集 大土
居水城跡、同第27集 野藤遺跡、同第28集 大
土居水城跡、同第29集 須玖盤石遺跡、同第30
集 大荒遺跡・天田遺跡、同第31集 大坪遺跡、
古代の器

佐賀県立博物館

弥生都市はあったか

- 東北学院大学東北文化研究所
紀要第33号
- 早稲田大学本庄考古資料館
早稲田大学本庄校地文化財調査報告9 大久保山Ⅸ、同10 大久保山Ⅹ、下野谷遺跡Ⅲ
- 早稲田大学會津八一記念博物館
縄文の匠
- 早稲田大学考古学会
古代第110号
- 日本女子大学史学研究会
史艸第42号
- 日本大学史学会
史叢第64号
- 大阪大学文学部埋蔵文化財調査室
待兼山遺跡Ⅲ
- 大手前大学史学研究室
神戸市・下山手遺跡
- 神戸女子大学史学会
神女大史学第18号
- 奈良大学文学部文化財学
文化財学報第19集
- 天理大学附属天理参考館
天理参考館報第14号、常設展示図録
- 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山大学構内遺跡調査研究年報18
- 広島大学埋蔵文化財調査室
広島大学統合移転地埋蔵文化財調査年報ⅩⅥ
- 忠南大学校百濟研究所
百濟研究第34輯
- (財)韓国文化研究振興財団
青丘学術論集第19集
- 朝鮮学会
朝鮮学報第180輯、同第181輯
- 都立学校遺跡調査会
小石川 駕籠町遺跡Ⅲ
- 文京区遺跡調査会
文京区埋蔵文化財調査報告第23集 駒込富士前町遺跡Ⅱ地点
- 大成エンジニアリング(株)埋蔵文化財調査室
東京都新宿区牛込城址Ⅱ、東京都新宿区馬場下町遺跡
- 加藤建設(株)埋蔵文化財調査部
市谷加賀町二丁目遺跡Ⅱ
- 落川・一の宮遺跡調査会
落川・一の宮遺跡Ⅱ
- 余田遺跡新庁舎地区調査団
余田
- (株)吉川弘文館
- 古代を考える 稲・金属・戦争
(株)ジャパン通信情報センター
文化財発掘出土情報 第237号
- 富山市日本海文化研究所
富山市日本海文化研究所紀要13号、同15号
- (財)古代学協会
古代文化 第53巻第10~12号
- 埋蔵文化財研究会
環境と人間社会発表要旨集
- 郵政考古学会
郵政考古紀要第30号(通巻第39冊)
- 蛭池西遺跡調査団
蛭池西遺跡
- 古代を考える會
古代を考える58 吉野ヶ里遺跡の検討、同59
馬見古墳群と葛城氏の検討
- 六甲山麓遺跡調査会
加茂遺跡第8次調査
- 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
タニ窯跡群A 6号窯発掘調査概報2
- シルクロード学研究センター
シルクロード学研究叢書4
- (財)京都市埋蔵文化財研究所
研究紀要第7号、京都市埋蔵文化財研究所調査報告第19冊 平安京左京二条二坊十町、つちの中の京都2
- 京都府教育委員会
京都の文化財(第19集)
- 舞鶴市教育委員会
舞鶴市文化財調査報告第32集 上佐波賀遺跡・天台南谷遺跡発掘調査概要報告書、同第33集 浦入遺跡群発掘調査報告書、同第34集 泉源寺遺跡第2次発掘調査概要報告書、同第35集 田辺城跡第21次・22次発掘調査概要報告書
- 城陽市教育委員会
城陽市埋蔵文化財調査報告書 第39~41集
- 山城町教育委員会
京都府山城町埋蔵文化財調査報告書第27集 神童子稲葉古墳群、同第28集 光明山寺遺跡
- 日吉町郷土資料館
明治生まれのおばあちゃんのお産
- 城陽市歴史民俗資料館
平山郁夫作品展
- 京都大学考古学研究会
第50トレンチ
- 立命館大学考古学論集刊行会
立命館大学考古学論集Ⅱ
- 向日市

再現・長岡京

磯野浩光

歴史と地理 第550号

大野左千夫

渡来文化の波、和歌山市立博物館研究紀要15、
紀伊考古学研究 第4号

樋口隆康

シルクロード学研究叢書1～3、古代大和の石
造物、平城京—その歴史と文化

森島康雄

豊臣秀吉と京都

山本祐作

東播磨第8号

編集後記

年度末の慌ただしい季節となりましたが、情報83号が完成しましたのでお届けします。

さて、本号では、発掘調査の成果についての抄報、投稿、共同研究報告と盛りだくさんの内容になりました。また、府内遺跡紹介は、近辺にある遺跡をまとめて紹介し、遺跡巡りのガイドブックともなるような形にしてみました。

よろしくご味読下さい。

(編集担当=森島康雄)

京都府埋蔵文化財情報 第83号

平成14年3月28日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

印刷 (株) 大 光 社

〒604-0086 京都市中京区小川通丸太町下ル中之町76
Tel (075)222-1333 (代)



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER